



RECONCILIATION AND CO-OPERATION

和解と協力

比叡山宗教サミット20周年記念
世界宗教者
平和の祈りの集い



日本宗教代表者会議

THE JAPAN CONFERENCE OF RELIGIOUS REPRESENTATIVES

比叡山宗教サミット20周年記念

和解と

世界宗教者平和の祈りの集い

協力

日時:2007年8月3日(金)・4日(土)

場所:国立京都国際会館・比叡山

2007.8.3

オープニング

PROLOGUE



「比叡山宗教サミット20周年記念
世界宗教者平和の祈りの集い」
は、民族・宗教の違いから悲惨な
内戦を経たボスニアの子ども達
と、被爆地広島からの子ども達の
平和を願う声から始められた。

「戦争やテロの原因は、協力を考えず力で物事を動かそうとす
ることだ」と指摘した秋山さん



左から、ボスニアから参加したカルケリヤ・サジダ、ビディン・イリス、ドッカル・イバナ、ドウチッチ・アドナの皆さん。
広島からは久保田滋子、勢村成美、秋山愛美、秋山美和の皆さんが平和を願うメッセージを届けた

ボスニアと広島から届いた子ども達の声



世界宗教者平和の祈りの集い

久保田さんは「国という名の壁を越えて協力しあおう」と発言した



ボスニアのコミュニティー・ガーデンからきたサンダさんは「誰にも銃や麻薬を使って欲しくない。皆が幸せで自由に暮らして欲しい」と訴えた



ボスニアのコミュニティー・ガーデン取材している写真家の大塚敦子さん。今回のボスニアと日本を結ぶ窓口となった



子ども達は、自分が描いた絵を見せて、それぞれに平和を願うメッセージを発した

2007.8.3

開会式典

OPENING
CEREMONY

平和のために集う宗教者たち



開会挨拶を述べる濱中光礼事務総長



開会式典の壇上に並ぶ海外代表者



壇上の名誉議長、名誉顧問をはじめとする日本宗教代表者会議の役員

世界宗教者平和の祈りの集い



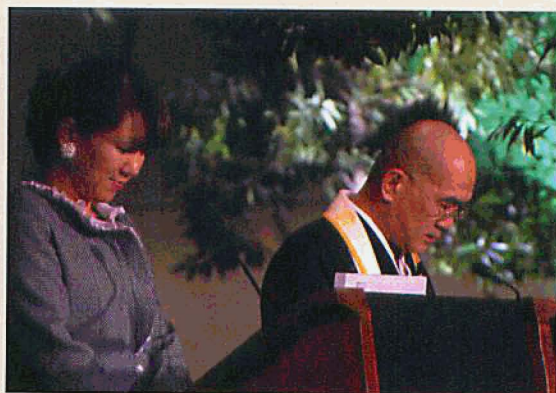
海外代表者登壇を拍手で迎える日本宗教の代表者



満場の京都国際会館



歓迎挨拶を述べる矢田部正巳議長



司会進行をつとめる小林祖承総務部長

2007.8.3

メッセージ

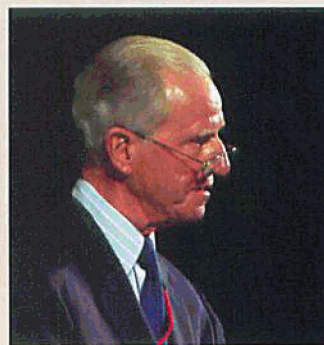
MESSAGE

国連事務総長メッセージ



潘基文国連事務総長

今日、橋を架け直し、共通の価値観と願いの共有を強調し、持続的・建設的な文化間対話に入ることが緊急な必要課題です。



国連事務総長のメッセージを披露するジョセフ・バーナー・リード国連事務次長

ローマ教皇メッセージ

皆様の祈りや協力が、神の平和に満たされ、暴力の非合理性を克服する平和の大義の証し人となろうという固い決意が益々強められることを。

ローマ教皇のメッセージを披露するフェリックス・マチャド教皇庁諸宗教対話評議会次長



半田孝淳天台座主と会見するベネディクト16世

今回の祈りの集いには、初めて国連の潘基文事務総長からメッセージが届けられ、またカトリック、イスラーム、仏教の各宗教指導者からもメッセージが寄せられた。

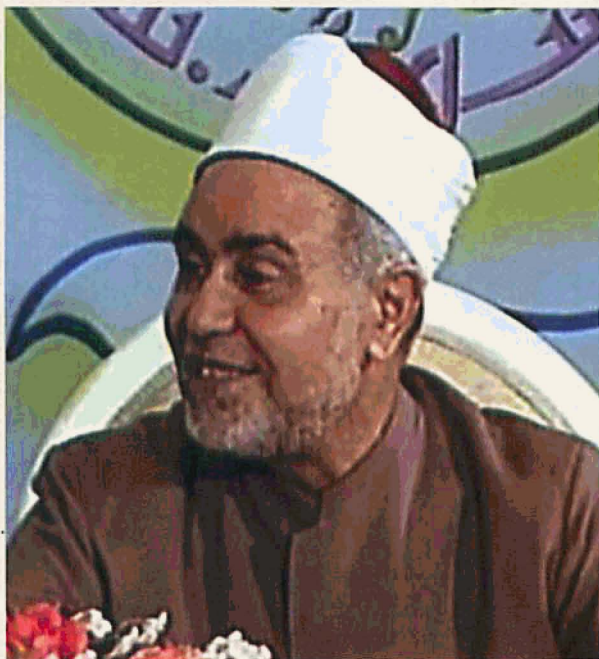
世界宗教者平和の祈りの集い

アズハル総長メッセージ



アズハル総長のメッセージを披露する
ムハンマド・アブドルファディール・アブドル
アジーズ アズハル大学副学長

愛、共生、寛容、人の根本は
一つである。



ムハンマド・サイド・タンターウィ アズハル総長

世界仏教徒連盟会長メッセージ

争いをする者は、
それが滅びに至ることを知らない。
この真理を知る者は、
争いを鎮める。



世界仏教徒連盟会長のメッセージを披
露するパロップ・タイアリー世界仏教徒
連盟事務総長



バン・ワナメティー世界仏教徒連盟会長

2007.8.3

記念講演

MEMORIAL
SPEECH

1

暴力的な手段による真理の強要は、
人間の尊厳に対する罪であり、
それは、究極的には、
我々が信じている神に対する
罪にもなります。



「和解と協力」について記念講演を行うフェリックス・マチャド
教皇庁諸宗教対話評議会次長

2007.8.3

記念講演

MEMORIAL
SPEECH

2

私たちすべては、過激主義やその他の誤った
キャンペーンの要求に対して共に立ち上がり、
不正義な戦争・憎しみや災いといった
不健全な現象から人類や社会を守るために
協力することができます。



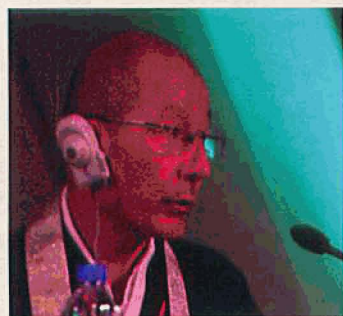
「和解と協力」について記念講演を行うアブドゥラー・アルレヘダン
イスラム問題・寄進・宣教・善導省イスラム問題審議官

2007.8.3

シンポジウム

SYMPOSIUM

記念講演に引き続いて「和解と協力—宗教・民族・国境を越えて—」をテーマとするシンポジウムが開かれた。キリスト教、イスラーム、仏教、ユダヤ教、諸宗教の代表に加えて、ボスニア・コミュニティ・ガーデンからも参加し、世界平和実現への道が話し合われた。



コーディネーターをつとめた
杉谷義純WCRP日本委員会
前事務総長



8月3日の日程を終え、
閉会挨拶を行う
栗田行雄常任委員



2007.8.3

歓迎 レセプション

WELCOME
RECEPTION

世界宗教者平和の祈りの集い



河野洋平衆議院議長も駆けつけ関係者を激励



庭野日鏡議長による主催者挨拶



アトラクションの尺八と琴の演奏



司会の中村憲一郎 渉外・接遇部長



オープニングで披露されたボスニアの子ども達の絵が、白柳誠一名誉顧問と出口紅名誉顧問に贈呈された



乾杯は安原晃議長

2007.8.4

フォーラム1

FORUM 1

諸宗教間の対話と協力——紛争解決から平和構築のために——



コーディネーター・山田経三師



進行役・黒住宗道師



2007.8.4

世界宗教者平和の祈りの集い

フォーラム2

FORUM 2

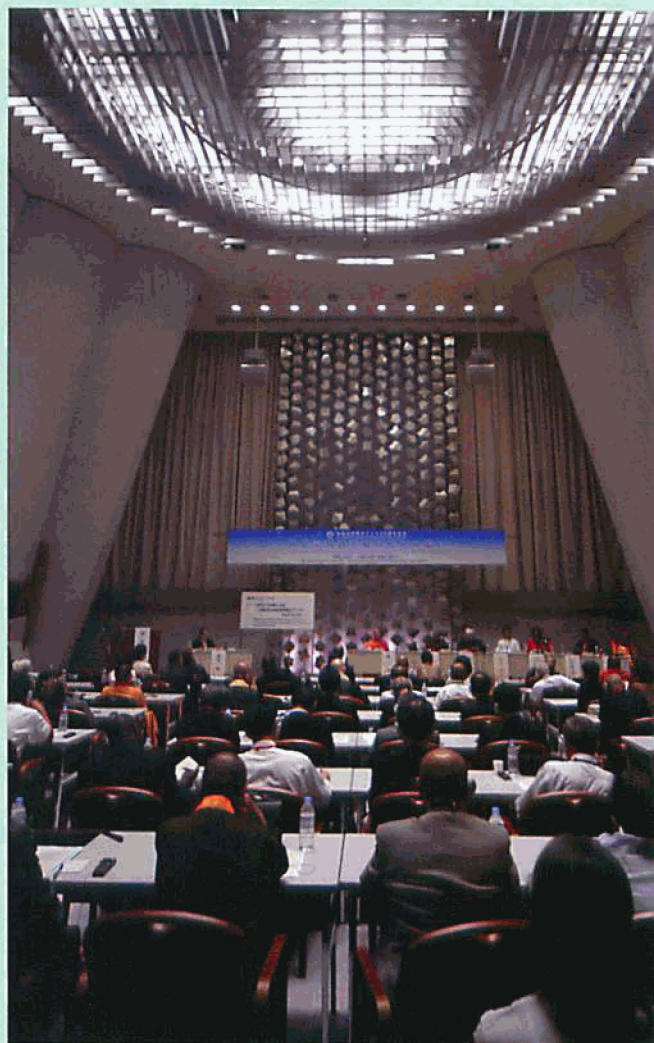
自然との和解と共生——宗教者は地球環境保全のために何ができるか——



コーディネーター・菅田稔師



進行役・稲貴夫師



2007.8.4

世界平和の祈り式典

CEREMONY OF
PRAYER FOR
WORLD PEACE



ジョセフ・バーナー・リード国連事務次長による挨拶



宮本けいし運営委員長による開会挨拶



海外代表者入場

2007.8.4

世界平和の鐘

WORLD PEACE
BELL

世界宗教者平和の祈りの集い

吉田富冶郎ワールドピース
ベルアソシエーション会長
より清原恵光延暦寺執行
に「世界平和の鐘」の目録
が手渡された



ボスニアと広島子ども達によって、午後3時30分、「世界平和の鐘」の打ち初めが行われた



比叡山行院で修行中の僧侶たちも平和の鐘を聞く



打ち初めを見守る「天台青少年の比叡山の集い」で
登叡した青少年たち

2007.8.4

平和の祈り

PRAYER FOR WORLD
PEACE



アダム・ブネル聖フランシスコ会
国際センター諸宗教対話局長から
「アッシジメッセージ」が届けられた



比叡山メッセージを発表する山北宣久議長(中央)



半田孝淳名誉議長
(天台座主)による
主催者代表挨拶



地球を模した球形は、参加者が折った千羽鶴で満たされてゆく。平和と自然の象徴である

世界宗教者平和の祈りの集い



新日本宗教団体連合会



仏教



教派神道連合会



キリスト教



神道



ヒンドゥー教



ゾロアスター教



民族宗教



諸宗教組織



イスラーム



大塚喜直常任委員による閉会挨拶

世界宗教者平和の祈りの集い

2007.8.4
記者会見
さよならレセプション

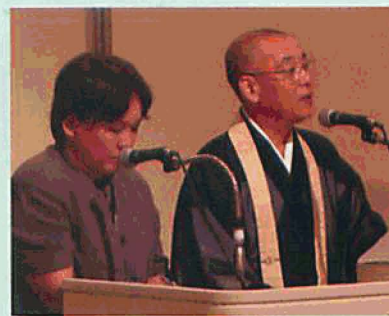
PRESS INTERVIEW
FAREWELL RECEPTION



記者団からの質問に答える主催者と参加者



さよならレセプションを締めくくる田中恒清常任委員長



司会の谷晃昭財務部長

「またお会いしましょう…」

比叡山宗教サミット20周年記念

R

E

R

T

世界宗教者
平和の祈りの集い

発刊にあたって

比叡山宗教サミット二十周年記念「世界宗教者平和の祈りの集い」が日本宗教代表者会議の皆様のご協力を得て、世界十八カ国から様々な宗教代表をお招きし開催されました。

私も事務総長として努めさせていただきましたが、この二十周年記念の集いが多い成果を収め、盛会裏に終了できましたことは、田中恆清常任委員長、そして宮本けいし運営委員長をはじめとする皆様と、事務局の方々の献身的なご奉仕によるものと、心より感謝申し上げます。

今回の集いでは「和解と協力」をメインテーマとし、話し合いをお願いいたしました。二十年にわたる対話を通して私たち相互の理解と信頼の絆はますます深く強くなっていきます。私たちは、この信頼の絆をベースとして、疑念と憎悪から生じる暴力と破壊の連鎖に陥っている人々に自省と寛容を促し、互いを許す勇氣こそが平和への重要な一歩であることを説かなくてはなりません。

また一方で地球は、人間同士が互いの利益や權益を巡り、争いを続けている間に、止まるところを知らない拡大消費文明によって、危険なまでに蝕まれてしまいました。地球温暖化は人類を含め、生態系全体をも、存続の危険に追い込んでいます。今、このよ

うな時に、人間だけが我欲による争いをして、時間の余裕が果たしてあるのでしょうか。今必要なのは互いに持っている知識や技術を出し合い、地球環境の復元に一致協力することではないでしょうか。

紛争の傷跡もまだ癒えないボスニア・ヘルツェゴビナから来ていただいた四人の子供たちや、平和都市広島の子供たちが思い描く、平和な世界、美しい地球が一日も早く実現しますように、私たちはそれぞれの立場で、この「和解と協力」について訴え続けていかなくてはならないと思っています。

我が宗の祖師最澄上人は「一隅を照らす」とのお言葉を遺されておりますが、一人一人の灯火は小さくとも、ともに照らせば大きな明かりとなります。

私たちはまた来る年も、その次の年も、永劫にこの祈りを続けてまいります。そして人々の望む真の平和社会実現のため、皆様とともに働かせていただきたいと思っております。

最後にもう一度、今回お世話になった皆様、また、遠路ご参加いただいた皆様に心より御礼を申し上げます。ありがとうございました。

二〇〇八年三月三十一日

日本宗教代表者会議事務総長

濱 中 光 礼

(天台宗事務総長)

世界宗教者
平和の祈りの集い

C O N T E N T S

目次



比叡山宗教サミット二十周年記念 世界宗教者平和の祈りの集い

目次

カラーグラビア

2

発刊にあたって

20

目次

24

比叡山メッセージ

26

開催趣意書——和解と協力

28

平和の祈りによせて

日本宗教代表者会議各代表者あいさつ

32

ボスニア・コミュニティ・ガーデン

38

世界平和の鐘

39

日程

40

会場案内

42

メッセージ

国連事務総長 潘 基文氏

44

ローマ教皇 ベネディクト十六世聖下

45

アズハル大学総長 ムハンマド・サイード・タンターウィ氏

46

世界仏教徒連盟会長 パン・ワナメティール氏

49

記念講演

テーマⅡ 和解と協力

フェリックス・マチャド師

アブドゥラー・アルレヘダン氏

60 52

シンポジウム

テーマⅢ 和解と協力——宗教・民族・国境を越えて

70

フォーラム

① 諸宗教間の対話と協力——紛争と和解から平和構築のために

② 自然との和解と共生——宗教者は地球環境保全のために何ができるか

116 94

世界平和祈り式典

「平和の鐘」贈呈にあたって ジョセフ・バーナー・リード氏

主催者代表挨拶 半田孝淳師

アシジメッセージ アダム・ブネル師

146 144 138

資料

◇ 日本宗教代表者会議経過報告

◇ 日本宗教代表者会議規約

◇ 日本宗教代表者会議組織図

◇ 海外参加者一覧

◇ 日本宗教代表者会議役員名簿

◇ 新聞報道

162 155 154 153 152 150

あとがき

170

比叡山メッセージ

比叡山宗教サミット二十周年を迎えるに当たり、世界のすべての人々に心からのメッセージを送りたいと思う。

今このかけがえのない「生命の惑星」地球は、現代人の様々な暴力によって人類史上空前の危機に瀕している。

二〇〇一年九月十一日、米国で引き起こされた同時多発テロは、それを象徴的に示すものであった。以来世界各地でテロが続発、多くの無辜の市民が理不尽に次々と尊い生命を奪われるだけでなく、その流れは一向に止まるところを知らない。一方、国際社会がテロに目を奪われている間に、アフリカでは国家の名において堂々と虐殺が行われ、それが見過ごされている。さらには核兵器の拡散がこれらの暴力を助長するようなことになれば、人類の未来は暗転するであろう。広島、長崎の原爆投下による悲劇が、それを如実に物語っている。

そして人間の営みは、さらに環境問題においても一層深刻な事態を招いている。地球の温暖化は、地球上のすべての生命に死を与えかねない重大な影響をもつものである。今そのことを真剣に考えなければ、取り返しのつかないことになる。

われわれが、直面しているこれらの問題を考えるとき、その暴力の原因はわれわれ自身に行きつくことを知らなければならぬ。

先進国や石油産出国でのテロが大きく報道され、発展途上国における殺戮が無視されている状況は、近代社会がいつの間にか、神仏にかわって経済至上主義を最高の規範としていくことの証左であろう。その結果、人々が物の豊かさを平等に享受するのではなく、富の偏在と差別の増長を生むことになってしまった。このゆがんだ状況は、富を得るための暴力だけでなく、差別を乗り越える手段としての暴力を顕在化させ、貧困や抑圧に苦しむ人々の暴力への共感すら得るものになっている。その結果、殺傷と憎悪の連鎖を生み出すというさらに深刻な状況に至ってしまった。

そのうえ、民族と宗教の違いは、敵と味方を峻別する装置に追いやられ、対立を激化させる役割を課せら

比叡山宗教サミット20周年記念 世界宗教者平和の祈りの集い

れているのである。

一九八七年八月、われわれは比叡山において、宗教サミットを開催し、共に世界平和を祈った。これは宗教の違いが紛争の激化を煽ったという過去に対する深い反省に基づくものである。一方宗教者自身が、閉鎖的であり、宗教が異なることによって対立し、あるいはお互いに敬意をもてないのであれば、それは自らの信仰に忠実でないばかりか、人々を誤って導くことに気がついたからである。

以来二十年の歳月が流れる中で、日本の宗教者は宗教の垣根を越えて、国際的な平和の祈りの集いを共催し、宗教間の対話と協力関係を深めてきた。さらに世界各地でも、諸宗教間の相互理解は着実に進められ、共に平和のために祈り、紛争解決や難民の支援などに汗を流してきた。

ところが、今日の状況を見ると、われわれの努力がいまだ足らざることを率直に認めざるを得ない。そこでわれわれは決意を新たに、さらに訴え続けるものである。

宗教そのものは本来対立すべき存在でないこと、さらに「対立と憎悪」からは、解決の道が決して生まれないことを知るべきである。一方、神仏の名の下に紛争を起こしたり、続けることに対し、われわれは強く抗議する。

そして、対立は相手を力によって倒すことではなく、対話を通じた相互理解を深めることによって、解決の糸口が見つけられるものである。それゆえわれわれは愛と慈悲に基づく「和解と許し」によってこそ、初めて平和がもたらされることを強く確信する。

われわれはこのことを、改めてイラクをはじめ、紛争の当事者となっている人々に訴えたい。

さらにわれわれは、一人ひとりが地球温暖化防止のための、ささやかなりとも行動をはじめることと呼びかけるものである。

しかし平和への道は険しい。そこでわれわれは、平和のために一層働くことを誓うと共に、われわれの願いが必ずや、世界の多くの人々の心を通じて、神仏に聞き届けられることを切に祈る。

二〇〇七年八月四日

世界宗教者平和の祈りの集い参加者一同

開催趣意書——和解と協力

二〇〇一年九月十一日、アメリカで引き起こされた「同時多発テロ」は人々を震撼させ、この悲劇を境にして世界は一変しました。その後テロは続発し、その恐怖は今なお世界を覆っているばかりか、イラクや中東の混乱にみられるように更に拡大する危険を孕んでいます。このように人類は二十一世紀の今日も問題の解決を武力に頼り、憎悪と報復による暴力の連鎖を愚かしくも繰り返し、無辜の市民が大きな犠牲を強いられています。そしてこれらの一連のテロや国際紛争の原因に「宗教の独善性が絡んでいる」という非難が投げつけられました。

確かに宗教はかつて戦争に協力したり、又紛争当事国の民族精神を鼓舞するために利用されたのは事実であり、私達宗教者は常にそのことを忘れてはなりません。しかし、いかなる宗教教義も必然的に紛争を起こすものではなく、又平和を求めない宗教はありません。今世界各地で起きている紛争の根幹には、必ず利害の対立があります。それに目を塞ぎ、原因を宗教にのみ結びつけることは、余りにも短絡的であります。そしてこのことがいかに紛争を激化させ、人類を危険な方向に導いていくかを知らなくてはなりません。

私達は一九八七年八月、比叡山上に集い、平和のために真摯な祈りを捧げ、全世界にメッセージを発信しました。私達はまず「自らの宗教的伝統と信仰を忠実に守りながら、平和と人間の大義のために献身しよう」という一九八六年十月のアッシジにおける平和祈願の日の開かれた精神を再確認しました。そして常に弱者の側に立つことを心がけ、内面的変革を希求しながら、平和のために祈り、又、働くことを決意したのであります。以来、比叡山メッセージの精神は世界各地に引き継がれ、宗教の垣根を越えて平和への努力が積み重ねられてきました。一方、私達の力は余りにも小さく、努力の足らざることを認めざるを得ません。しかし、私達は決して平和への歩みを怠ったり、止めたりするわけにはいかないのであります。

人類は今、暴力によって危機に立たされているばかりでなく、その飽くなき欲望は、環境問題を一層深刻なものにしました。二酸化炭素の過剰な排出などが地球温暖化を招き、異常気象や生態系の破壊は人類の生存そのものにも警鐘を鳴らしております。そのうえ、開発による経済格差は一段と進み、貧困・飢餓・差別

などの南北問題がより深刻度を増しているばかりか、テロや核拡散問題の陰にかくれて忘れ去られようとする
らしているのです。

正しく人類は今日非常に困難な問題に直面し、その解決策を模索し呻吟しているといっても過言ではありません。そこで私達は全世界の人々に今こそ「対立と憎悪」ではなく「和解と許し」こそが世界平和への近道であり、人類の未来に希望をもたらしものであることを、今回の比叡山宗教サミット20周年記念「世界宗教者平和の祈りの集い」において改めて訴えるものであります。

対立と憎悪から身を守るために、いくら武装しても危険は少しも回避されないことを知るべきであります。また、いくら神の正義や仏の智慧を語っても、現実には力によって相手に罰と償いを求めるならば、それは、対立と憎悪の再生産にしか繋がりません。まず、対立するものどうしの相互理解が不可欠なのであります。

そして、相互理解とは相手の立場に立つことであり、それは自らを深く問うという宗教的な営みであります。

そのためには、真摯な反省に立った神仏への深い祈りを通して、神の愛と仏の慈悲の実践をすることが最も大切であります。

私達は、神仏の加護を信じ、神仏の許しを乞い、自らを変革して、それぞれが和解に向けて力を尽くすとき、必ずや未来に全人類が睦み合い、協力し合う世界が訪れることを確信します。その日まで、営々と弛ま
ず努力を続けていこうではありませんか。

そのために、ここに比叡山宗教サミット20周年を迎えるに当たり、比叡山上に集い、世界の宗教指導者と共に、和解と協力の日が訪れるよう真剣な祈りを通じて、平和のために働く決意を新たにします。

世界宗教者
平和の祈りの集い

G R E E N I N G

平和の祈りによせて

日本宗教代表者会議

名誉議長 半田孝淳師

名誉顧問 出口 紅師

名誉顧問 大道晃仙師

名誉顧問 白柳誠一師

名誉顧問 久邇邦昭師

名誉顧問 深田充啓師



連帯と信頼をより深く

日本宗教代表者会議名誉議長 第二五六世天台座主 半田孝淳

世界の代表的宗教指導者が、比叡山と京都国際会館に集い比叡山宗教サミット二十周年記念「世界宗教者平和の祈りの集い」が開催されます。

今回は、初回、十周年に続いて、日本宗教界が結集して実行母体である「日本宗教代表者会議」を結成して臨む、三度目の大きな世界宗教者平和の祈りの集いであります。

今日までこの宗教対話と祈りを連綿と続けてこられた先達の皆様に、深い敬意を表するものであります。

この二十年間で、世界は大きく変わりました。特に顕著なのは、東西の冷戦時代には、イデオロギーで押さえつけられていた民族主義や、宗教原理主義というものが、闘争性をもって台頭してきたことでありましょう。

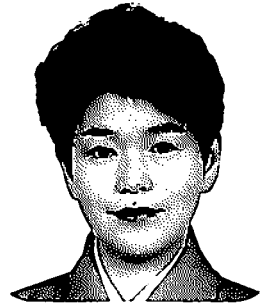
今回のテーマは「和解と協力」であります。これは現在、世界が引きずられている「対立と憎悪」に対して、宗教者からの明確な意思表示となるものです。対立するものどうしが

和解するためには、それぞれの自己変革が必要です。そのために、それぞれの宗教は、どのように行動すればよいのか、今回の集いは、その方向性をさし示すものとなるでしょう。

宗教を信ずることで、独善や、排他的になつてはならないと存じます。それは、特に私が、忘己、無我を本質とする仏教徒の立場にあるからではなく、それぞれの宗教が、他の宗教を尊重し尊敬することが、人類の未来と世界平和を目指す唯一の道であると信ずるからであります。今回の平和の祈りの集いにおきまして、信仰を持つ者どうしの連帯と信頼がより深く、固い絆で結ばれ、そのことが人類の未来に繋がることを願ってやみません。

今回の集いを開くにあたりまして、ご協力を頂きましたすべての関係者に深く感謝申し上げます。

合 掌



叡智を結集して平和の到来を

日本宗教代表者会議名誉顧問

大本教主

出口 紅

比叡山宗教サミット二十周年記念「世界宗教者平和の祈りの集い」が、国内外の多くの宗教者が集い、盛大に開催されますことを心からお慶び申し上げます。また本会の準備・運営に、日夜ご尽力賜りましたご関係の皆さま方に心から敬意と感謝を申し上げます。

一九八六年、教皇ヨハネ・パウロ二世聖下の呼びかけにより開催されました「アッシジ世界宗教者平和祈禱集会」の崇高な精神は、翌年「第一回比叡山宗教サミット」へと引き継がれ、以来二十年もの間、毎年比叡山頂において「世界平和を祈る集い」が続けられてまいりました。このように洋の東で、宗教・民族・思想の壁を越え、世界平和が祈り続けられておりますことは誠に尊く意義深いことであります。

世界では依然、国家・民族・宗教間の対立が続き、地球環境破壊による大規模な自然災害も頻発し、日々多くの尊い生命が犠牲となっております。このような状況において大切な

ことは、平和への祈りと協調への歩みを決して止めてはいけないことでもあります。

とりわけ世界唯一の被爆国である私たち日本の宗教者が、世界に率先して、神仏への深い祈りの中で「許し」と「寛容」の精神を実践し、世界の諸宗教との対話・協力・連帯を更に強める「架け橋」としての使命を果たすことが肝要であると存じます。

私たち個々の力は微々たるものですが、着実な歩みを続けることにより、必ず世界に平和が到来するものと確信しております。

本会が神仏のご加護のもと、世界の宗教者が相互に理解協力し合い、共に叡智を結集して、すべての尊い生命が光り輝く、平和で穏やかな日の到来に向かって大きく前進する集いとなりますことを心よりお祈りしご挨拶とさせていただきます。



いのちを慈しむために

日本宗教代表者会議名誉顧問

全日本仏教会会長／曹洞宗管長

大道晃仙

昨今、情報化社会の中、世界各地からさまざまな声が聞えてまいります。その声の多くは、欣幸な出来事より、不安と不信に満ちたものばかりであります。

各地で起きる争いのために、何ものにもかえがたい尊い「いのち」が失われ、多くの人々はおびえ苦しみ、心を病む人が増えていきます。お金や物ばかりが優先され、自然への慈しみの心は軽んじられ、人類は大きな危機にさらされており、人は「いのち」の尊さや、互いの絆の大切さを見失い、他を思いやる心をなくしてしまっています。

いまこそ、宗教者として、これらを命題とし、全世界から暴力・貧困をなくし、抑圧にさらされている人びとを救い、戦争の愚かさと平和の大切さを訴え続けなければなりません。

さらに、人類は、文明の発展とともに、自然を破壊し、環

境を汚染してきたことも事実であり、反省しなければなりません。

人類をはじめ、すべての生きとし生けるものを支え続けてくれたのがこの地球環境なのです。限りある「いのち」を一つの地球で育むためには、相互理解と自己啓発によって、たすけ合い、人間同士の絆、自然との絆を深め、その尊さを知ることによって平和を実現し、恵まれた自然とすべての「いのち」を慈しむことができたとき、共生の輝きに包まれるのだと思います。

ここに世界の宗教指導者の方々と一堂に会し、比叡山宗教サミット二十周年記念「世界宗教者平和の祈りの集い」が開催されますことは、全人類の未来に向けた一助となることと存じます。

合 掌



希望なきところに希望を

日本宗教代表者会議名誉顧問

カトリック枢機卿

白柳誠一

「アッシジの精神」を引き継いで、一九八七年八月に山田恵諦天台宗座主の提唱によつて生まれた「比叡山宗教サミット・日本宗教代表者会議」は、本年二十年の大きな節目を迎える。一九八六年十月イタリア、ウンブリア地方の典型的な中世の面影を残す山上の町アッシジで、ヨハネ・パウロ二世教皇の呼びかけで世界の諸宗教代表者百二十四名が集い、各宗教の伝統と形式により、各自が信じる人間の力を遥かに超える存在〔神仏〕に平和を求める叫びにも似た熱烈な祈りが捧げられ、平和のために働く決意を新たにした。この祈りの集いは、諸宗教が混合主義（シンクレチズム）に落ち入ることなく、互いに違いを尊敬しあい、各自、自分の信仰に基づく祈りであつたが、不思議にも人々の心を揺り動かし、共にいる喜び、共に祈る力、共に働く（連帯）決意を生み出した。

それは分裂した世界で悩み苦しむ人々に、日々接している宗教者に特別な靈感（インスピレーション）を齎し、新たなヴィジョンが生まれた。

年毎に繰り返される比叡山における祈りの集いは、平和への希望を失いがちな私たちに、「希望なきところに希望を」もたらし、新しいエネルギーを与えてくれる。



理念から実践へ

日本宗教代表者会議名誉顧問

神社本庁統理

久邇邦昭

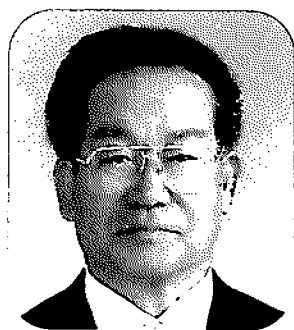
日本人の多くは、宗教観の対立を身近な問題としては実感していません。ですから、諸宗教が互いに対話の重要性を認識し、一堂に会して話し合いの場を持つことは、一見、簡単なことのように考えてしまえます。しかし、今日に至る世界の情勢は、それが非常に困難であることを示しています。

歴史を振り返れば、宗教は度々争いの道具として利用されてきました。そして、残念ながらその基本的構図は今も変わっていません。これまでも宗教間対話を主題とする会議が世界各地で開かれ、宗教対話の重要性は、理念として理解されつつあります。しかしながら、宗教に名を借りた争いは現在も絶えず、人々の憎しみが消えることはありません。私たちはそうした現実を直視し、深く反省しなければなりません。

人類の平和と共存を求めるはずの宗教者までもが他者を理解しようとせず、結果として国際的な争いを助長してはいないでしょうか。自らが独善的になっていないか常に戒め、他

者を尊重するという宗教者としてあるべき姿を求め、実践しているでしょうか。私たちは改めて、自らが他者を一方的に批判する側に立つてはいないかということを問い直すべきでしょう。

日本の神話には、太古の昔から神々が対話によって問題の解決を図ってきた姿が描かれています。また、世界の国々においても、宗教は神仏の調和の中にこそ平和が見いだされることを人々に教えてきたはずです。二十周年を迎える今回の比叡山宗教サミット「世界宗教者平和の祈りの集い」に臨み、私たちはこのような神々の姿に倣い、理念を掲げるのみでなく、実践へと向う気持ちを新たにしなければなりません。世界の宗教者が共に同じ気持ちを抱き、行動してゆくことを強く信じる次第です。



弛まぬ努力を

日本宗教代表者会議名誉顧問

新日本宗教団体連合会名誉理事長

円応教教主

深田 充啓

今から二十年前、ここ比叡山山上に集い、共に平和招来の祈りを捧げ、全世界に向けて平和メッセージを発信させていただきました。

しかし、その後の二十年を見ますと、宗教や民族対立による紛争の激化。そしてそれに伴う報復の連鎖。

こういった現状を見ますとき「私たちは二十年間、いったい何をしてきたのだろうか」と、自責の念で一杯でございます。

しかし、希望の光も見えてまいりました。それは、各紛争地域などで、宗教や民族の壁を乗り越え、非暴力による紛争解決に立ち上がる人々が生まれ、そしてその活動が組織化してきているということです。

私たちの個々の力は小さいかもしれませんが、しかし、点の活動が線となり面となるよう、私たちは弛まぬ努力を続けてゆかなければなりません。

湾岸戦争の後、第二六四代ローマ教皇故ヨハネ・パウロ二世様が、「聖戦などというものはあり得ない。宗教は神と神の

子供たち、また人類全体を愛するよう人を導かねばならない。『神を愛している』と言いながら兄弟を憎む者は、偽り者である。現に見ている兄弟を愛さない者は、目に見えない神を愛することはできない」(「ヨハネ四十二」)と、述べておられました。

私たちは、再びここ比叡山の山上に集うことができ「対立と憎悪」ではなく「和解と許し」こそが世界平和への近道であり、人類の未来に希望をもたらすもの」を心に、宗教者として、人として共に手を取り合って、世界平和のために働かせていただきたいと思う次第です。

ボスニア・コミュニティ・ガーデン

Community Garden in Bosnia



今回の比叡山宗教サミット二十周年記念「世界宗教者平和の祈りの集い」には、ボスニアのコミュニティ・ガーデンで暮らす子ども達を招きました。

かつてチトー大統領が建国した、旧ユーゴ連邦には、ボスニア・スロベニア・クロアチア・セルビア・マケドニア・モンテネグロが属していました。特に、ボスニアにはイスラム教徒のモスレム人、セルビア正教徒のセルビア人、カトリック教徒のクロアチア人と三つの民族と宗教が共存していました。

ところが、東西の冷戦が終焉したにもかかわらず、チトー亡き後、モスレム人は連邦からの独立を求め、セルビア人はセルビア人共和国を創ろうとして、一九九二年ついにボスニアで戦争が起こりました。この戦争は「民族や宗教が違うからだ」と捉えられています。実際は政治家達が「やらなければ、やられる」という恐怖を煽りだしたからだ指摘されています。そして自分たちの地域から他の民族を排除する「民族浄化」が進み、二十五万人

以上の死者と二百万人以上の難民が生まれました。

一九九五年に、国際社会の調停や宗教指導者達の努力によって戦争は終結しましたが、ボスニア・ヘルツェゴビナは一つの国境の中に二つの国を抱えるという複雑な形の国になりました。

コミュニティ・ガーデンは「民族の違うひとたちが、安心して交流できる場を創る」等を目的に、アメリカの援助団体が設立した共同農園です。ここでは、かつて憎しみ合ったモスレム人もセルビア人も、クロアチア人も一緒に仲良く働いています。ガーデンで暮らす少女は「みんなが友達になって、国や民族が違う人たちとも、自分と意見がちがう人たちとも、一緒に楽しいことを、たくさんすればいいんだ」と語りました。

彼女らの存在は、今も世界の各地で紛争が止まない状況に対して、私たちに一条の光明を与えてくれるものです。

コミュニティ・ガーデンで暮らす子ども達から「平和の種をまくことば」を聞きたいと思います。

世界平和の鐘

The World Peace Bell



本年八月四日、比叡山上で「世界平和の鐘」が打ち鳴らされます。この鐘は比叡山宗教サミット二十周年を記念して、ワールドピースベルアソシエーション本部より宗教間の垣根を越えて、この二十年間平和を祈り続けてきた日本の宗教者に対して贈られたものです。

「世界平和の鐘」とは

太平洋戦争直後、戦争の悲惨さ、核廃絶、世界平和を訴えるため「人間の心に響く切実なものを贈りたい」と故中川千代治氏（元日本国連協会会長）

が発願したものであります。そして一九五四年、世界が融和することを願い、当時の国連加盟国六十五ヶ国のコインやメダルを溶かして「世界平和の鐘」を鑄造し、ニューヨークの国連本部に寄贈しました。

国連本部では毎年九月二十一日「国連平和デー」に国連事務総長によって鐘が打ち鳴らされております。

このたび寄贈された「世界平和の鐘」は国連本部の鐘と姉妹の鐘であり、比叡山上に新築された鐘楼堂に設置されました。そして八月四日除幕式が執行され、午後三時三十分世界の宗教代表者や、戦争で肉親を失い心に深い傷を負った子どもたちの代表によって打ち初めが行われます。

平和の鐘の音を合図に比叡山全山の鐘が鳴らされ、同時に日本最北端の稚内市の鐘、最南端の石垣市の鐘が鳴らされ、さらに日本各地の寺院、教会の鐘が平和の祈りの願いを込めて鳴らされる予定であります。

鐘の音は、国境、民族を越えて人々の心を鎮め、平和への希望を呼び起こすものであります。鑄造の方法によっては武器ともなり得る金属が平和の鐘となるように、世界の人々の心も憎悪を乗り越えて、寛容の心になり、世界が平和へ向かう日が一日も早いことを祈るものであります。

日程

第1日目【8月3日(金)】

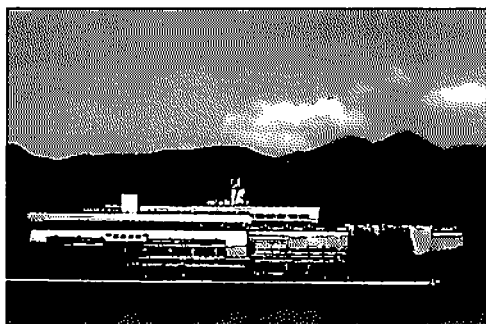
時間	日程	内容	場所
11:00 11:00~13:00	開場 受付		国立京都国際会館
13:00~13:30	オープニング	映像で綴る「世界平和への祈り・20年の軌跡」 ボスニアの子ども達の描いた絵とメッセージ披露 日本の子ども達の描いた絵とメッセージ披露	
13:30~14:20	開会式典(総司会・総務部長 小林祖承師)		
13:30	主催者登壇 開会の辞 開会挨拶 海外代表者紹介 歓迎挨拶 国連事務総長のメッセージ ローマ教皇メッセージ アズハル総長のメッセージ 世界仏教徒連盟会長のメッセージ	総務部長 小林祖承師 事務総長 酒中光礼師 議長 矢田部正巳師 国連事務次長 ジョセフ・バーナー・リード氏 教皇庁諸宗教対話評議会次長 フェリックス・マチャド師 アズハル大学副学長 ムハメド・アブドゥルカディール・アブドゥルアジーズ氏 世界仏教徒連盟事務総長 パロップ・タイアリー氏	
14:20~14:30		小休憩(10分間)	
14:30~15:50	記念講演		
14:30	記念講演者紹介 講演1 教皇庁諸宗教対話評議会次長 フェリックス・マチャド師 講演2 イスラム問題・寄進・宣教・指導者イスラム問題審議官 アブドゥラー・アルレハダン氏		
15:50~16:00		小休憩(10分間)	
16:00~17:20	シンポジウム		
16:00	テーマ 「和解と協力-宗教・民族・国境を越えて-」 進行役 小林祖承師 コーディネーター 杉谷義純師(仏教)・WCRP日本委員会前事務総長 特別ゲスト ダヴォリン・ブルジャンヴィッチ氏(ボスニア・コミュニティー・ガーデン) パネリスト ハンス・ウコ師(キリスト教) A・T・アリヤラトネ師(仏教) パネリスト ティーン・シャムスディーン氏(イスラーム) パネリスト ルネ・グーマン師(ユダヤ教) パネリスト イグナティウス・カイガマ師(キリスト教) パネリスト レオニド・キシコフスキー師(諸宗教)		
17:20 17:30	閉会挨拶 閉会の辞	常任委員 栗田行雄師 総務部長 小林祖承師	
17:30~20:30	歓迎レセプション(招待者のみ)		グランドプリンスホテル京橋 プリンスホール
17:30~18:30	受付		
18:30	開会の辞 主催者挨拶 祝辞 平和の道について 挨拶 絵とメッセージ贈呈 乾杯 アトラクション 閉会の辞	渉外・接遇部長 中村憲一郎師 議長 庭野日鏡師 衆議院議長 河野洋平氏 財務部長 谷 晃昭師 ワールドピースベルアソシエーション会長 吉田富治郎氏 議長 安原 晃師 「尺八や夢の演奏」 渉外・接遇部長 中村憲一郎師	
20:30		第1日目日程終了	

第2日目【8月4日(土)】

時間	日程	内容	場所
9:30~11:30	特別フォーラム (招待者のみ)		国立京都国際会館
9:30	フォーラム 1 諸宗教間の対話と協力	紛争和解から平和構築のために	ルームB-1
	進行役	黒住宗道師	
	コーディネーター	山田經三師(キリスト教)・上智大学名誉教授	
	パネリスト	森 辰也師(仏教)・シャンティ国際ボランティア会専務理事	
	パネリスト	マー・グレゴリオス・イブラヒム師(キリスト教)・シリア正教府主教	
	パネリスト	ワヒド・リドワン氏(イスラーム)・ムハンマディヤ国際渉外部	
	パネリスト	朱正山僧任(仏教)・韓国仏教宗団協議会副会長	
	パネリスト	クリスティーナ・リー氏(諸宗教)・フォコラーレ運動諸宗教対話センター代表	
	パネリスト	アゴスティノ・ジョバンニョーリ氏(諸宗教)・聖エジディオ共同体アジア地域責任者	
	パネリスト	安田磯雄師(仏教)・法相宗大本山薬師寺管主	
9:30	フォーラム 2 自然との和解と共生	宗教者は地球環境保全のために何ができるか	ルームD
	進行役	稲 貫夫師	
	コーディネーター	園田 稔師(神道)・秩父神社宮司	
	パネリスト	釋一誠法師(仏教)・中国仏教協会会長	
	パネリスト	サダナンダ師(仏教)・全印度僧伽協会管長	
	パネリスト	ムハムド・アブ・アル・アッディル・アブ・アル・アッディル氏(イスラーム)・アズハル大学副学長	
	パネリスト	ホミ・ダラー師(ソロアスター教)・世界ソロアスター教徒文化財団理事長	
	パネリスト	デニス・J・バンクス師(民族宗教)・ネティフ・アムカール・アムカール・アムカール(AIM)運動共同創始者	
	パネリスト	ソリチュア・ナババン師(キリスト教)・世界教会協議会(WCC)共同会長	
	パネリスト	スグエンラ・テータ・スワミジ師(ヒンドゥー教)・ス・ア・ティ・マタ修道院大修道院長	
11:30	閉会		
11:30~12:30	昼食		

13:30~15:00	受付		比叡山延暦寺
15:00~17:00	世界平和祈り式典(総合司会・儀典部長 西子木旦夫師)		延暦寺根本中堂前広場
15:00	開会挨拶 平和の鐘贈呈式 目録贈呈 挨拶 平和の鐘除幕式 平和の鐘飾打式 平和の黙祷	運営委員長 宮本けいし師 ワット・ヒ・ス・ア・アソナ・ソナ会長 吉田富治郎氏 国連事務次長 ジョセフ・バーナー・リード氏	
15:35	主催者代表挨拶 アッシジメッセージ	名譽議長 半田孝淳師 聖フランシスコ会国際センター諸宗教対話局長 アダム・ブネル師	
15:45	平和の祈り	仏教 キリスト教 ヒンドゥー教 民族宗教 イスラーム 新日本宗教団体連合会 教派神道連合会 神道 ソロアスター教 諸宗教組織	
16:40	平和な地球の創造		
16:50	比叡山メッセージ披露	議長 山北寛久師 各宗教団体の代表者ステージご登壇	
16:55	閉会挨拶	常任委員 大塚昌直師	
17:00	記者会見		一興会館ロビー

17:30~19:30	さよならレセプション (招待者のみ)		大津プリンスホテル
17:30~18:30	受付		プリンスホール
18:30	開会の辞 主催者挨拶 歓談	財務部長 谷 晃昭師 事務総長 沼中光礼師	
19:30	閉会挨拶 閉会の辞	常任委員長 田中恒清師 財務部長 谷 晃昭師	



国立京都国際会館

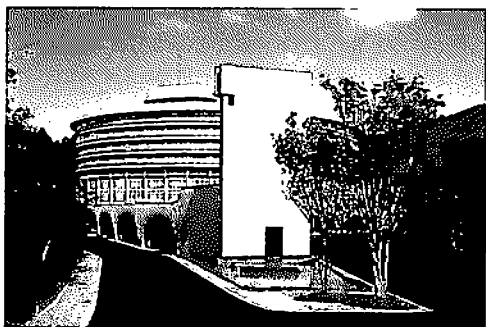
〒606-0001

京都市左京区宝ヶ池

Phone: 075-705-1234

Fax: 075-705-1100

加盟国際団体 AIPC, ICCA, UIA



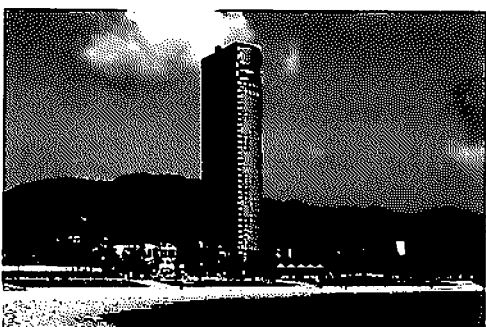
グランドプリンスホテル京都

〒606-8505

京都市左京区宝ヶ池

Phone: 075-712-1111

Fax: 075-712-7677



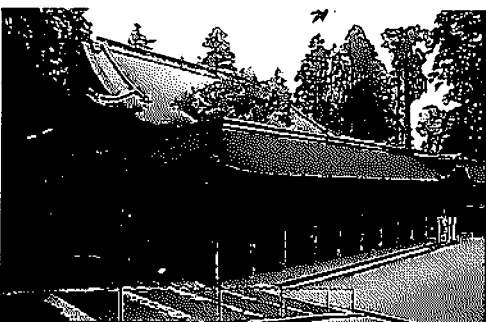
大津プリンスホテル

〒520-8520

滋賀県大津市におの浜4-7

Phone: 077-521-1111

Fax: 077-521-1110



根本中堂

比叡山

比叡山は標高848メートルで、山全体に延暦寺の堂塔伽藍が点在する。伝教大師最澄上人の開山(788)以来、日本仏教の母山として知られる。1995年には国連ユネスコの世界文化遺産の一つに指定された。本堂は根本中堂で、その堂内には1200年以上の間絶えることなく「不滅の法灯」が光り輝き続けている。

世界宗教者
平和の祈りの集い

M E S A G E

メッセージ

国連事務総長 潘基文氏

ローマ教皇 ベネディクト十六世聖下

アズハル大学総長 ムハンマド・サイイド・タンターウイ氏

世界仏教徒連盟会長 パン・ワナメティール氏

国連事務総長

潘基文

この度第二十回比叡山宗教サミット「世界宗教者平和の祈りの集い」にご参集の皆様にご挨拶をお送りすることは、私の喜びであります。

この記念すべき集いは、不寛容が増大し、異なる文化間に緊張が高まる時期に開催されます。衛星テレビとジェット機の時代に距離は崩壊しましたが、人間の分裂は依然として存続しています。むしろ、我々相互の距離が近くなったことにより、かえって「他者」（すなわち他の諸宗教、他人種、他国籍）に対する長年にわたる疑いの念が高まっているのです。その結果、ますます多くの人々が自分に親しみのあるものを優先し、多様性を拒否しているのです。

近年の出来事はこの傾向をますます加速化させることはあっても減速させませんでした。地域社会間、国家間の分裂はますます拡大し、我々がこの危機に対処しなければ、世界のより広範囲の平和と安定を損なう危険があるのです。

この現実に対処するには、多様性が美德であり脅威でないとの真実を我々はあらためて主張しなければなりません。今日、橋を架け直し、共通の価値観と願いの共有を強調し、持続的、建設的な文化間対話に入ることが緊急な必要課題です。宗教指導者は、このような交流に重要な役割を果たすことができます。宗教指導者は、慈悲、連帯、生命の尊重、他者への親切等、すべての偉大な宗教伝統の中核である価値観と理想を強調し、信者に対し、自ら欲することく他者を処遇せ

よと強く指導することができます。

この度の宗教サミットは、このメッセージを推進する共通の基盤を提供します。全世界の卓越した宗教指導者の皆様が集う討議により、単に前途に道を発見するのみならず、建設的な議論と実践的な取り組みを通じて、自らが模範を示すことができるのです。

皆様がこの問題につき一致を見られますよう、二日間にわたり様々な実践的方法を探索されることを願っております。皆様の討論は、国連の「諸文明の同盟」プロジェクトに資するものでもあります。ホルヘ・サンパイオ前ポルトガル大統領が主導する本プロジェクトは、国際社会が分裂状態に橋を架け理解を促進するため行動するという明白な必要に応えるものです。著名な個人からなるパネルの提言にもとづき、「諸文明の同盟」は複数の優先行動領域を設定し、政治と宗教の世界間の理解を改善する戦略を開発しつつあります。この度の皆様の集いはこの重要な活動を導き、「諸文明の同盟」の究極的な成功を保証するものであります。

以上申し上げた主旨により、本会議が実り豊かなものとなりますようお願い申し上げます。

ローマ教皇

ベネディクト16世

天台座主 半田孝淳猥下

この度は、「比叡山宗教サミット二十周年記念」を迎えられ、諸宗教指導者が再会する好機に恵まれたことを大変嬉しく思います。私は山田恵諦猥下の素晴らしい後継者として天台宗の座主をお努めになられた渡邊恵進猥下に対し心から敬意とご多幸をお祈り申し上げます。山田猥下は一九八六年十月二十七日にアッシジで開催された記念すべき平和祈願の日にご出席され、アッシジの精神の灯火を保ち続けるために、京都の比叡山において「比叡山宗教サミット」の道を切り拓くという大変な指導力を発揮されました。バチカン諸宗教対話評議会の議長を務めるポール・ブーパール枢機卿に対してこの会議への参加のお呼びかけを頂き心から感謝申し上げます。

私達人間のはからいを超える宗教的観点から、平和は、神からの賜物であり、私達一人ひとりが果たすべき責務であるとの理解に導かれました。まことに、今、世界中の家族や共同体に満ちている平和へ向けての希求は、私達がそのために神へ祈りを捧げると同時に、私達人類家族のすべての兄弟姉妹への努力を積み重ねるよう要請しています。

諸宗教を代表する皆様が、霊山である比叡山において一堂に会しておられるように私は、祈りを通して、皆さまと共にあることを誓います。皆様の祈りや協力が、神の平和に満たされて、暴力の非合理性を克服する平和の大義の証し人となろうという皆さまの固い決意が益々強められることを祈ります。

皆様に大いなる神のご加護と、調和と歓喜が訪れますよう心よりお祈り申し上げます。

二〇〇七年六月二十三日 バチカンより

アズハル大学総長

ムハンマド・サイド・タンターウィ

慈悲深く慈悲遍ねきアッラーの御名において

イスラームの寛大な心を体するアズハルの名において、またアズハル大イマームの名において、まず初めに皆様への平安と祝福を祈り、崇高なアッラーこそは平安であり、あの世の楽園は平安の館であることを申し上げます。

皆様方へ私は、愛、共生、寛容、人の根本は一つであるというメッセージをお送りします。この点、クルアーンに次のようにあります。

「人々よ、我はあなた方を男女に分けて、また様々な民族や部族に分けて創ったのは、お互いに知り合わせさせるためである。アッラーの下で一番尊いのは、最も篤信の者である」

人々の諸関係は公正、平等、自由に則ることを目指しており、人は広く同胞であることがその使命であるというメッセージを私からお伝えします。

残念ながら人類の現状をよく観察すると、このわれわれの星である地球は一つであった人間を分裂させる、深刻で息も詰まりそうな危機に直面していると言わざるを得ません。人々の関係は今日、闘争、紛争、殺戮が、兄弟関係と協力に取って変わってしまっています。ここで今世紀において、人々を取り巻く危機の幾つかの原因に関して、全体的な検討を加えてみたいと思います。

人々の間に差異があること自体は、アッラーの定め

られた所であり、人の自然な天性でもあることをわれわれは知っています。これに関して、クルアーンに言います。

「もしアッラーの御心ならば、人を一つの共同体にされたであろう。主が慈悲を垂れられた者を除いては、いまだに人は言い争っている（人は試されているのだ）」。この聖句によって言えることは、イスラームの思想的伝統によれば差異と言っても、本質的に二つの種類に分けられると言うことです。つまり、多様化の差異と、対立のそれです。

前者の多様化は、恵まれた差異です。なぜならばそれは人を試みさせ、相互に裨益するからです。それは実り多き競争であり、全員を向上させ利益を齎します。イスラームが教え奨励するのは、この種のものであります。

他方、後者の対立の方は、人々を分裂させるのでそれは非難されるべきものです。またそれは互いに撲滅を目指し、殺し合い戦い合う戦場に導くものです。これはイスラームが最も強く禁止し、人類社会を個人的集団的に取り巻くこととなる執拗な悪とみなされます。従って現在の人間の危機の原因の第一のものは、多様化の差異から対立のそれへと醜くも変わってしまっただことにあります。

その第二は、政治と道徳の分裂と縁切れにあります。この分裂はまだまだ増大し深まっています。そしてそれはやがて、非人間的で血まみれと言う、われわれが

世界に見ている情景へと変貌します。

私が確信して止まないのは次のことです。それは世界中で人種、国籍、制度などが違っていても、その自然な天性に従って、公正と不正、善と悪、美と醜を区別するであろうということです。また自然な天性に従って、判断の尺度がいかがげんで基準が二重になることについては、静かではあっても断固異議を唱えるだろうということです。

また私は次のことにも確信を持っています。それは人が一般的な道徳的呼びかけに耳を傾け狭い政治的な打算から解放され、広い道徳の世界に移るならば、今中東や世界のその他の地域で人々が直面しているような酷い不正はあり得ないし、どこでも人の心を傷つけているテロ、過激、暴力の勢いが高まることもないであろうということです。

イスラームの精神と中庸さを体現しているアズハルは、テロ、暴力、過激を最も強く非難し、世界の心ある人々に対して、政治に道徳的側面を取り戻すように呼びかけます。かかる側面は大砲のとどろきと無辜の人たちの苦痛の声の下に隠され、姿が隠され溶解しているものです。そして真実に、公正に、そして美に一つの尺度が齎されるようにしましょう。

現代人の危機の第三の原因は、次のものです。それは経済面であれ社会面であれ、南北の格差が非常に開いてしまったと言うことです。

アズハルでは現状として、人によっては享受してい

ても人によってはそれが出来ないでいる科学技術的進歩の果実を、南北いずれの人々も全員が享受できるような日が来ることを切に願っています。

世界の開明された人の良心は、飢えや貧困、そして病苦といった苦難がある特定の人たちを襲ってはいても、他方では贅沢をし快楽に浸っている人たちがいる状況には耐えられないのです。

クルアーンにもあるように、アッラーは世界の凡てのものを人々全員のために創造されたのです。

第四の原因は次のものです。それは物的な側面が精神面を圧倒しているということです。これは現代の問題として、人は自分とその存在の深さを無視すべきではありません。そうすることは、苦悩、不安、そしてアイデンティティーの喪失に繋がるでしょう。

イスラームはこの物質と精神の相互関係の生きている高邁な類型を、個人的と社会的な両レベルにおいて、一人の人間のあり方といういわば増城の中に提示しているのです。

以上凡てにもかかわらず、人の一般的なイメージは固定的で暗いものではありません。希望の曙光がそのイメージの真中で輝いています。それは私たちに對して、多くの決意と決心をさせてくれます。次の二点にその好例が見出せます。

第一には、人の自然な天性の清らかさに対して、完全に信頼が置けるということです。この事実は、公正、自由、平等へ傾き、それらを支持するのは宗教、人種、

国民性の違いにもかかわらず、世界のどの民族でも見られることや、また不正、貧困、破壊に直面したならばどの民族であつても強く対抗するところに明らかに看取されます。

第二には、イスラームにもあるように、崇高なアッラーは真実、公正、平等、そしてあらゆる美徳のために、誠実な人々を起用されたという事実です。彼らは人類の将来を憂いて、忠実に真実、善、美の御旗を掲げるべく努めています。

この会議自体、疑いもなく、かような誠実で忠実な最良の人々の集まりであり、明るい希望の表徴であります。特に、開催地である京都は美しくも品格のある町ですが、環境汚染、温暖化、気候変動に反対する人類の叫びを体现しています。もちろん京都自身がその様な意味での品格と美の町であるとともに、この会議を通じて、道徳的な汚染、社会的な不正、あるいは真、善、美に関する尺度が揺れ動くことから生じる様々な悲劇などに対する、人類の一般的な叫び声をも体现するように望まれます。

最後に崇高なアッラーに対しまして、何処であつても人間の向上に貢献しようという高邁な目的にこの会議が導かれること、並びに戦争の惨禍と紛争や闘争の悲劇を人々が回避できるようにあらゆる可能な努力ができるように、祈願するものです。

主よ、われわれの心を迷いではなく導きへと向けられ、そしてあなたのお慈悲を賜りますように。あなた

世界仏教徒連盟会長

パン・ワナメティー

世界仏教徒連盟とそのネットワークを代表致しまして、ここ日本の京都にて八月三日から四日に開催されます、比叡山宗教サミット二十周年記念「世界宗教者平和の祈りの集い」の主催団体である、日本宗教代表者会議並びに日本・天台宗に対しまして、心からの御祝辞を申し上げます。

世界の抱える問題を解決するために、すべての人類を平和で幸せな世界に導くために、私たち宗教者は、衝突や暴力を愛と平和に置き換えるため、お互いに協力する必要があります。この行事のテーマは「和解と協力」ですが、実にこれこそ私たちの答えであります。いま世界は、争い、衝突、暴力、悲惨などで満ちあふれています。すべての生き物は平和を確保し安全な場所を探さねばなりません。今回の会合の使命は、すべての問題と欠点に対処して、世界を平和に導く最上の手段を発見することにあります。最終的に、持続可能な平和、幸福、和解と協力、を実現することです。

今日の世界の混乱状態の中で、人の心の正しい訓練が必要とされています。それは、仏教聖典の一部ですが、次のような「ダンマパーダ・真理」の一節を思い起こさせます。

争いをする者は

それが滅びに至ることを知らない

この真理を知る者は

争いを静める

この仏陀の教えの一節を注意深く見れば、「すべての戦争と衝突には勝者がいない」と言う事が理解できるのがあります。だれでも復讐の連鎖に関わる限り、遅かれ早かれ世界の破滅へと導くのです。

仏教の僧侶たちは暴力に対しては信念を持って立ち向い、平和に生きるように教えられています。あらゆる暴力や挑戦に立ち向かうためには、私たちは自らの心を瞑想によって訓練すべきであります。仏教徒は他の宗教と同じように、人間の心はあらゆる善と悪の源泉であることをよく理解しています。訓練された心は平和な心であり、世界に対して利益だけをもたらします。瞑想とは平和な心を訓練する道でありますから、仏典に示されたようにすべての仏教徒にとりまして重要なのです。

瞑想に没入し

充分な覚醒によって

平和の悟りの喜びを得た者

神々でさえ賞賛する

瞑想を通して、私たちの心は静寂となり、私たち自身と他人を深く理解し悟りへと目覚めます。私たちの心は愛と慈悲で満たされ、私たちの思考は道徳的に活発になります。そうなれば、暴力に対して揺るがずに

立ち向かうことができるのです。そして、今日の世界からの挑戦に対して賢明に対処できるのです。

世界仏教徒連盟は、瞑想とすべての宗教の教えによる利益を認識しております。例えば、二〇〇二年十二月九日から十三日にマレーシアで開催された第二十二回総会において、世界仏教徒連盟は、世界瞑想の日「ベサクデイ」を実施することを決議七項として決定しました。その上に、代表団は、心の道徳的価値、非暴力、寛容、慈善、統一、他人への奉仕などを指導し、自力による発展と社会の進歩のために、平和と安全を増進する宗教の重要性を掲げることが宣言しました。

疑いもなく、私たちはすべての宗教の教えが同じように世界の平和を目指していることを賞賛しております。このように私たちの宗教の教えを真摯に受け止めております。別の言葉で言えば、私たちは他の宗教を進んで理解し、さらに私たち自身の宗教の教えを明確に理解する必要があります。

ブッダーダサ僧侶 (B.E.2449-2536/1906-1993) はユネスコによって知られたタイの仏教高僧で世界的に偉大なる人ですが、かつて、「仏教徒は世界の平和と幸福を実現するために、仏陀の教えを明瞭に理解し、他の宗教も学び共に協力すべきだ」と述べました。

「世界宗教者平和の祈りの集い」は、今日の世界の暴力に効果的に立ち向かい、平和を分かちための新しいビジョンを見つけるため、すべての参加者に素晴らしい機会を与えてくれることを確信しております。

このような特別な集いの開催に際して、すべての参加者にとりまして有意義で重要な行事となりますことを心より念願しております。

皆様が三宝の祝福を受けられますように。

二〇〇七年八月 タイ・バンコックにて

世界宗教者
平和の祈りの集い

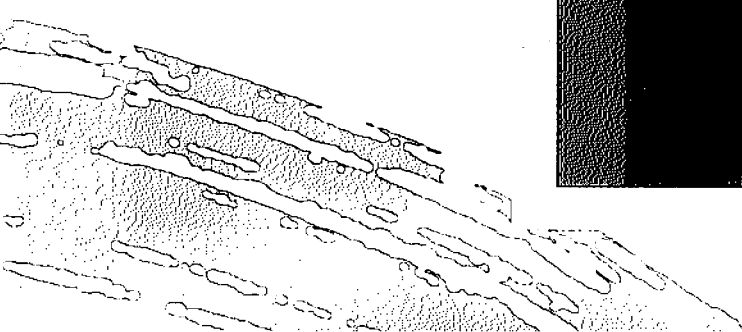
M E M O R I A L S P E E C H

記念講演

テーマ 和解と協力

8月3日(金) 14時30分～15時50分

国立京都国際会館



和解と協力

Reconciliation and Co-operation

教皇庁諸宗教対話評議会次長

フェリックス・マチャド師



私は、天台座主猥下との思い出からお話を始めたいと思います。猥下は、ローマ法王ヨハネ・パウロ二世の予言的な行動によって触発され、一九八七年にこの素晴らしい比叡山宗教サミットを始められました。どうか、慈悲深い神が猥下の精神を祝福され、猥下に永遠の安らぎをお与え下さい。

バチカン諸宗教対話評議会を代表して、主催者の皆様、特に天台座主半田孝淳猥下と前天台座主渡邊恵進猥下に心からの敬意と感謝を述べたいと思います。渡邊恵進猥下は、熱心にこの集いに参加するよう教皇庁に呼びかけて下さいました。私は、日本宗教代表者会議の皆さんが、二十年間毎年この行事を運営され、素晴らしい実績をあげている事に心からお祝い申し上げます。

一九九七年に比叡山宗教サミット十周年記念行事に諸宗教指導者達が集合した時、主催側から「アッシジから比叡山へ―その平和の種子は時と空間を越えて―というメッセージがあります」

した。バチカン諸宗教対話評議会が昨年二十周年を迎えた際、私たちも「時代と性」を超えるという同じ精神を実感しました。二〇〇六年十一月四日から八日にアッシジで開催された「アッシジ平和の祈りの集い」二十周年には四十カ国前後の国々から百名以上の青年（三分の一は女性）が参加しました。この式典は、ローマ法王ヨハネ・パウロ二世の呼びかけによって始まりました。その「アッシジの精神」をどのように示し、諸宗教リーダーの心を奮い立たせ、誘導していくかという点では大変意味のある式典となりました。私は宗教サミットに集いここに参加する皆様はそれぞれの国へお帰りになられ、それぞれの宗教伝統を証明するという役割を担って頂けると確信しております。

また「和解と協力」というトピックは一九九七年に比叡山で開催された宗教サミットにおいて、著名な参加者が呼びかけたものでした。困難や課題はあるものの、どのように平和が促進

され、どのようにこの和解と協力の発展に対し他の宗教の貢献を見極めるのかという、全体的な評価を与える事ができればと存じます。

ローマ法王ベネディクト十六世は次の事を申しております。

「この期間で最も重要な出来事は、東欧での共産主義政権の崩壊であることは誰も疑うことはありません。これによって冷戦が終結しました。冷戦というものは、世界を対立する東西の軸に分割し、全面戦争の準備のため、非常に恐ろしい兵器や軍隊の保有をもたらしました。この時こそ、幅広く広がる平和への望みが、多くの人々に別世界の夢を抱かせました。その世界は、人間の交流活動が活発になり、戦争の恐怖から解放された世界である。さらに、真実、正義、連帯の尊重によって導かれる共通の国際法の中で、人々や文化間の平和的な交流の下で、グローバル化への促進がもたらされる世界である」。

第三期ミレニアムの世界

あらゆる時代において、原理主義者によって宗教がどのように利用されてきたのかということ为例証できます。それは、真実は一つのみであり、彼ら独自のものであり、それを他のすべての人々へ強要することが義務であるという確信によって引き起こされます。また暴力的な手段による真理の強要は、人間の尊厳に対する罪であり、それは、究極的には、我々が信じている神に対する罪にもなります。私達は皆、宗教の原理主義の中に、神への急進的な妨害の姿勢を見ます。テロリストの行為は、人々だけでなく神への真実をも打ち壊しました。そして彼らは真の神を彼ら自身の目的のために利用する偶像に変えてしまい

ました。二〇〇一年九月十一日に起きた悲劇や、その後、他の地域において引き起こされたテロ攻撃は、この原理主義の結果と言えます。これらの悲劇は急激に世界平和への道を閉ざしてしまいました。彼らは、国と国、人と人、文化と文化、宗教と宗教の出会いのあり方を変えました。今日において人々は恐怖の影に隠れて生活し、まるで平和な世界が錯覚であり、平和への夢を打ち砕かれたかのように見えます。

第三期ミレニアムは、テロ行為の増加や暴力とともに幕をあけました。これらに減少の兆候は見えません。そして、多くの地域において、地理上や政治上の緊張関係に関係なく、紛争が起こっているという事実は、文化的な相違だけでなく宗教の相違が、平和への取組みに対して不安定にさせ脅威を与えているという印象をもたらします。

前世紀における悲惨な出来事は私達に、戦争はいつも悲劇を起すものだと教えてくれています。新世紀の幕開けは、悲しくも、世界の到る所で起きている紛争とともに始まりました。この問題は、紛争の対立関係に置かれてしまう宗教によって悪化をもたらしました。そして、私たち宗教指導者は、平和の追求や、唯一神の名が平和の名や平和に対する教えというものに、段々とならなければならぬ世界であるということを証明しなければなりません。

地球上における人々の移動、特に数百万という難民は政府や彼らを受け入れる国の人々の不安を増加させております。また人種差別も増加しています。このような暴力に付け加えて、すでに多くの人々に深刻な被害をもたらしている地球温暖化に対しても認識を深めるべきです。地震、津波、洪水、ハリケーン、

干ばつなどによる自然災害は、すべての国々に被害をもたらします。私達は前世紀が抱えていた問題より大きな危機に直面しているのです。

さらに、貧富の差や持つ人と持たざる人、北側と南側、先進国と発展途上国、東側と西側というような、はっきりと分裂した世界に直面しております。ますますこの分断が広がっている兆候があります。科学技術は猛烈な速さで発展しております。報道機関は地球村に世界を作り変えました。人々はすぐ出会う事ができます。しかしながら世界が分割と崩壊の原因に直面するよりも、銀のスクリーン上のバーチャルなイメージを通じて、より統合されているという不幸な皮肉があります。そして全ての社会の基本単位である家族が到る所で危機にさらされています。

これらの緊張状態が更に続くとしたら議論は益々激化します。一つの議論は、宗教者は、嫌悪と暴力の誘発を非難する立場に立つということです。ある人は宗教を時代遅れだとばかにする人もおります。もう一つの議論は、無知や相互の憎悪を広げたりするのを制御するのは、宗教指導者の責任であるということです。世俗的な社会においては、宗教的信念は取り残され、絶対の真理に対しての信用はわずかなものです。宗教を持つ人々とその指導者達は、真実は実在し、永遠で不変であることを知っています。また、信頼と道徳を相対的に扱う事が自己中心の世界を作り上げたということも知っています。このサミットは、次のような問いを私たちに投げかける適切な場所です。それは、私達宗教指導者は世俗主義の増大する影響に取り組み責任がありますか？私達は世界で苦しむ人々に対して納得できる回答を見つかる事ができますか？この会合ではなく、私達は

世界に対し、希望のメッセージを提示すべきではないのですか？

私達は過去に集い、そして今後もこの行事を継続していきたいと願うことは非常に大きな前進です。それは宗教が平和を意味し、平和を促進し、お互いが平和のうちに生活するという力強いメッセージを世界へ送ります。法王ヨハネ・パウロ二世は次の警告を受けました。

「私達が世界の各方面からアッシジに召集したというまさしくその事実人類が歩んできた共通の路の証です。私達は平和に調和をとって共に歩む事を学ぶか、もしくは離れ離れになりお互いが崩壊する事を学ぶかです」。

急速な技術の進歩はコミュニケーションを円滑にしますが、必ずしも人間理解を深くするのに役立つとは限りません。このような会議によってのみ人間理解を深める事ができるのです。不運なことに、平和に反対するものは、いつも彼らに利益を与え、利己的な課題を促進する事になりかねません。私の経験を申し上げますと違う宗教伝統を持ち、世界平和を強く願う人はたくさんおります。私達はこういう人々を助けるべきです。ではどのように始めたらいのでしょうか？ローマ法王ベネディクト十六世は説教の中で度々「平和は心に築くべきです」なぜならば「人々の心にはいつも神が介在しているからです」と力説しておられます。

だから私達は直面している問題へ応えるため、それぞれの共同体における教育から始めます。私達はこれを実行するにあたり個々の宗教伝統において資源を持っています。私達は傷ついた人類家族を癒し、和解を与える事が出来ます。また諸宗教間

対話を通じ、私たちは世界の平和を築き上げることができます。私たちキリスト教徒では、人間というものは、神のイメージやご意志によって創造されていると考えていますが、平和の創造は、人間の独自性や尊厳を確信し、それを促進することから始めます。

人間と神の和解——キリスト教徒の見解より

ローマ法王ヨハネ・パウロ二世が一九八六年十月二十七日に開催されたアッシジ平和祈願の日を宗教指導者達に呼びかけ、次のことを語りました。

「私達がアッシジに集まる目的は、お互いの信仰心、信念を元に何らかの交渉をしたり故意に宗教上の合意を求めたりほめかしたりする為ではない事は事実です。また、それは宗教が地球規模のプロジェクトにおいて共通の取組みというレベルで和解出来るということの意味しているわけではありません。また宗教上の信仰心における相対主義に対する譲歩でもありません」。

第二バチカン公会議の諸宗教宣言では「キリスト教以外の諸宗教に対する教会の態度についての宣言」つまり、「もし、兄弟愛として全ての人々愛する事ができないのであれば、私達は偉大なる父である神に、本当に祈ることはできません」。

なぜなら、すべての人間は、神の創造物であるからです。それぞれの宗教は根本的な相違があるにも関わらず、私たちは、兄弟姉妹としてお互いに接するために平和を希求する一つの人類家族であるという認識をもっており、そしてこの基本的な宗教的感覚の深い理解において、神の家族愛の下、普遍的な兄弟愛として私達は生活や仕事に励むことができます。これは

尊敬、友情、寛容、家族、共同体及び人間の平和な関係を引き起こします。

人間と自我の和解——キリスト教徒の見解

ローマ法王ベネディクト十六世は就任ミサで次の説教をされました。

「私たちは、進化の結果、偶然に生まれた、無意味な産物のようなものではありません。私たち一人ひとり神のご意思に基づいて生まれたのです。私たち一人ひとり、神から望まれ、愛され、必要とされています」と。

そして二〇〇七年に開催された世界平和の日において法王は改めて次のことを表明致しました。「神のご意思によって、人間は創造された。それ故、個々の人間は、尊厳を持っている。ご自分にかたどって人を創造された。神にかたどって創造された。男と女に創造された」。

一人ひとりの人間は、神にかたどって創造されたがゆえに、人格としての尊厳を備えています。単なる物ではなく、人格です。知識を持ち、ものを所有し、自由な奉仕ができ、そして、他の人々との交流を行うことができます。同時に一人ひとりの人格は、恵みによって創造主と契約を結び、自分に代わってだれも行なうことのできない信仰と愛をもって神に応答するように招かれています。カトリック教会は、この人間の尊厳を守ることを続けています。それは、創造主の意思によって愛され、現在はこの世界の「砂漠の荒野」に生きているということに気づいていてもです。様々な形の「砂漠の荒野」がこの世界にはあります。人が生まれる前から、拒否される砂漠があります。

貧困砂漠、飢えと渇きの砂漠、誰からもかえりみられない砂漠、孤独な砂漠、破壊的な愛の砂漠があります。そして神がみえないという砂漠、尊厳に気づかないことや生きる目的を失ったことなどの魂の空虚さがあります。この世界には外的な砂漠がますます増えていきます。なぜでしょう。それは内的な砂漠がこれほどまでに広がっているからです。確かに砂漠に再び潤いを取り戻すように、人間が神、そして内なる自分と和解しなければなりません。

人間と人間の和解——キリスト教徒の見解

私達の社会において、私たちの生活は、寿命を全うして死ぬ瞬間まで、「人生の全ての段階において前向きに歩む文化」よりもむしろ「死の選択を許す文化」を促進する傾向から、容赦ない攻撃を受けています。新約聖書において聖ヨハネはキリスト教徒に対して、「兄弟や姉妹を嫌いなのに「私は光の中にいる」という人は、まだ闇の中にいるのです」と書いています(1Jn 2:9)。今日、一種の社会的責任において「殺す」という事が正当化されていることが多くあります。これは、個々の固有の尊厳をもとにしているのではなく、人生の条件をもとにしているからです。母から望まれてよいくないと、あるいは、年老いて衰弱した時に、生き続けるために高い費用がかかろうとそうでなかろうと。

憎しみや復讐といった感情は社会の中で若い人々に植え付けられています。それは何世代にもわたる、対立する思想によって暴力的に変えてしまうのです。そのような暴力は戦争で荒廃した国々に限らず、学校や他の教育機関においても見受けられ

ます。皮肉にも、社会の進歩につれてますます望みもなく、孤独に、拒絶され、痛みを抱えて絶望しています。

ローマ法王ベネディクト十六世は、キリスト教の伝統的な祈りの中で、次のことを申しております。

「世界の中にあまりにも大きな暴力とあまりにも大きな不正があります。ですからより大きな愛、より大きないつくしみをもって接しなければこのような状況を克服することはできないことを知っているからです。このより大きなものは神から与えられます。神の憐れみはイエスという肉体において行われ、神の哀れみのみが世界の均衡を悪から善へと変えることができます。小さくも決定的な世界、すなわち人間の心から始まります」。

聖ルカ福音(6:27-31)の一節を引用しベネディクト十六世はキリスト教の不殺生の原理を提示しました。法王は「キリスト教徒の非暴力とは、悪に屈することはではなく、それは「もう一方の頬をも向けなさい」という教えの間違った解釈である。むしろ、善をもって悪に対抗することです。こうして不正の鎖を断ち切ることができます。ですから、キリスト教にとって非暴力は単なる戦術的な行動ではなく、人々の生き方の問題だということがわかります。それは神の愛とその力を確信する人の行爲です。敵を愛するという姿勢はキリスト教の革命の核心です。それは経済や政治や報道機関の力に基づいたものではありません。それは愛の革命です。この愛は、人間的な手段を決定的な支えとするのではなく、むしろ神の賜物です。神の賜物は神の憐れみ深いいつくしみを無条件に信頼することによってあたえられるからです。ここに神の福音の新鮮さがあります。そのことが静かに世界を変えるからです。ここに神の愛をひたむきに信じて

いる名もなき人の勇敢さがあります。名もなき人々は、神の愛を信じ、いのちを犠牲にしてまでこの神の愛を広めるからです。

人と自然との和解——キリスト教徒の見解より

存在する全てのものの創造者の神は、人間に、神の創造の世話人として任命しました。またローマ法王ヨハネ・パウロ二世は回勅において、次のお言葉を残しております。

「神は人に地球を与えただけではなく本来の目的達成に使用するべきものとして与えた。そして人もまた神からの賜物である。従って神に授けられた道徳や自然に敬意を持つべきである」と。

二〇〇四年十二月二十六日におきたインド洋の津波による震災以来、世界中の到る所で自然災害が発生しております。地球温暖化の起因によるハリケーン、地震、台風、干ばつ等の現象です。しかしそれは自然現象のみが原因のではなく、私達人間にも原因があるのです。原因が明確に示されなければ、このような環境変化に無関心でいることは致命的な結果を及ぼすこととなります。また人間は地球温暖化に対し大きな責任があります。人間は、自然の中の大部分を占めて生活しているのです。人間は神の創造を人為的に操作したり、歪めたり、乱用すべきではありません。むしろ人間は神の創造を助ける責任があります。そして神が創造する全てのもののために人間の願望を抑えるべきです。

異宗教間対話——和解の経験より

異なる宗教伝統をもつ指導者として、私達自身がお互いを理解できないのであれば、和解に関して他の人に説くことはでき

ません。世界中の人々は私たちに敬意を持ち、平和をもたらす人々として望みを持っています。この対話が私達の異なる宗教間のより強固な橋渡しとなるのです。私達はこの傷ついた世界に存在する共同体において様々な傷の回復と和解を促進する必要があります。宗教指導者として、私達は調停者として好例を示すべきです。

私は二〇〇〇年三月十二日に開催された「許しの日」のメッセージをお伝えしたいと思います。これは「過去の記憶の浄化」として記述されております。ヨハネ・パウロ二世は「過去に犯してきた不正を認識することは現在の妥協に対し私達の良心に再び目をさませる良い機会であります。全ての人々のために変換への道を切り開いていきましょう」と。現在増加している無神論、宗教への無関心、倫理的相対論、死に至らせる文化、貧困の開発等の責任が私たちにあることを示しています。

多くの宗教団体では、対話を促進し、信用や信頼を通じて協力関係を築く等様々な方法で癒しを試みました。これは便宜的な協力関係ではなく、お互いに献身するためのものです。協力関係により人間同士の意思疎通や同じ目線に立つて相手を思いやる事なのです。この大都市の中で隣人も知らず人々が個性を失う社会において匿名というものがこの社会を支配しております。私達は道ですれ違う人々の顔を見ることはほとんどないでしょう。もしかするとその人たちは生きることの意味を見い出すためにもがき、自分が求める精神性がどこにあるのか悩んでいるかもしれません。

諸宗教間の対話においては、過去または現在の彼らの痛みを取り除くことはできないかもしれません。私たちは、隣人が私

達が生み出した不正、怒り、開発の犠牲者であることを認めなくては いけません。私達が相手の話に真剣に耳を傾け、他の人に示すときに本当の対話が生れます。対話とは私の前に他の誰かが存在している事です。非道な侵略者や悪者の犠牲者が疑念を抱きながらこのような対話に参加するかもしれません。人の話をよく聞き、共感できる人は誠実であり、真実を話し、正義を求め、許しを提供し、共感しお互いが兄弟そして姉妹と見る事が出来るのか見極める事ができます。これらはすべての宗教が助長する基礎的な能力です。それは和解と平和への道につながっています。

過去数十年間でより宗教団体における諸宗教対話が活発になってきました。日本の諸宗教組織においての例ですが、ユダヤ教徒、キリスト教徒、イスラム教徒が直面していた問題に深い関心を持つことを通して、和解の過程における仲介人をつとめる事ができると分かったのです。これらの日本の諸宗教組織は、現在の問題の解決を思案するために召集をかけました。指導者は神の名の下に繰り返される戦争や殺戮そして宗教の名のもとに行なわれた全ての暴力に対し非難をしました。

諸宗教間対話は宗教による境界を越え、信頼や協力関係を築きます。私が言及したように、諸宗教間対話は神、自己、他人、そして自然との根本的な関係を持つことを前提としています。そして諸宗教間の理解を深めていくことが、私にとっては一生をかけての巡礼の旅となるでしょう。そしてこのような対話を通じて私達は、共通の取り組みを推進しています。実際の旅行とは異なり、諸宗教間対話という巡礼、心の巡礼に終わりはありません。それは信頼関係と友情という一生の旅となるでしょう。

う。この旅を通して、私たちはそれぞれの宗教に対し、より理解し、お互いを尊敬し成長することでしょう。

諸宗教間の協力

諸宗教間対話は、目的ではなく手段です。私達は、経験から、諸宗教間対話というのは、エリートだけの選ばれた人々のためだけにするのではないと理解しています。全ての信者がその対話に従事できるよう推進しています。「諸宗教共同体は、憎悪や暴力を肥大化させる原理主義者たちに対し、心の傷を癒す手助けや、お互いの橋渡しや一致団結する偉大な能力を持ち合わせています。エレノア・ルーズベルトが、かつて、人権を蘇らせるために書いていますが、それは、人々の間に相互尊重の文化を創造することと同様に当てはまります。『どこで人権の取り組みが始まるのか?』と彼女は問い掛けます。『自宅からほど近い小さな場所においてであり、どの世界地図でも見つけることができないほど閉ざされた、小さなところです。そこで権利が意味をなさない限り、どこにおいても意味をなすことはありません』と。多くの宗教を持つ人々が地方レベルにおいて主導権を持ち、平和構築という共通の関心事に取り組むためプロジェクトに組織的に参加することはとても励みになります。

ローマ法王ベネディクト十六世は、対話は任意に必要以上に減らす事は出来ない又何度もおっしゃいました。それは今日も極めて重要なことです。緊急な必要性があります。多くの信者がそれぞれの信仰生活において対話を進めると同時にそれぞれの宗教団体の枠を超えて関係を築くための表明をする必要があります。宗教指導者は私達の世界において更なる理解、敬意、

及び平和をもたらすために宗教の境界を越えてお互いに通じ合うためにそれぞれの共同体に働きかけ、例を示すことでよりよい方法へ導くべきです。

諸宗教対話推進による輪の拡がり

昨年アッシジで開催された諸宗教青年会議について述べたいと思います。その経験は宗教という境界線をこえて前進する青年が担う役割に対し、大きな望みを抱きました。彼らは平和実現のためにとても重要です。青年はお互いに偏見や固定観念を持ちこみません。昨年十一月のアッシジの会議において青年は、率直に出会い、学び、耳を傾け、お互いを理解する事に熱心に取り組んでいました。彼らは正直な、純真なそして誠実な気持ちで会議に参加しました。彼らはお互いの夢を語り合い、宗教伝統について学びました。彼らはお互いを尊重し理解することで向上しました。それぞれの参加者が宗教伝統について堂々と語りましたがその場ではいつもお互いへの敬意に満たされておりました。彼らはそれぞれの伝統が強く根付いているにも関わらず、討議、祈り、食事または懇談の場においてもお互いに対する敬意を忘れませんでした。全ての参加者は「共通の意思、すなわち平和という一つの目標」を掲げていたのです。

今日、私はこの宗教サミットに参加している皆様に彼らの声明を発表したいと思います。一九八六年に初の会議がアッシジで開催され、その後二十周年記念式典においてローマ法王ベネディクト十六世が、平和は政府機関のみならず、モスク、寺、塔、シーク寺院、祈りの場、学校、職場、家庭そして最も重要である事はそれぞれ自身の心にあるものなのだと説いたよう

に、彼らは次の宣言を致しました。

「私達はそれぞれの宗教のために祈りを捧げ、神に平和という貴重な贈り物を頂けるよう懇願致します。私達が異なる場所、言語そして方法で神に祈りを捧げる間、一つの目的のために結束しました。平和のために祈ります。そしてこの方法で私達は「祈りが分配することはない、しかし人々の結びつきを強める、祈りは平和の有効的な教育のための確固とした原理、お互いを受け入れることで結ばれる友情、そして対話が異なる文化や宗教を結びつける」という真実を証明致しました」。

私は女性を代表して申し上げたいと思います。宗教伝統における女性の役割を明言する事は必要不可欠です。女性は家族にとって最も身近な存在であり、子供の信仰心を始めて教育する立場にあります。女性は社会のために指導者を育成する重要な役割があります。私は母親が今日の私達をこの世に誕生させ、生活を形成し、影響を与えたということに皆様が同意して下さいと信じております。そして困難な状況でも、女性は相反する人々と和解し、癒しをもたらしました。

報道機関は人々に偉大な影響を与えます。彼らは偏見や固定観念を晴らすことによって相互の理解を助長することができます。私は彼らに協力と和解を通じて平和を構築するための協力を要請したいと思っております。

ご静聴誠にありがとうございました。神の祝福がありますように。そして人々のより大きな協力と異なる宗教を持つ信者を通じて和解を推進することで、神は家庭における癒しを授けて下さるでしょう。

記念講演

和解と協力

Reconciliation and Co-operation

イスラム問題・寄進・宣教・普導省イスラム問題審議官

アブドウラー・アルレヘダン氏



最も慈悲深く憐れみ深いアッラーの名の下に。全ての賛美は全世界の主たるアッラーの計らいである。アッラーの使徒、われらの預言者ムハンマドと全ての預言者と使徒たちに特別な祈りの平安あれ。

まず始めに、日本宗教代表者会議名誉会長であり、天台座主であられ、尊敬してやまない半田孝淳現下に感謝申し上げますと思います。そして、宗教指導者の集会を開催に導いてくれた日本国政府と国民の皆様にも感謝申し上げます。

この集いは、今日の世界に存在する多様な宗教の信徒間における寛容と平和を促進するための宗教者の真の役割を活性化することを目的としています。人類の平和と存続を中心とした多くのイデオロギーが腐敗してしまったため、今日、世界で様々な混乱と問題が生じています。国家間や異文化間の平和と共生

は、戦争に取って代わられてしまいました。人類は、仲間であるはずの人類に危害を加え、環境を破壊する方法を習得しました。物質的、人種的、国粋主義的または宗教的などあらゆる面での過激主義による結果、こうした問題が生まれました。そしてこうした過激主義者に取り組み、問題の原因に関する提案や勧告を行い、問題を解決し、自身の地域社会や他の地域社会においても寛容・共生・協力の文化を広めるためには、宗教者は間違いなく他の一般の人に比べてより適任であるといえるでしょう。

更には、ムスリムには、完全なる寛容の精神を示す精神性並びに歴史があるという事実から、再び世界を安定化し、安全と平和を持続するために参画することができると思います。実際、慈悲深く平安な預言者ムハンマドは、全人類のための普遍的なメッセージを伝えたのです。そのメッセージは、特定の肌の色

や人種の人に贈られたのではなく、全ての人々への道しるべなのです。アラブ人・非アラブ人に問わず。

アッラーはこう言っています。「われは只万有への慈悲として、あなたを遣わしただけである」(預言者章・一〇七)。これは、人類に正しい神・唯一の存在への祈りを教えて、全人類の平和と共生のメッセージを広めるためのものです。アッラーは尊いクルアーンの中で次のようにおっしゃっています。「人々よ、われは一人の男と一人の女からあなたがたを創り、種族と部族に分けた。これはあなた方を、互いに知り合うようにさせるためである。アッラーの御許で最も貴い者は、あなた方の中で最も主を畏れる者である」(部屋章・十三)。このように、イスラームでは人種差別やそれを背景とした争いを認めていません。「信心深さの違いはあっても、アラブ人と非アラブ人の間の違いはない」「実際天主であるアッラーは、私に、謙虚であることどんな規則にもそむかないこと、誰に対しても真摯な態度をとることを指示された」と、予言者はいっています(ムスリムの言葉)。また、預言者には実際、異なる国出身の非常に親しい仲間がいました。

イスラームは、ひとりひとりが人間であるというシンプルな事実という人類の重要性を掲げています。天主であるアッラーは、こう言いました。「われはアダムの子孫を重んじて海陸にかれらを運び、また種々の良い(暮らし向きのための)ものを支給し、またわれが創造した多くの優れたものの上に、かれらを優越させたのである」(夜の旅章・七〇)。

また、こんな説話があります。かつて、イスラームでない宗教を信仰していたある人の葬列が通り過ぎる間、預言者は彼の仲間と共にその者のために立ち上がりました。人々は彼に、「ユダヤ人の葬式ではありませんか？」と尋ねたところ、預言者は「ひとつの魂ではありませんか？」とおっしゃいました。加えて、尊いクルアーンでは、アッラーが手と息とその精神を吹き込み、人類の父であるアダムを創り、天使に彼にひれ伏すように命令した、と伝えられています。アッラーは、アダムのために彼の仲間を創造し、彼らの間に愛と慈悲を置かれたのです。従って、人類がこのように高い立場を得たため、その精神と人生が大きな懸念事項となったのです。イスラーム法の制度では、不当に人を一人殺す事は、全人類を殺す事と同義であり、人を一人救う事は全人類を救う事となっています。誰であれ、故意に誰かの人生を奪えば、その結果は地獄です。

アッラーはクルアーンの中でこう言っています。「そのことのためにわれはイスラエルの子孫に対し、掟を定めた。人を殺し、地上で破壊を働いた者は、全人類を殺したのと同じである。人の生命を救う者は、全人類の生命を救ったのと同じである(と定めた)」(食卓章・三十二)。ムスリムは自分たちの場所を得るために他の人々を滅ぼした、というイスラームの征服の歴史ではあまり知られていないことですが、イスラームに入ることを拒否した人たちは、自身の宗教を継続し、彼らの信仰を捨てるよう強制されることはありませんでした。

アッラーは、クルアーンの中でこう言っています。「宗教には強制があってはならない」(雌牛章・二五〇)。また、「あなたは人々を強いて信者にしようとするのか」(ユーヌス章・九

十九)。ムスリム社会における非ムスリムの少数派の存在は、現在増え続けています。

トーマス・アーノルドは著書「イスラームの布教史」の中でこう言っています。「実際にムスリムの中で今日生きているアラブ・キリスト教徒たちは、イスラームの寛容性を証明している」「カリフの時代も、キリスト教徒は、ムスリム社会の中で生命や所有物の安全を保障され、信条の自由という寛容さを受け、快適さや生活のしやすさを享受していた」。

ドイツの学者であるHANKSHは、著書「神の光は西に輝く」の中で、次のように述べています。「アラブ人は、決して征服した人々にイスラームに入信することを強制しなかった。従って、イスラーム以前は醜い非寛容の憂き目にあったことのあるキリスト教徒、ユダヤ教徒並びにゾロアスター教徒は、イスラームの規範の傘下で、それぞれの宗教的な実践をすることが許された」。また、九世紀のALQUDDSの神父(司教)は、ムスリムについてこう述べていました。「彼らは公正さに秀でており、決して迫害しない。また、彼らが私たちに暴力を使うこともない」。

実際、クルアーンの中でアッラーが「アッラーは、宗教上のことであなたがたに戦いを仕掛けたり、またあなた方を家から追放しなかった者たちに親切を尽くし、公正に待遇する事を禁じられない。本当にアッラーは公正なものを好みになられる」(試問される女章・八)と言っているように、親切さや強い絆、また温かい行動以外に、宗教間の違いによって引き起こされる問題を解決する事はできません。

イスラーム史上、ムスリムが非ムスリムに改宗を強要したというレポートはありません。東洋学者のグスタフ・ルバンは、「世界の国々は、アラブ人が慈悲深さや寛容性をもった征服者であったことを分かっておらず、また彼らの宗教が寛容な宗教であることも知っていない」と述べました。

また、トーマス・アーノルドは、「ムスリムが他者を強制的に改宗したことは決してなかった」と言っております。中東の歴史家であるドジは、「ムスリムの寛容性は、他の宗教の信者がイスラームに入信する事例の数を増やすことに役かかっており、実際、ムスリムの寛容さやムスリムの庇護下における非ムスリムに対する接し方が、イスラームに改宗する原因となっており、それまでの宗教ではなかった快適さと簡素さを見出すことにつながった」と言っています。

イスラームは、繁栄や平和時だけでなく、寛容と慈悲を促進してきました。むしろ、感情が怒りで染まるような最も重要な時代にあつても、自分自身を制御し、罪を避けることによって、他者に対する過ちをしないように信者に呼びかけています。第四代カリフのアリ・イブン・アビー・タリーブは軍隊に、「彼らを征服するときには、決して逃げる人や負傷者を殺してはならない。私的な部分を暴いてはならない、死体を切ってはならない、カーテンを破ってはならない(カーテンの奥がプライバシーであった)、許可無く家に入ってはならない、金銭を奪ってはならない、たとえお前やお前の上官を罵ったとしても女性に拷問をしてはならない。アッラーを常に忘れないように、そうすれば慈悲をお与え下さる」と命令しました。

お集まりの皆さん、イスラームは、いろいろな面で裕福な人と貧しい人の間の協力をもたらすことに関心を持ち、そのための行動をしてきました。例えば、ザカート（喜捨）や慈善活動、また貧者への供与を含む多くの形での（財的）自己犠牲を通して、富の分配することに非常に重みをおいており、それを社会協力の最も素晴らしい事例の一つとして捉えております。協力とやさしさは、強制や義務ではなく、ポジティブに受け入れ自発的に実施されます。

アッラーは「彼らの財産から施しを受け取らせるのは、あなたがかれらをそれで清めて罪滅ぼしをさせ、また彼らのために祈るためである。本当にあなたの祈りは、かれらへの安らぎである。アッラーは全聴にして全知である」（悔悟章・三）、「あなたがたは愛するものを（施しに）使わない限り、正義を全うし得ないであろう」（イムラーン家章・九十二）とおっしゃっています。

また、アブドゥッラー・イブン・アムル・イブン・アルアスは「ある人が預言者にどのイスラームが一番良いかと尋ねたとき、預言者は、他者に施し、知っている人にも知らない人にも平和のあいさつをする人である、と答えた」（ブカリとムスリムの合意より）と言っています。

アッラーは、真の信徒について次のように言っています。「かれら（移住者ムハージル）に与えられた（戦利品）に対しても心の中で欲しがする事も無く、自分（援助者アンサール）自身に先んじて（かれらに）与える。たとえ自分は窮乏していても」（集合章・八）、「かれらは、かれを敬愛するために貧者と孤児と捕虜に食物を与える」（人間章・八）、さらに出来る人は

誰でも、両親、親戚（もちろん妻や子供たちも）のために、そして公的な団体の活動を支援するために金銭的な責務を果たさなければなりません。

イスラームでは、貧困に対する戦いもしており、イスラーム学者が簡潔にまとめた次の五つの方法を通して満足や富をもたらすよう努力しています。

一、できる人はすべて働く事ができるような国の運営

二、イスラーム法に定められたザカート（喜捨）をする義務

三、家族、隣人並びにより広く社会において協力をする義務

四、ザカート（ムスリムの義務である喜捨）のほかに貧者や弱者への施し。タミーシは、次のように報告している。

ファティマ・ピントが言った。「ザカートについて預言者が質問を受けたとき、預言者はザカート以外の経済的な責任があると答え、アッラーの名を称えた後、「正しくつかえるということは、あなたの方の顔を東または西に向けることではない。つまり正しく仕えるとは、アッラーと最後の審判の日、天使たち、諸啓典と預言者を信じ、かれを愛するためにその財産を、近親、孤児、貧者、旅路にある者や物乞いや奴隷の解放のために費やし、礼拝の勤めを守り、定められた喜捨を行い、約束した時はその約束を果たし、また困苦と逆境と非常時に際しては、よく耐え忍ぶ者」（雌牛章・一七七）と答えた」。

五、働くことができない弱者の経済的権利については、財務の家と呼ばれる機構の中でケアされる。この機構は働けない人たちに対して必要なものを提供する責務を実施し、かれらの家族をサポートする。これらすべては、イ

スラームがいかに実のある信仰を強調し、経済的繁栄に
関して素晴らしい特徴をもっており、富の蓄財の偏りが
なく、いかに財を活用し使うかについてのルールがある
ことを示している。

お集まりの皆様、人はいのちある存在であり、よりよく健全
に、周囲の環境の中でポジティブでなければなりません。この
点、クルアーンの中で四六〇回「アル・アルド（大地）」につ
いて述べられています。「アッラーはあなたがたを土から育て
られ、それから、あなたがたは大地に帰され、また起き上がり
せられる」（ヌーフ章・十七―十八）、「われは、それ（泥）か
らあなたがたを創り、それにあなたがたを帰らせ、またそれか
ら起き上がらせられる」（ターハ章・五十五）、「かれは）あな
たがたのために大地を臥所とし、また大空を天蓋とされ、天か
ら雨を降らせ、あなたがたのために糧として種々の果実を実ら
せられる方である。だからあなたがたは（真理）を知った上は、
（唯一なる）アッラーの外に同じような神があるなどと唱えて
はならない」（雌牛章・二十二）、「秩序が定められた後、地上
で悪を行ってはならない」（高壁章・五十六）、「人間の手が稼
いだことのために、陸に海に荒廃がもう現れている。これは
（アッラーが）かれらの行ったことの一部を味わわせかれらを
（悪から）戻らせるためである」（ピサンチン章・四十二）。

荒廃の定義には、環境破壊を含んでいます。ムスリムの学者
であるイブン・カルドゥンは、「井戸をきちんと使わないと、
ひとつの汚染が生まれ、次々に影響を及ぼす。例えば、使われ
ていない淀んだ水が挙げられる」と警告しています。また、多

くのイスラーム法学者は、大地を耕し、不毛の地のままにして
はいけないと説いています。その結果、多くの益が生まれるか
らです。預言者は、「不毛の地を耕した者は、その地を得る」
と説いています。イマームのアブ・ユースフは、「指導者は、
土地を所有者のないままにして、開発されないままにしてはな
らない。そのようなときは誰か土地の世話をする人に、その土
地を与えるべきである。国にとって、税収を生む土地を生産す
るほうがよい」と言っています。また彼は、「指導者は、土地
を開発する人を持ち、不毛の地に沢山の植物を植え、それをし
た人に土地の所有権を認めるべきである。これを通して、低価
格を維持する事ができる。人、動物、植物が存続し、アッラー
から大きな賞賛を得る。多くの人が豊かになり、ザカート（喜
捨）の必要もなくなるであろう」とも述べています。クルアーン
や伝承には、何度も環境や人・動物・植物・水・空気といっ
たすべての構成物について触れられており、環境の保護や、資
源を枯渇させることになる不必要な浪費の生活を戒めることが
説かれています。

皆様、イスラームは、文化、社会並びに人間の多様性は、
「聖なる智慧」であることを明確化しています。アッラーは、
「またあなたの主の御心ならば、かれは人々をひとつの国にな
されたであろう、しかしそれでもかれらは反目しあつたであろ
う。あなたの主が慈悲をたれられる者は別である。かれはそう
なるようにかれらを創らせた。」（フード章・一一八―一九）
と言っています。従って、文化、民族そして言語の違いは殺戮
に導くものではなく、むしろ、文化の多様性によって体験や考

えを交流し、お互いを完成に導くために重要なものであります。イスラーム文化は、他の人々との接触によって豊かになりました。非アラブのムスリム学者は、様々な科学・芸術の分野に優れています。多くの民族がイスラームをうけいれましたが、他のムスリムと習慣の異なるしかしイスラームに反しない彼らの習慣や言語を保っています。これは、全ての人をカバーするイスラームの広大さや寛容さを示し、当時真に共生する多文化社会を形成しました。さらに、イスラームは常に他の人々の美徳を認識していました。預言者は、「私は送られたのではない。しかし、名譽ある特徴を完成するために」とおっしゃっています。

イスラームは他との対話を訴え、対話を定められた方法としています。アッラーは、「啓典の民と議論する際には、立派な態度で臨め」（蜘蛛章・四十六）とおっしゃっています。立派な態度での議論とは、尊敬を確固とした基盤として討議することを意味し、真理に到達する事を目的としています。創られた文化の理解が討議によって深められます。コミュニケーションや平和的な接触によって学び、偏見をなくすよう促進します。その結果、寛容の実践や他者に対する誤った考えの訂正を促すことができます。しかし、討議によって、常に対話をする人同士が同意することが条件ではありません。むしろ、討議の目的は、事実を明確にし、誤解に基づく偏見を少なくし、相違はあっても共生の原則をもたらし、全ての人の平和と安全を提供することにあります。

アッラーは、クルアーンで「言ってやるがいい。『あなたが

たは、わたしたちの犯した罪について問われず、わたしたちもまた、あなたがたが行ったことについて問われない』（サバア章・二十五）とおっしゃっています。イスラームでは、宗教的相違は、罪や戦争、殺戮の理由ではないため、信者に他の宗教との共存、相違に関係なく彼らとともに生きることをお願いしています。アッラーは、「あなたは人々を強いて信者にしようとするのか」（ユーヌス章・九十九）、「宗教には強制があつてはならない」（雌牛章・二五六）、「あなたがたには、あなたがたの宗教があり、わたしには、私の宗教があるのである」（不信者たち章・六）と説いており、実際世界では、対話や安全、平和的共生を実践するためのこうした美しい宗教的原則を確立することが必要となっています。これが、すべての側の過激主義者が大声で叫んでいる「文明の衝突」ではない別の選択肢です。

対話と平和裏に問題を解決することを強く世界が決意するのであれば、すべての人が満足することになるでしょう。対話の利益を通して、過激主義はなくなり、テロリズムも解体するでしょう。宗教は、その根本的な原則において、信仰心、正義、善、良い価値を広めること、徳の重要性などについて共通の願いがあります。したがって、ムスリムが他者との協力に参画し、ともに行動する理由は多くあり、今日存在する多くの脅威に対してともに協力することは合意事項でそうした機会をつくるべきことであります。従って、私たちすべては、過激主義やその他の誤ったキャンペーンの要求に対して共に立ち上がり、不正義な戦争・憎しみや災いといった不健全な現象から人類や社会を守るために協力することができます。

各々自身が生き残るために他者に罪があるとし、世界に悲惨な戦争を引き起こしてきた生き残るための戦いの原則は、野蛮なものです。イスラームでは、「戦いはあなたがたに規定される。だがあなたがたはそれを嫌う」(雌牛章・二一六)とあるように、戦いを好ましくない事例として考えられています。したがって、こうした憎むべき方法を、国や個人の間の関係の基礎とすることはできません。

アッラーは、「だがかれらがもし和平に傾いたならば、あなたもそれに傾き、アッラーを信頼しなさい。本当にかれは全聽にして全知であられる」(戦利品章・六十二)と教えています。また、「あなたがたに戦いを挑むものがあれば、アッラーの道のために戦え。だが侵略的であつてはならない。本当にアッラーは侵略者を愛さない」(雌牛章・一九〇)と。

イスラームは、また、アッラーのもと節度とバランスのある行動をよびかけています。アッラーは、「このようにわれわれは、あなたがたを中正の共同体(ウンマ)とする」(雌牛章・一四三)と説かれ、全ての美德は、二つの卑しい質の間の真ん中の道にあります。例えば、優しさは、欲張りや浪費の間にあり、励ましは、臆病さと無謀の間にあります。私たちが生と死、肉体と魂、恐れと希望、思考と行動の間で慈悲を懇願しているというように、クルアーンのいたるところにバランスに関する記述があります。異なる国の歴史をみてみるとほとんどの戦争が右や左の極端な過激派や、預言者が示されたバランスのとれた中道の道に従わない人々によって引き起こされてきました。

現在、宗教団体やその信者たちは、誠実さをもって過激主義に対抗する責務に直面しており、政府や国際組織と建設的に協

力し、過激主義者と対しなければなりません。そして、暴力、テロ、世界を破壊する戦争の猛襲の原因について理解し分析することを通して、過激主義者のイデオロギーを隅に追い込まなければなりません。

国際法や人権を侵害し、国の権利を侵害し、神聖冒瀆し、国連決議に反することがテロリズムを生む環境をつくっていることを強くまた誠実に認識する必要があります。残念な結果として、こうした冒瀆的な行動が、過激主義者のグループの行動を正当化するために用いられています。

また、私たちはより相互関係する世界に住み、ひとつの国の行動が直接そしてすぐに他の多くの国が関わることに発展することも認識しなければなりません。世界は、どこかでおきたことが世界中に影響し、本当に国際的なひとつの共同体となっています。暴力や過激主義の勃発は、国籍、民族そして宗教の違いを超えた人類的なジレンマとなりました。このため、こうした問題に対する戦いに勝利するためには、全ての国が努力し、アッラーが「むしろ正義と篤信のために助け合つて信仰を深めなさい。罪と恨みのために助け合つてはならない」(食卓章・二)と教えて下さっている有名なイスラームの原則に則り、お互いに協力し合わなければなりません。従つて、ある意味、過激主義の論理が広がり、正義、平等、寛容の分野が抑圧され、そうした規範は停滞していると言えます。サウジアラビア王国のイスラーム団体による過激なイデオロギーに対抗する努力は、世界に知られるようになってきました。二つの聖なるモスクのCUSTODIAN政府に従い支援し、アブドゥッラー国王と王子は、寛容、対話そして平和の価値を確立し広げ、テロ

リズムや過激主義と戦い、偉大な成功に導いてきました。

皆様、人類が建設的に協力することは、基本的に求められていることであり、イスラームの原則でもあります。アッラーは「むしろ正義と篤信のために助け合って信仰を深めなさい。罪と恨みのために助け合ってはならない」（食卓章・二）とおっしゃっています。預言者も人の協力の原則を実践しました。彼がマディーナに最初のイスラーム都市を作った際、ユダヤ人や他の非ムスリム部族との合意をしました。この合意は、よいことのために協力し、美徳を守り、害を加えることを禁じ、ともに町を守ることという内容でした。また迫害されている人たちを救済するために協力する事も基本的な原則でありました。彼は二十五歳のとき、弱者を救うことを誓う儀式にメッカで参加していました。啓示を受けた後、彼は「最高のらくだと交換しないという儀式に出席したが、この精神はイスラームにもみられるであろうか。その誓いにこたえているように思う」と言つたと伝えられています。

イスラームが要請するこの全般的な人類の協力という枠組みの中で、共通の価値に基づき、世界の種々の宗教者が協力することが、さらに重要なこととなっています。宗教は神への信心、償い、懲罰、報酬を教えています。そして、殺戮、盗み、嘘を禁じています。よい態度を確立しそれを実践し、悪い事をしないという行動規範を説いています。

人類の間の架け橋を広げ、協力する事を世界は必要としています。宗教者は、世界の過激主義者の間で横行している「文明の衝突」に対抗するために、特に協力する必要があります。そ

して、平和な世界のための行動、共生、貧富の間の社会的な協働、環境を守るための協力を人類の幸福を守るために実践しなければなりません。

皆様全てに神のお恵みと祝福がありますように。

世界宗教者
平和の祈りの集い

S Y M P O S I U M

シンポジウム

テーマ 和解と協力

8月3日(金) 16時00分～17時20分

国立京都国際会館



シンポジウム 和解と協力——宗教・民族・国境を越えて

◎進行役＝小林祖承師

◎コーディネーター＝杉谷義純師(仏教・WCRP日本委員会前事務総長)

◎特別ゲスト＝ダヴォリン・ブルジャノヴィッチ氏
 (ボスニア・コミュニティ・ガーデン)

◎パネリスト

ハンス・ウコ師(キリスト教・世界教会協議会諸宗教関係対話事務局長)

A・T・アリヤラトネ師(仏教・サルボダヤ運動創立者・主事)

ディー・シャムスディーン氏(イスラーム・ムハンマディヤ会長)

ルネ・グーマン師(ユダヤ教・ヨーロッパラビ会議・ヨーロッパ評議会常任代表)

イグナティウス・カイガマ師(キリスト教・ジョス大司教区大司教)

レオニド・キシコフスキー師

(諸宗教・世界宗教者平和会議国際委員会実務議長)

(文中敬称略)



コーディネーター・杉谷義純 本日は「和解と協力―宗教・民族・国境を越えて―」というテーマでシンポジウムを開催いたします。今回は、比叡山宗教サミット二十周年の記念の折りの集いです。今から二十年前は、それぞれ宗教の垣根を越えてお互



司会進行・小林祖承 本日のテーマは「和解と協力」をメインとし「宗教・民族・国境を越えて」をサブテーマとして議論をいただきます。本日コーディネーターをおつとめ頂きますのは世界宗教者平和会議日本委員会前事務総長であり、日本宗教代表者会議事務局顧問の杉谷義純様に御願います。ご出席の皆さま、コーディネーターの杉谷義純様よろしく御願ひ申し上げます。

いが出会う、出会いの場を持ち、そして共に祈ることが困難な時代に素晴らしい祈りの場が設けられた意義ある第一回でした。

それから十年、お互いに対話と交流の中で信頼を醸成することができました。宗教者の連帯が生まれ、それから十年の今日、世界情勢は大変厳しいものがありますが、お互いの連帯の上に協力をし、場合によってはお互いに許し合い更に、実践への場をどのように築き上げてゆくか、それが大きな課題であると思います。その意味で、このシンポジウムはより具体的、それぞれの宗教協力平和構築のために尽くされた方々がご出席されているので、その経験に根ざしたお話を聞きていただければありがたいと考えています。また、世界では今五十カ所以上の所で、色々な紛争がありますが、その中でも私たちの記憶に新しいのはボスニア・ヘルツェゴビナの紛争です。これもまだ完全に解決というわけにはいかず、先般来の国連の安保理においても厳しい議論がなされ、国際政治の谷間に揺さ振られているところ です。

しかし、開会式典においてそのボスニアに新しい時代を担う子どもたちが、和解と協力というよりも、そのまま人間として強く生きる明るい姿を拝見して、感動を深めると同時に宗教者としての責任を実感しました。まず、ボスニアからコミュニティ・ガーデン・アソシエーションのディレクターであるダヴォリン・ブルジャンヴィッチさんに、そのボスニアの現状をお聞きし、それからシンポジウムに入りたいと存じます。

戦場で失われた 場をとりもどす

ダヴォリン・ブルジャンヴィッチ氏
(ボスニア・コミュニティ・ガーデン)



私はボスニア・ヘルツェゴビナの首都サラエボから来ました。会場の皆さんのなかで、それがどこにあるのかわからない方はあまりいらっしゃらないかもしれませんが、ボスニア・ヘルツェゴビナはヨーロッパの中心部に位置しています。

一九九二年まで、ボスニア・ヘルツェゴビナは、ユーゴスラビア社会主義連邦共和国の一部でした。連邦を構成していたのは六つの共和国（セルビア、ボスニア・ヘルツェゴビナ、クロアチア、マケドニア、スロベニア、そしてモンテネグロ）です。しかし、チトー大統領の死後、ユーゴスラビアの崩壊が始まりました。それぞれの民族、宗教の政党が、ユーゴスラビアを分割し、自分たちの独立した共和国を創ろうとしたのです。不幸なことに、それは平和的には進みませんでした。一九九二年に戦争が始まり、一九九五年まで続きました。

ボスニア・ヘルツェゴビナには、三つの主な民族集団がありました。ボスニア人、セルビア人、クロアチア人で

す。主な宗教も三つ……イスラム教、セルビア正教、カトリックです。戦争中は、これらすべての人々が、領土をめぐる互いに争いました。その結果、人口四百五十万人だったボスニア・ヘルツェゴビナでは、二百万もの人が難民または国内避難民となりました。また、それぞれの民族主義者の指導者たちが民族浄化をめざしたために、二十万もの人々が殺されたのです。指導者たちの狙いは成功しました。かつては多民族のモザイクのような国だったボスニア・ヘルツェゴビナは、戦後は民族ごとに分断されてしまいました。

旧ユーゴスラビアで平和に暮らしてきた私や私の世代の人たちにとって、これは本当につらいことでした。かつては民族や宗教ではなく、個人の価値観が尊重されていきましたから、異民族間の結婚や友情がいくらでもあったのです。それが、戦後はすっかり変わってしまいました。宗教や民族が、個人の価値観よりも重要になってしまったのです。

戦争中、約百五十万人が国を離れ、

現在でも五十万人が国外で暮らしています。失業率は四十七パーセント。死亡率は戦前より高く、出生率は戦前より低い。戦争は産業を破壊し、多数の地雷を残していききました。これが私たちの国の現状です。

さて、コミュニティー・ガーデンのプロジェクトは、二〇〇〇年に始まりました。私たちの目標は、和解のための場所を創ることです。これらのガーデンは、どれもとても激しい対立があった場所に創られています。現在、ボスニア・ヘルツェゴビナ全土に十四のガーデンがあり、二千人が参加しています。どのガーデンも多民族で構成されていて、戦前のように、違う民族の人たちが出会い、交流できる機会を提供しています。プロジェクトでは、人々が自分たちの手で野菜を生産できるように、土地、野菜の種、道具、肥料などを支給します。安全な食料生産の方法についても指導しています。初めてコミュニティー・ガーデンに参加するとき、たいいていの人は自分の出身民族を名乗るのですが、二、三週間も

すると、みんなそんなことは忘れ、ただのガーデナーになってしまっています。

私たちのガーデンの最大の収穫は、なんといいっても、ともに畑を耕すことによって育まれた友情です。たとえば、戦争中は敵同士だった元兵士たちが、いまではいっしょに座り、日がな一日チェスをしています。戦争で子どもを亡くした民族の違う母親たちもいますが、子どもを亡くすというのが、どんなことか、誰よりもよく理解しあえると言います。コミュニティ・ガーデンは、戦争によって打ち砕かれた友情を再び育て直す場所となりました。

和解のプロセスは困難で、非常に長い時間がかかります。でも、私たちは、子どもたちのために、彼らがこの先ずっと平和に暮らしていけるよう、希望の種を蒔きたいと願っているのです。

杉谷 ありがとうございます。そのような現状を踏まえまして、続きまして世界教会協議会諸宗教関係対話事務局長のハンス・ウコ博士に御願います。

展望なき所、人類は滅びる

ハンス・ウコ氏(キリスト教)



この有名なユダヤ教の聖書の一節の解釈で、よく知られる韻文から私の発表を始めたと思う。

「展望なきところでは人類は滅びる」(箴言29章18節)。

私たちは今、平和のための諸宗教の会合に集まっている。このように異なった宗教をもつ人々が集まる会合はいくつもある。これらの会合のテーマはそれぞれ異なるが、意図された意味は同じだ。それは平和を切望し、和解への希望を持ち、暴力、戦争、貧困、絶望、人類の滅亡の恐怖の解決のための協力を誓うことである。

私たちは大きな意義のある言葉を話す。その中のいくつかは威圧するような、深い言葉で、私たちが諸宗教対話に関わる個人が集まるよりも、このような平和のための諸宗教の祈りの行事が重要であることを明らかにする。

私たちは、私自身が内在する制約または、限界を超えたいとの願望を表明する要請を受けてここに参集した気がしている。いや、実際私たちはこの要請に応えるために参集した。我々は世界の多くの人々によって命じられているのだ。その人々は、苦痛を持ち、宗教が問題を解決できるというよりは、宗教そのものが問題であると思っている人々である。そしてまたその人々は宗教が陰にも陽にも暴力を助長していることを知っている。また、無実な人に対する虐待の余地を与えていることを知っているのだ。彼らは宗教が優越感を主張していることも知っている。彼らはそうした傲慢さに打ちひしがれている。

そして同時に彼らは、どれだけ我々が人生の意味や全体的な方向性を見出

しうる靈感の源泉を探し求めているかを知っている。複雑で、多元的で、変化の激しい世界の中で、人生を充実させ、生活を守る靈感の源泉への渴望がある。こうした問題は、日常で、宗教として認識される問題のみによるのではない。これらの問題は、科学者、政治家、経済学者、ビジネス世界の人々、さらには、人生の目的、やる気への虚しさ、欠如を経験した人々全ての問題である。若者は、人間存在に対する意味を示す価値に根ざす究極の理想を探し求めているのだ。

諸宗教交流・諸宗教対話の運動は長い歴史を持っていない。五十年、六十年も経っていないだろう。そのため、この運動は宗教伝統に関わる全ての人々を巻き込んでいない。多くの者はこの運動を懐疑的に見、信用しておらず、むしろこの運動が希薄で混合主義に導いてしまうのではないかと恐れている。そして全ての宗教の中の多くの信徒たちは、この新しい取り組みを耳にしたことさえないのだ。

しかし、じかに自分自身を知るか体験するための靈感及び再確認ができる人々

はたくさんいる。どう自分自身を感じ、体験するかと言えば、異なった宗教、互いに全く違うという人々が、席を同じくして、祈り、共に、互いの希望と未来への展望を叶えることを祈るのである。互いに、様々な方法で至高の理想を理解しているかもしれないが、同じ願いを持っている。それは、人々は、和解し、協力し、宗教、人種、国の境界線を越えたいというものである。これは、諸宗教間関係及び諸宗教間対話において、重要なのである。我々は同じではないが、同じ願いを持っている。我々は、同じ經典、法典を信じ、崇拜しているわけではなく、我々は、ある人間性を待ち望んでいるのだ。その人間性とは、これらの違いを脅威としてではなく、豊かになる潜在性として、さらには、新たな誕生と創造性の根源として扱うことのできる人間性なのである。

我々が、参加する特権を持っているのは、比叡山及びその他の開催地であれ、違った宗教を持つものどうしの普遍的な取り組み、つまり、広範囲に渡る全宗教間協力となるかどうかである。広範囲に

渡る全宗教間協力の取り組みは、全く違いを減らすことが目的ではない。その違いを認め合うことが目的なのである。一つの宗教をつくらうとしているのではない。多様性を認め、ここに強さと存在の究極的意義を見出すことができる。祈る人（共に祈ろうが、互いに隣同士であろうが）に熟考する余地を与え、我々の任務を満たす共通の行動を起こす。つまり、人々が生き残る見通しをあたえるのだ。

宗教は、正当に受け入れられ、代々保持されるのである。それは、宗教の教義や信条の故にというよりは、むしろ、実際の活動や能力の中で、私たちの生き方の内面的変化をもたらすという意味合いにおいてである。さらに、公正と平和な社会を実現するために、内面的変化と社会的変化をめざす大きな思いやりの心との間の緊密な関係を強調する。

宗教組織及び精神的伝統は、和解を成し遂げるために最高の立場に置かれるべきである。和解とは、失敗した関係を修復する過程のことである。それは、宗教に本来的に備わっている特質であり、神と人間もしくは地域社会の関係を構築ま

たは再構築、さらには、人々が互いに和解するように促進している。宗教は、ある意味において、時間の限界を超えた、永遠なもので、この時代においては、昨日とは違った状況に直面しているのである。

つまり、今日、離れ小島のような宗教は存在しない。今日、宗教に関わる人々は、つねに複数の宗教と他の宗教の役割を考え始める必要がある。新たな役割として考えられる神と人間の和解への取りなしを行なうことと同じように、個人と地域社会の和解を求める時代を超えたこの役割は、必要不可欠な過程である。宗教は、グローバル化の時代の時代において、和解へ導く船としての役割がある。我々は、個人、国家、地球規模での幸福を歪めたトラウマを生み出した出来事、深刻化する罪悪意識、不安、怒り、及び不正義に取り組む人々、または、ものを必要としているのだ。我々は、危害を与える状況や社会的不正義に習慣的に反応してきたと思える。報復しようとする態度に代わりうるものを求める人間として、我々を導いてくれる誰か、何者かを

必要としている。

言語に絶する修復不可能と思われる状況に立ち向かう勇気を持った宗教共同体が必要である。我々は、我々をして他者を受け入れていくことを可能にするような人々を必要とし、このような認識に基づいた地域社会の再創造を可能にする政治を構築していくのだ。我々がこれまでの過去の認識と、現在の自己確立を結びつけることを可能にするような人を必要とする。

諸宗教間対話は、どんなに大きく見積もっても、相互理解と信頼を導き、地域社会の福利に貢献する活動に導く過程であるが、しかし、それが究極的な目的ではない。和解を目指すプロセスが継続されるのであれば、それは、諸宗教共同体間の架け橋を構築し、維持することを可能にする構造を構築することは大切である。その構造は、将来起こるかもしれない対立構造をも超えていける社会の枠組みである。

これは、どの宗教でも単独では成し遂げられるものではない。我々が、共に力を出し合い、協力したときに、成し遂げ

られる。これは、今日における協力体制であり、古い普遍的な方法を用いても行なわれる。その方法は、現在、諸宗教間関係及び諸宗教間対話で最も用いられている。つまり、我々は共に行動し、別々に行動しない。これを我々の祈りとし、誓約としよう。

杉谷 特に宗教というものは、どれだけ問題を解決できるか、というよりは問題そのものであるという問題提起でした。さらにまた宗教協力が私たちの間では、当たり前のように語られるが、一般にはどれだけ知られているか、そういうことにも警鐘を鳴らされました。修復不可能とおもわれる現実に立ち向かう、勇気を持った宗教共同体が必要であるというご提言でした。ありがとうございます。続きまして、スリランカのサルボダヤ運動創立者・主事でありますA・T・アリアラトネ博士に御願います。

幻想が戦争をおこす

A・T・アリヤラトネ氏

(仏教)



仏教者として私は日々の宗教儀礼のなかで、呼吸に集中する瞑想と愛をこめた思いやりの心に集中する瞑想を実践しています。パーリ語でこれら二つの瞑想はそれぞれアナパナサティ・バヴァナとメッタ・バヴァナとして一般的に知られています。

これら二形式の瞑想を実践すれば、一般的にヴィパッサナ、あるいは(直観瞑想)として知られる、より高度な形式の瞑想に進んでいくことが容易になります。ヴィパッサナ瞑想は、「私は」、「私

に」、「私の」、「私のもの」などといったように捕らえている心体コンビネーション(Mind-Body combination)の本質を理解するのに役立ちます。身体、感情、心、諸現象について深く観想しながら、「私は」、「私の」、「私のもの」として私たちは執着するこの世には、恒久的なものは何一つないという認識に達します。すべては、変化(change)、苦(suffering)、そして無我(non-self)となることから免れることはできません。

自我が永久に変化しないと捉えるのは幻想であり、その幻想は私たちの生活にカースト、民族、宗教、言語、国その他多くの分割という罫を仕掛け、競争、党派主義、嫉妬、憤り、嫌悪、暴力、ついには大量殺人や戦争にまで駆り立て、私たちを切り離します。

すべての宗教の教えには一定の礼拝、お祈り、瞑想法があり、それらを実践すれば、宗教、民族、あるいは国の違いなどの現世的な考えを超えた、精神的(スピリチュアル)なレベルにまで到達することを助けてくれます。仏教の僧侶、ヒンドゥー教のスワミ、イスラム教の

ムッラー、キリスト教の聖職者、ユダヤ教のラビといった異なる宗教の指導者達が共に宗際的でスピリチュアルな活動に参集すれば、違いを超えて共通の善と全体的な平和のために協働することができるよう、心的、心理学的、社会的、物理的環境を創り出すことが可能です。

ご存知のように、私の国スリランカではこの三十年間、社会不安と内紛が続き、今ではテロ行為さえ横行しています。幸い、他のいくつかの国とは異なり、宗教の違いが原因ではなく、主に経済的、民族的、政治的な理由によるものです。そのようなことから、私たち異なる宗教に属する者が、数年前から大小の規模にかかわらずスリランカ全土で宗際瞑想プログラムを組織しています。中でも最大の平和瞑想プログラムが、昨年、聖なる街アヌラドゥハプラ(Anuradhapura)で、百万人近くが参加して行われました。

このような経験から言えることは、一般の人たちがスピリチュアルな形で動機づけられれば、私たちの社会の異なるグループ間の和解、協力、平和をもたらす非常に重要かつ決定的な役割を果たすこ

とができるということです。世界に平和がもたらされますように。

私たちの時代の忘れがたき人物

ナンダダサ・コダゴダ教授

ナンダダサ・コダゴダ教授(Prof. Nandadasa Kodagoda)が亡くなって十年が経ちました。一九九七年八月二日、彼は私たちを残して永遠に旅立ちました。家族や親しい友人だけでなく、彼がメディアを通じて話したことや書いたものから多大な影響を受けた一般の人たちもみんな、私たちの時代のこの偉大な人物のことを覚えています。

近隣の村々の出身で、彼と共に成長し、同じ学校、マヒンダ・カレッジに通った私たちにとって、彼が私たちの学校の上級学長、講師、教授、大学の副学長、その他の要職に就いても、私たちにとって彼はいつも親愛なる「ナンデ」でした。彼の部屋のドアは常に地域社会のあらゆる階層の友人たちのために開かれ、健康その他いかなる問題でも彼のアドバイスは決定的なものでした。

彼の最愛の妻ラトナと子どもたちも、相談に訪れる多くの人たちを迷惑がらず、父親の奉仕する地域社会へ向けられた一つの大家族のように捕らえていました。そのようなことから、例年の慰霊講演を含むナンダダサ・コダゴダ財団が組織した様々なイベントに、この大家族の人たちが欠席することはありませんでした。偉大なる知恵と知識を持ち、友情に厚く、あくまでも謙虚なナンデは私たちの心の中にいつまでも生き続けます。

私はスリランカ国内でも海外でも多くのコミュニティ・サービス活動を行うなかで、若年ながら彼の同僚でいられたことは幸運なことでした。インドでは禁酒運動に関する活動で数回一緒に活動しましたが、コダゴダ教授はこの分野の国際的な泰斗でした。—OGT (International Organization of Good Templars)のアルコール及び薬物センターの理事長も務めました。私たちは一九九二年に—OGTのメンバーがオスロに集まって開催されたオーガスト・フォーレル賞受賞式と同会議の際、一緒に出席しました。また、中

国にも一緒に渡航し、両国と両国民とのより緊密な友好関係を打ち立てました。コダゴダ教授はサルボダヤ執行委員会と同長老委員会の委員を務め、特にアルコールと薬物対策の主要な助言者の一人でした。この分野での彼の貢献は、国立危険薬物取締委員会の委員長に任命されたことから分かります。

この他、私が多くの困難に直面した際、友人としていかに彼、ナンデに負うところが多かったかを述べない訳にはいきません。私の仕事を嫌悪する当局から激しい嫌がらせを受けた時も彼は決して私を見捨てませんでした。この困難な時に分かったことは、彼がうわべだけの友人ではないということです。コダゴダ教授は自分の仕事や公的、私的生活に関して明確な哲学的見地と原則に立ち、決して地位や私利私欲を求めることはありませんでした。シンプルで質素な生活をおくった彼の人生は、子どもたちや親密に交流した私たちみんなの手本となっています。

私は彼と一緒に何回か三名の国家元首に面会して、医療や国内政治の諸側面に

ついて話し合ったことがあります。これらのハイ・レベル討論の際にも、常に臆することなく、理性的に意見を述べましたが、いつも国にとって最善の点を擁護していました。必ずしも意見は一致しませんでした。政治指導者も彼のことを然るべく尊敬していました。

専門の法医学や毒物学の他、コダゴダ教授は医療教育、医療コミュニケーション、思春期、性科学などの特別研修を受講しました。犯罪防止、土着の医療、国民教育、国の資源とエネルギー管理など様々な分野への関心を持っていたコダゴダ教授は、それを活かしていくつかの国の政策立案委員会で貢献しました。

公務やボランティア活動で忙しいスケジュールにもかかわらず、関心のあった芸術や文化活動に時間を割き、一九八七年の大統領カラ・ケーティ賞を受賞しています。一九九四年にはデシヤマンヤ賞、また、国への貢献が認められて一九九六年にはヴィーシャ・ブラサディニ・ナシヨナル賞が授与されました。コダゴダ教授が受賞したその他の多くの表彰や賞の中には、シンガ・ゴールド・メダル教育

賞、カリンガ科学大衆普及賞、和平と和解の分野での貢献としてサルボダヤ・ナシヨナル賞があります。また、当該地域における薬物の分野で最も傑出した人物としてラクシミ・メノン国際賞とIOG T賞を受賞しています。

十年前に彼が亡くなってスリランカの一般の人たちが一番寂しく思っているのは、医療、言語、分化、迷信などの社会的な側面や科学的な方法、関心の高いその他多くのテーマについて彼がマスメディアを通じて行った教育対話が途絶えてしまったことです。卓越した教育者、コミュニケーションであったコダゴダ教授。彼の正しく明確な言葉使いや誰よりも素晴らしいその発音は、同時代に生きた人々の記憶に残ることでしょう。このユニークな人物の命は思いもよらない急病のために奪い取られてしまいました。亡くなる前の最後の日々は毎夕時間を見つけてはクラシック音楽の演奏を楽しみ、寛ぎの時を過ごしました。

実現には、対話であるとか共同実践、そういうこともあります。お互いに瞑想を通じて心の対話を行うという方法もご紹介いただきました。続きまして、ムハンマディア会長であるディーン・シャムスディーン博士に御願います。

杉谷 有り難うございました。世界平和

非難するのではなく
援助を

デイン・シャムスデイン氏
(イスラーム)



日本での比叡山宗教サミット第二十回記念式典に参加しているみなさまへ、「平和のあいさつ」をさせて頂きます。さらに、この地球上の人類全てに、平和への思いを届けたいと思います。私は、この度、諸宗教間対話及び和解による平和構築への協力において著名なみなさまの前で、お話しができることをありがたく思います。

しかし、はじめに、異なった宗教がありながら、社会のまとまりがあり、紛争

のなかったインドネシアに、イスラム教が入った歴史的事実をお話しさせて頂きたい。

その間、インドネシアでは、いくつもの王国が築かれていました。例えば、スマトラ島のスリウィジャヤのようなインドネシアヒンズー主義、カリマンタンのダーハヤクタイと同様、ジャバのマジャパヒット、スンダのマジャパランが代表的なものであります。興味深いことに、外国の商人がこの地にイスラム教を持ち込んだときに、これらの王国の人々はイスラム教を歓迎したのです。商業的取引は、知識の流入の媒体となり、商人と現地の人々の意見の交換が行なわれました。このつながりは、貿易にとどまらず、日常生活にも及びました。商人の中には、現地の住民として受け入れられた人もいました。現地の人と結婚し、親密な家族関係を築くことで、ついには新しいイスラム社会を形成することになったのです。

今日、インドネシアは、多くの異なった民族、部族、言語、文化、宗教により構成されています。おそらく、パプアだ

けでも三百もの異なった部族があり、残りの二百の部族は、インドネシア島に散在しています。公式では、インドネシアには、五つの大きな宗教があるといわれます。それは、イスラム教、カトリック、プロテスタント、ヒンズー、仏教であります。他の宗教は、儒教及びその分派です。

一九四五年のインドネシア共和国の序文には、次のことが述べられています。「人民の統治権を持つインドネシア共和国は、唯一の絶対神を信じ、文明化した人間性、インドネシアの統合、代表者を送ることで真の智慧に導かれた民主主義、インドネシア全人民への社会的公正に基づいている」。

この序文において、宗教は、今すぐになすべき役割と意味を持ち、社会生活から切り離すことができないことが分かります。

一九九八年に、インドネシア改革が行なわれて以来、ある地域では、地域紛争が起こり、悲しいことに宗教の干渉がありました。しかし、政府と人民は、この問題解決に取り組みました。神に感謝し

ます。アチエ州の紛争は、二〇〇五年八月十五日、インドネシア政府とアチエ州自由化運動がヘルシンキで覚書に調印し、アチエ州の三年に及ぶ長期的武装紛争の終結に至って以来、平和的に解決されました。その調印は、アチエ州問題を恒久的に解決する素晴らしい第一歩となりました。その覚書は、また、インドネシア人全てを統一する第一歩にもなりました。同意によって、何千万人もの犠牲者を出した紛争を、崇高な目標を持ち終結に至らせました。それゆえ、アチエ人は、民主的であることはもちろんのこと、より穏やかで、平和で、幸福で、公正な明日を築きました。

インドネシア政府と上院は、二〇〇一年第十八法案を通過させました。その法案では、ナンゴロエ・アチエ・ダルサラーム州にイスラム聖法の使用も含めた独自の政府の運営を認めました。アチエ州は、インドネシアで、イスラム聖法を施行する唯一の州なのです。イスラム聖法が積極的に施行される中で、アチエ族の文化を起源とするイスラム聖法を人々が快く受け入れる環境を作るには、今でも、

わずかながらの苦勞があります。悲しいことに、わずかなアチエ人は、イスラム聖法は、インドネシア政府が、アチエ州をインドネシア共和国の一部にしておくために置いたものであると認識していません。

アンボンとポソの紛争は、今でも、不安定な状態にあります。政府はそれまでに、二〇〇二年に平和合意を試みましたが、暴力をゼロにするには、六ヶ月の効果がありませんでした。しかし、再び、イスラム教団体とキリスト教団体は、小戦闘に巻き込まれ、互いに憎しみあいました。この紛争は、今でもひどい状態です。何百人もの人々が、戦闘に巻き込まれ亡くなりました。

この紛争は、宗教に根ざしているのではなく、平和的解決法と思われた宗教の多様性が、この宗派緊張の中で悪い方へ動いたのです。神のおかげで、この問題は、過去三年間で、精力的な取り組みをすることなく平和的解決を見い出しました。要するに、恒久平和を導くためには、アンボンとポソの政府と人々によって行なわれなくてはならない、三つの理論的枠

組みがあります。

第一に、イスラム教とキリスト教の両者が、互いに非難しないという理解をもつこと。共に手を取り合う態度は、必要不可欠であり、過去の悲しい経験や智慧と魂の認識基盤を掘り返すことをせずに、地域社会の信頼形成への第一歩を踏み出します。

第二に、互いに非難せずに、創造的な支援と援助をすること。過去に起こったことは、ある団体の間違いでなく、その状況はエリート政治家で解決できなかった、その地域社会の中の様々な問題の蓄積に由来するものとして指摘されなくてはならないのです。だから、草の根レベルで改革を行なう協力と和解は、基本的に必要なものであります。

第三に、独占の代わりに信頼を形成しなくてはなりません。イスラム教とキリスト教の専門用語は、すでに、互いを支配するために、それぞれの性格的、組織的競争を示す固定観念を表すものとして政治化しています。結論としては、アンボンとポソの人々は、共生と社会的つながりが欠如しているのです。恒久平和を築

き上げるために、生活を統合させる普遍的価値観に基づいた新たな認識を必要としていることは、自明であります。

杉谷 有り難うございました。インドネシアにおける体験も踏まえて、宗教対立ではない、利害の対立であるということをお話でした。更に続きましてヨーロッパラビ会議・ヨーロッパ評議会常任代表であるルネ・グーマン様に御願います。

京都から全世界に
祈りを呼びかけましょう

チーフ・ラビ ルネ・グーマン師
(ユダヤ教)



苦しみの原因はいろいろあります。自然によるものもあり、人為的なものもあります。

人為的な苦しみは国家間または組織間の相談と交渉によってある程度和らげることが出来ますが、本当に苦しみを軽減するには、自然によるものも含めて、自分の心、精神を清めなければなりません。そのことによって、包容力、平等と平和を説く宗教が、人類社会の根本的な変化に直面して、人種、肌の色、宗教的信条

の違う人々の良心を目覚めさせ、平和を求める心を呼び起こし、平和が人々の心に根差し、世界に広がるのです。

世界には限りない多様性がありますから、違った国家、宗教、文明に対して私たちは敬意を抱かなければなりません。差別するよりは、適合するように、孤立するよりは、連絡を取り合うように努力すべきです。対立と紛争よりは、対話と共生を求めるべきです。私たちはお互いの違いから離れて、共通点を求め、お互いの文明の前向きな面を推し進め、人類の進歩を加速すべきです。

長い歴史を通じて国家が、また宗教的信条が違う人々が、差別し、排他的に対立し紛争して参りました。そのことによって、大きな損失と苦しみをもたらされました。同時に国々の、また近隣諸国の安定と発展が妨げられ、時には全世界に及ぶこともありました。このような痛みに満ちた教訓を国際社会が忘れてはなりません。国々の、民族間の敵意から離れて、平和と進歩に向かう道を築かねばなりません。

私たちは差別することなく、受入れ、

お互いを尊敬し、理解し、力を合わせましょう。自分たちが人からされたくないことを決して人にしないように努めましょう。

違う民族の方々に、国籍、宗教の違う方々に、祈りを共にされるよう、私は呼びかけます。世界平和と人類の幸せのために力を合わせ、清らかな美しい調和に満ちた世界を築きましょう。

自分の人生のために祈る人は、自分のうちにすべてを見出し、精神的な充足を知ります。

自分が所属する団体のために祈る人は、個人という範囲を離れます。それでは充分な広さと理想の基盤が無いことに気付くからです。その人はより高いものを熱望し、イスラエルの全団体への穏やかな愛に執着します。イスラエルと共に祈りを捧げます。希望の中に喜びを見出し、苦悩のうちに悲嘆を感じます。過去と未来に対して崇高な清らかな思いを抱き、愛と智をもって内なる精神の本質を探索します。

さらに、イスラエルの境をはるかに超えて遠い領域に達し、人類のために祈り

を捧げる人がいます。その魂は人間の尊厳、人間の本質という、より広い展望へと思いを広げます。人間の普遍的な目的を求め、より高い完成へと眼を向けます。その人は生命の根源から自分の瞑想の命題を引き出し、自分が切に願うものは何か、未来に何を見出すのかを模索します。また、もっと広い地平線に向かって立ち上がる人がいます。全世界の神の被造物一切につながり、そのすべてのために祈りを捧げます。「毎日祈りを捧げる者は、だれも皆、来たるべき世を共に分かち合うことを約束する」という伝統に属している方です。

そして、一柱の神に捧げるこれらの祈りのすべてと共に立ち上がる人がいます。その人の未来に対するビジョンには、みんなが賛同します。みんなが共にそれぞれ祈りを美しく捧げ、お互いに活力と生命力を与え合います。喜びとうれしさの祈り、慶祝と祝賀の祈り、法悦と神聖の祈りを捧げます。

自分のことを祈り、人々のことを祈り、人類のことを祈り、世界のことを祈る、それらすべての祈りは、いつでも心の中

で溶け合って、そのことを理解するにつれて、神聖を祈り、神を祈り、人類が強く、美しく、まごころを持って壮大な広い心を持つようにと祈ります。それは単純な祈りです。二重、三重、四重の祈りです。それは祈りの中の祈り、歌の中の歌、ソロモン王の雅歌です。シュローモ（ソロモン）は平和を意味し、完璧な全体を意味します。それは王の祈りであり、その王は完璧さを有する方です。その完璧さとは、あらゆる人は自分を宗教的な囚われから解放放たなければならないということを私たちに教えるものです。宗教的な囚われは、人となりのすべてにわたってしみ渡り、その人の考えは自分の運命の上に集中します。そのことから、人は狭小になり、心身ともに果てしない痛苦をもたらします。

人間の想念と意志を高めることが必要です。全世界、人類、万物のすべてを抱擁する普遍性に心を向けることが必要です。そのことにより、自分の基礎を築くことになります。普遍性という見方が確かなるにつれて、より大きな喜びを経験し、もっと多くの神のみ光とみ恵みを

受けるようになります。

世界の全体を見るようになれば、神の摂理を知ることになると存じます。神の存在は欠陥があるところに表れるものではなく、欠陥のあるところに神が存在することはありません。すべてが不完全なところにどうして神がいらっしゃることがありましようか。私たちが持っているものはすべて脆弱で、とるに足りず、特異なエゴだけです。

普遍性に向かって絶えず努力するよう、万物の内なる神の存在を呼びかけることは、神の前に歩み、神のうちに喜びを見出す有徳の人ツァディキムの精神の本質をなすものです。それにより、人は幸せを見出し、低いレベルから向上するでしょう。モーゼが「そして私たちは何者か？」と言ったように、自分の心の底に至り、自分の特異な点を改めるでしょう。そして、世界に現れる公正と真実に気付くでしょう。

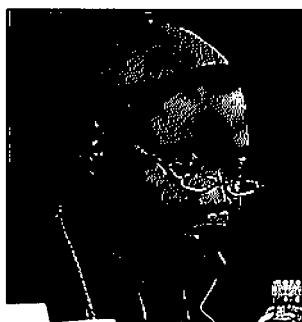
そして、敵意も嫉妬も敵対もなく、すべてが、その方の元に引き寄せられるでしょう。平和と勇気がやって来ます。同情と愛が心の中に輝きます。活動と達成

を望む気持ちが、行動と創造への欲望が、静寂と内なる黙想を募う心が魂の中で一つになるでしょう。その方は神聖な人となるでしょう。

杉谷 有り難うございました。特に祈りについて自分の祈り、人びとの祈り、世界人類の祈り、宇宙へ広がる祈りにしても、個人の祈りから始まるということでした。祈りを通じての和解協力への道を示されました。それでは、引き続きましてジョス大司教区大司教イグナティウス・カイガマ師に御願いします。

和解と協力Ⅱ宗教、人種、文化の境を超えて

イグナティウス・A・カイガマ師
(キリスト教)



世界のメディアは戦争、テロ、貧困、飢餓、病死、自然災害、残虐行為の報道に満ちています。私たちの世界は不平等です。水、食料、薬品、住まい、電気などの生活の必需品を入手し、それを当たり前と思っている人々がいる一方、乏しくて、または入手不可能で、時間とエネルギーと資力を費やして、奮闘しなければならぬ人々がいます。世界に大変な緊張がみなぎっていることを不思議に思いませんか？

すべての国が政治的、経済的、精神的

に、一体となった、幸せな、平和な世界を築こうという意志さえ持てば、それは達成できると私は確信します。対立、紛争が人間の存在の一部であることは認めますが、人間はまた、癒し、和解と協力をもたらす力を持っています。国連、アフリカ連合、ヨーロッパ連合、ASEAN、米州機構のように国際的に、各大陸、各地域において組織を作り、一つの地球家族をつくり、各国、人種、宗教の声に耳を傾け、お互いに対して敬意を抱き、地球の連帯をはかろうと試みられています。これらの組織は世界の平和と調和を脅かす問題について真に語らねばなりません。赤十字社、赤新月社、国境なき医師団は、人種、宗教、国を超えて、傷ついた人類を救援できることを見せてくれました。これらのすべてが、私たちを隔てる壁を取り去るならば、平和な調和した世界が可能であることを示しています。

歴史や地理的条件が違っても、人間は共通の肉体的特性とアイデンティティーを持ち、血管には同じ血が流れています。さらに、運輸と通信の発達により、世界は地球村になり、お互いを隣人と感じる

ようになりました。利己本位や人を支配することを止めて、科学の発見と工学技術を役立てれば、お互いが近づきます。奴隷制、植民地、戦争、人種差別、アパルトヘイト、大量虐殺などの悪行は、過去の悲しい想い出であり、また悲しい現実でもあります。これらに対する対策は私たちの兄弟姉妹を守ることです。そうすることができれば、高い丘に登ることができ、平和の代償を払うことができます。愛がその代償です。

宗教が世界規模で和解、平和と協力を推し進めることができたのでしょうか、残念なことに、宗教はたびたび悪用されました。宗教の名において人命と財産が破壊されました。ラテン語の語源が示唆するように、宗教が「人々をつなぐ」ではなく、宗教が暴力を教えたり、行使したりすることはないので、お互いを反目させるようです。

宗教を悪用し、他人の必要や感情を無視して、宗教間の紛争と過激な活動を引き起こしました。宗教は社会を結合する力であり、究極の目的は平和でなければなりません。預言者イザヤが「狼が羊と

共に暮らし、豹が子ヤギと寝そべり、子牛とライオンの子供が共に餌を食べ、幼子が彼らを導く。牛と熊は仲良く、若い牛と熊が共に臥す。幼子がコブラがいる穴の近くで遊び、毒蛇の巣に手を突っ込むが、彼らは傷ついたり、害を与えることはない」(イザヤ書11章6-9節)と予言したごとく。

私たちは何をしなければならぬか？

一、世界の現状に見られる不正、不公平、不均衡、軽視に対処するならば、和解と協力は可能です。働き掛ける人的、物質的資源は充分ありますが、自己中心な考えによって、戦争、宇宙計画、飢餓を装う人間の墮落へと恐るべき浪費に陥ります。私たちは「他人も簡単に生きることができるよう、質素に生きる」ことが必要です。

二、真の平和は、苦しんでいる人々が苦しめている人々と和解できたとき、はじめて達成できるのです。宗教的レベルでは、改宗の強制、礼拝の自由を否定すること、人々の文化と伝統の破壊、狂信などの課題に対処することが必要です。

私たちの宗教的信条は人間の価値観に基

づくものです。例えば、ヒンズー教徒は

心と目的が一致することを求め、仏教徒

は私たちの言行から悪意を取り去るよう

力説します。ムスリムは人間はすべて神

の子だと信じています。神道は自然への

尊敬を呼びかけます。シークは、私たち

は人に苦痛や損害を与えることなく、慈

悲をもって共に生きるよう嘆願します。

ユダヤ教徒は人間の尊厳を重要視しま

す。キリスト教徒は平和と愛を呼びかけ、

儒教徒は善行をなすよう繰り返しします。

三、私たちは偏見や「キリスト教徒はこ

のように、ムスリムはあのように、白人

はこのように、黒人はあのように」とい

う否定的な固定観念を取り除かねばなり

ません。私たちは慎重深く、他の文化と

伝統には有益な価値があることを受入れ

なければなりません。どのグループにも

文明を独占する権利はありません。

四、世界のほぼ六十六億人に達する人類

は、いずれかの宗教に属すると言えます。

私たちは、隣人に対する愛、平和、清純

な心、創造主に対する忠誠という自分の

宗教的価値観と伝統の基本に立ち返りま

しょう。

宗教指導者として、私たちはもつと人

情味のある世界を築くという挑戦に立ち

上がりましょう。私は一九八七年と二〇

〇二年にアッシジで行われたことが、こ

こ比叡山で行われていると存じます。そ

のように継続して、宗教間のより良き理

解を推し進めることは、疑いなく、世界

の和解、平和と協力に貢献するものです。

杉谷 有り難うございました。印象的で

したのは、質素に生きれば資源は充分に

あるのだということでした。しかし、こ

れは先進国にとりましては、厳しい指摘

でありましょう。最後になりましたが、

世界宗教者平和会議国際委員会実務議長

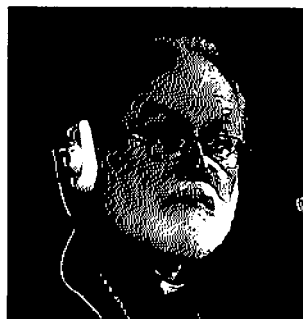
でありますレオニド・キシコフスキー様

に御願います。

他者がしてくれたように

レオニド・キシコフスキー師

(諸宗教)



今日の世界がグローバル化によって特徴付けられていることは、周知の事実である。また、世界が紛争と暴力に満ちているということも事実である。グローバル化によって定義付けられている世界なのに、なぜ、紛争や暴力によって分断されている地域や社会が非常にたくさんあるのだろうか？

我々が失っているのは、慈悲や共感という道徳的な質である。それは、人間の共通性や一つの家族であるという意識や、人間としての歩みに共に参加していることを認識することである。

宗教、民族、国家は、人間家族内のアイデンティティーが定義され、重大な境界を抱えた中にある。この意味における「重大な」という言葉は、あいまいである。それは、分断された人々を隔てる境界という何か否定的な意味である。境界は、しばしば、文化的で政治的あるいは精神的な壁である。そして、今日の世界における物理的な壁でもある。

境界を形容する「重大な」という言葉は、もし意味あるアイデンティティーを示しているのであれば、肯定的な意味をもつ。日本人であるとかエジプト人である、ナイジェリア人である、アメリカ人である、あるいはブラジル人であるとかイタリア人であるということは、意味のある文化的、歴史的な記憶を持っている。仏教徒であるとかヒンズー教徒であるとかキリスト教徒であるとか、ユダヤ教徒であるとかムスリムであるとかは、我々に精神的、歴史的なアイデンティティーをもたらしてくれる。これらのアイデンティティーは、貴重なものである。それらは、我々を孤立させないし、むしろ、他者との関係を相互に開く役割もし

ている。私にとって、自己のアイデンティティーを持つことが、他者のアイデンティティーを尊重し、価値のあるものとして認められるようになることにつながっている。他者と共有できるものを持つことは、他者から何か受け取れる能力を得られることである。

今日、我々は直面している課題の只中にあるが、宗教団体や信仰を持つ人々やその他の精神的な取り組みは、相互理解を深め、和解や相互協力への道を開くために極めて重要である。宗教的信仰は、争いや紛争に簡単に利用されてしまう面がある。宗教団体が、攻撃的で排他的なアイデンティティーの確立に使われてしまうことがある。

真の宗教アイデンティティーを構築することは、平等の基礎的な責務が必要とされる基本的な叫び・欲求である。存在理由の経験に根ざす尊厳の崇高な意識に基づいて、アイデンティティーを構築することは、宗教団体の叫び・欲求である。そして、精神的アイデンティティーのこの深い経験は、基本的責務を伴い各宗教団体を示すものとなっている。それぞれ

の宗教団体の精神的なアイデンティティーは、男女、大人子ども老人、それぞれの人間の尊厳と価値を尊重し、保護する責務を行わしめるものである。

おそらく、諸宗教協力以上に、この根本的な欲求やそれに関係する根本的な責務を具体化する行動はありえない。世界宗教者平和会議は、地球規模の諸宗教對話家族であり、七十カ国以上にその国における諸宗教評議会があり、また地域レベルの諸宗教評議会がある。これらの地域や国内における諸宗教評議会は、定期的に開催される世界大会に集い、共通の行動のための道徳的な基礎に対する意識を深め、幅広く共有している。また、世界大会においては、世界宗教者平和会議は、地球規模の共通行動を決めている。一九七〇年に京都で第一回世界大会が開催され、そして、昨年は京都で第八回世界大会が開催され、百カ国以上の宗教指導者が参加した。

世界宗教者平和会議では、一人ひとりが、それぞれの宗教信仰や宗教活動を失うことなく、独自性を持ちながら集っている。我々は、一つのテーブルに一緒に

座るために、自分自身の宗教信仰をドアの外に置き去りにすることはない。むしろ、我々が持つ宗教や教義に対する深い信仰をもちながら、お互いに対する深い尊敬、地球レベルや社会、地域における平和のための諸宗教協力活動への深い取り組みを行っている。この協力活動において、それぞれの宗教団体は、人間家族全員の平和で前向きな生活を保障し、それを構築するという共通の目的のために、他の宗教に対して、協力や力を提供している。

寛容を超えて、またさらには諸宗教間対話・協力の先にあるところに到達することは、おそらく宗教団体にとっては、ユニークで特別な天職であろう。宗教的信仰は、和解の可能性や慈悲、許し、愛の精神においてお互いを包み込み、肯定する可能性をもたらしてくれる。和解の哲学や実践は、一見、説明するのが困難のように見え、成し遂げるのは難しく思われる。しかし、多くの様々な宗教が、共通の単純法則、つまり、他者があなたにしてくれたように、あなたも他者にしてあげなさい、と教えている。この単純

なルールは、深い哲学性と現実性を端的に示している。このルールに従う事によって、自己中心や攻撃性の論理を阻み、慈悲と許し、和解、愛の論理を受け入れることができる。

杉谷 有り難うございました。境界といいますが、それを深めて考えれば、アイデンティティーの基本であるけれども、逆にそれを乗り越えることによってお互いを認め合う、それがなければお互いの個性がない、その境目をどう解釈するかということになると思います。

さて、ご出席の皆さまから、それぞれにご意見を聞きました。共通するのは、宗教は平和を求めるが、平和を疎外するものに利用されることがあるということでした。

また多くの一般の人びとからは「和解と許し」また協力というものが可能かどうか疑問視する声もあります。宗教者は、それは可能であるといいますが、その壁を乗り越えなければ宗教者の実践が評価

されないのではないのでしょうか。特に、今、現実には色々な問題が起きています。宗教は基本的には平和をもたらすものである。それには、瞑想、心構え、お互いのコミュニケーションが必要であると、原点においては理解が得られたと思います。さらに多くの人びとを納得させ、宗教者の役割を果たすために、より具体的に、例えば本日はボスニアからも参加されていますが、その和平についても宗教者が努力したという歴史があります。そのようなことを参考に、具体的な例を示されれば理解が早いのではないのでしょうか。

ここで、ご出席の皆さまよりそのような例があればお話頂きたいと存じます。

「和解と協力」は
いかにして可能か

キシコフスキー WCRPのベンドレー事務総長が、対話を通じてバルカン半島のために努力をしようという行動を起こされました。私は、その地域の人びとを

知っていましたのでベンドレー事務総長、あるいは世界宗教者平和会議、また他の宗教団体と共にボスニアに行き、そこでフォーラムを作り、対話のテーブルを作りました。そして宗教間の対話を持つことが出来たのです。

もう一つ、勇気づけられるのはスリランカでの努力もあります。そこでは宗教間の評議会を作り、対話をしていこうと仏教、キリスト教、イスラム、ヒンズー教などが対話の場を作ろうという努力をしています。宗教的な対立がスリランカにはあります。今年の終わり頃に各宗教の代表者に呼びかけた会議がスリランカで開かれる予定です。それは、現在、暴力が進行中の場に宗教者が貢献しようと出かけてゆくのです。

杉谷 ありがとうございます。カイガマ大司教いかがでしょうか。

カイガマ ナイジェリアでは、些細な出来事が暴力に繋がりやすいのです。対話があれば解決できることが大きな危機に繋がりやすいのです。それを克服するた

めに大エリア対話間評議会というものを作って、イスラム、キリストの共同体が対話を通じて平和を模索する試みを続けています。それは大きな希望だと思っています。ナイジェリアで、一番いいのはサッカーです。共にサッカーをやれば、宗教の違いは忘れます。イスラムとキリスト教の選手どうしが抱き合います。宗教よりもサッカーの方が効果があります。また宗教的な危機とみえても、案外そうではありません。

宗教よりも、水不足、貧富の差、教育を受けられない、電気がない、屋根がないなどの問題が緊張を生みます。先進国は、発展途上国を助けるべきです。過小な資源をとりあっているのは、平和は訪れません。不均衡、不平等が無くなれば平和は訪れると思います。そうすれば、アメリカにも、イタリアにも先進国にも平和は訪れます。

杉谷 生活の不安定という、厳しい状況の中からのご提案でした。世界はパレスチナ情勢を非常に心配しています。ヨーロッパラビ会議・ヨーロッパ評議会常任

代表のグーマンさんいかがでしょうか。

グーマン 私は、ムスリムの人々からラマダンで説教するように求められたことがあります。ムスリムがユダヤ教の私を招いてくれたのです。ありがたいことでした。また、私もただ話すだけでなく理解してもらい、私も彼らを理解したいという意志がありました。学校がすべての宗教に開かれていて、ダライ・ラマもこれしましたし、キリスト教の学生も来て、共同フォーラムを作り、様々な問題を提起し、話し合いました。まずは、交流するというのが大事です。

杉谷 互いの交流の重要性についてお話をいただきました。続いてシャムスディーン博士に御願います。先ほどからインドネシアの問題が話題となっていますが、同じアジアでも韓国の拉致人質問題があり、政府も非常に心配しています。このようなことも含めて御願ひできればと思います。

シャムスディーン 宗教紛争のように見

えて、実はそうではないことがよくあります。非宗教的な問題を宗教問題にすりかえてしまうことを重視しなくてはなりません。対立の原因のひとつに過激主義があります。またサイレントマジョリティーの問題もあります。宗教間対話によってお互いを受け入れなくてはなりません、中道の人びとは話し合いのテーブルに着きますが、過激主義はテーブルに着きません。諸宗教間対話は話すだけではなく、行動をとってゆかなくてはなりません。

杉谷 中庸的な意見の集約が必要だというご指摘でした。スリランカのアリヤラトネ博士には、先ほど心の問題からお話いただきましたが、スリランカの具体的な紛争解決の方法についてご意見を伺います。

アリヤラトネ スリランカも大変ですが、具体的には宗教対立としてスタートしたわけではありません。社会的、経済的、政治的な要因が根にあって対立に至りました。各地での経済問題を向上させる必

要があります。貧困から人々が脱却できるように努力をしてきました。

また瞑想による精神的覚醒を通じて話し合いの場を持ち、平和を招来できると思います。スリランカでは、五十年にわたって統合のプログラムを実施してきました。トップが解決するのではなく、地域が解決しなくてはならない問題です。それなのに、トップに任せられて紛争を起こしています。スリランカでは一九五八年以来暴力があります。日常的に暴力があるのです。軍隊も衝突して暴力で支配しています。恐れを持たないということですよ。臆病では暴力に立ち向かうことができません。

杉谷 サルボダヤ運動を通じて、経済的、社会的な問題を解決し、更にそれを和平にというお話でした。それでは、ハンズ・ウコ博士にご経験からお話を頂きます。

ウコ 多くの人々は、事故があれば救急車を呼ぶようなつもりで対話を求めています。しかし、救急車のようにはいきま

せん。むしろ公衆衛生のように時間がかかるものです。信頼を構築するには時間がかかります。意識を変えるのには時間がかかるからです。

例外もあります。ジュネーブの首都でセミナーをしました。異なった宗教同志の共同体を作ろうとキリスト教、イスラム、ユダヤ教の若者三十人が生活を共にし学び会う場を提供したのです。イスラエルの男性がヘブライ語で話したのを、隣にいたイランの女性が英語に訳しました。ここあるのはイランとイスラエルの友情モデルでしょう。

また日本には宗教の違う子どもたちの、グローバルネットワークがあります。どの宗教であれ、大事なものは将来を担う子どもたちです。ささやかながら、世界を変えるステップでしょう。他宗教の悩みを聞き、改宗の共同綱領を模索する動きもあります。対話は緊張緩和になるのではないのでしょうか。

杉谷 次の世代を含めて、勇気をもって立ち向かうというお話でした。時間も過ぎようとしておりますが、ボスニアのブ

ルジャノヴィッチさんに、これまでのお話の感想をお聞きます。

ブルジャノヴィッチ 木が大きく育つとしても、その最初は小さな種です。コミュニティ・ガーデンの子どもたちは違った宗教、言語、違った環境です。それ相互に集まり、仲良く遊び、理解を深めています。これを友情と呼ぶのだと思います。

杉谷 有り難うございました。コーディネーターが不十分にもかかわらず、皆さまのご協力でシンポジウムを終えることができました。篤く感謝申し上げます。平和の種まきは、色々な方法があると存じますが、宗教者は出来る範囲で行動してゆきたいと思います。アフガンにおける人質の問題についても、皆さまの考えがまとまれば、意見発表できる場があれば素晴らしいと思います。比叡山宗教サミット二十周年記念のシンポジウムを閉じさせていただきます。有り難うございました。

小林 コーディネーターのお話がありました。アフガニスタンの人質解放に向けたメッセージを送りたいと思います。緊急声明が、一日も早い人質の解放につながればとの祈りを込めたいと思います。

〈緊急声明を確認し、拍手にて採択〉

アフガニスタンにおける 「韓国人人質事件」に対する 緊急声明

比叡山宗教サミット20周年記念「世界宗教者平和の祈りの集い」に参集した諸宗教指導者（仏教、神道、キリスト教、ユダヤ教、イスラーム、ゾロアスター教、民族宗教、諸教）は、今般、アフガニスタンで発生した「韓国人人質事件」に対し、ここに緊急声明を発表する。

ここに集うわれわれ宗教者は、人質となった韓国人21名の一日も早い解放を願う。また、犠牲となられた2名の方に対し、心よりご冥福をお祈りするとともに、ご遺族に対し、深い哀悼の意を表すものである。

紛争解決の手段として人のいのちを軽んずるような行為は、憎悪と荒廃を生み、さらなる混乱を招くだけで、問題の解決には絶対にならない。むしろ早期の人質解放こそ、問題の解決に光明を見いだす道であると信ずる。

宗教があたかも「対立と憎悪」の震源地であるかのような誤解が世界を覆っている。しかしわれわれは宗教の相互理解と共生への協働を進めてきた経験から、宗教は本来、「和解と許し」をもたらし、「希望なきところに希望を与えるものである」ことを主張するとともに、問題の早期解決を真摯に願うものである。

平成19年(2007)8月3日

比叡山宗教サミット20周年記念
「世界宗教者平和の祈りの集い」参加者一同

世界宗教者
平和の祈りの集い

F

O

U

M

フォーラム I

テーマ 諸宗教間の対話と協力

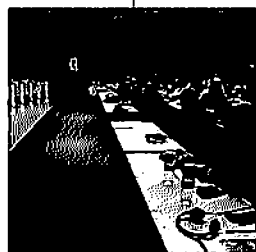
8月4日(土) 9時30分～11時30分

国立京都国際会館

諸宗教間の対話と協力

紛争和解から平和構築のために

(文中敬称略)



◎進行役Ⅱ黒住宗道師

◎コーディネーターⅡ山田經三師

(キリスト教・上智大学名誉教授)

◎パネリスト

秦 辰也師

(仏教・シャンティ国際ボランティア会専務理事)

マー・グレゴリオス・イブラヒム師

(キリスト教・シリア正教府主教)

ワヒド・リドワン氏

(イスラーム・ムハンマディア国際渉外部)

朱正山僧任

(仏教・韓国仏教宗団協議会副会長)

クリスティーナ・リー氏

(諸宗教・フォーラレ運動諸宗教対話センター代表)

アブステイーノ・ジヨバンニョーリ氏

(諸宗教・聖エジディオ共同体アジア地域責任者)

安田暎胤師

(仏教・法相宗大本山薬師寺管主)

司会進行・黒住宗道 これより特別フォーラムを開始いたします。コーディネーターは山田經三上智大学名誉教授に御願いを申し上げます。

本日のテーマは「諸宗教間の対話と協力―紛争和解から平和構築のために」です。充実した討議になることを期待しております。それでは山田先生よろしく御願い申し上げます。

コーディネーター・山田經三 それでは、テーマに従って開会いたします。最初は秦辰也様より御願いたします。



挑戦の厳しさ

秦 辰也師（仏教）



私は、カンボジアの内戦で大量にタイへ流入してきた難民に対する救援活動をきっかけに、一九八四年から今日まで、NGOを通じて、タイ、カンボジア、ラオス、アフガニスタンの復興や、少数民族問題、都市スラムや農村の貧困問題、ミャンマー（ビルマ）の難民問題などに関わってきました。活動現場でいつも痛切に感じることは、国家や宗教観、民族、言語、生活習慣などの違いを如何に乗り越え、どう「共生」するのかの難しさです。つまり、私たちは、どのように努力しても、「他人」のことをすべて理解することは不可能であるという、現実への「挑戦」の厳しさです。

私が所属するNGOは、地球上の貧困や戦争、内紛、環境破壊、災害などによって苦しむ人々のそばに立つことで、少しでも心を通わせることが可能となり、またそうすることで、世界の人々が「共に生き、共に学ぶ」ことができる平和（シャンティ）な社会の実現に一步でも近づくことが可能になるのではないかと考えてきました。「平和な社会」とは、非暴力の精神に基づき、すべての民族と人間の尊厳が保たれ、国家や民族、

宗教、言語、文化の違いを美しき多様性にとらえ、違いを認め合い、争いは対話をもって解決される社会のことです。しかし、具体的にどのようなにして、またどのような行動を起こせば、「平和な社会」を構築していけるのでしょうか？

私たちは、それを教育・文化活動への支援によって可能になるのではないかと考えてきました。ここでいう教育・文化活動とは、単に読み書きや計算能力などの技術や知識、点数のみで評価されるものではなく、伝統文化や価値に根ざした地域共同体を大切にし、考える力や想像力を培い、社会や生活の様々な問題を解決する力を養うことを意味しています。つまり、教育とは、私たちの自立のための基礎を築くものであるという考え方です。

「教育」は、社会発展のための手段であるだけでなく、基本的人権の根幹の一つであり、個々人が、直面している社会状況の中で生きていくための潜在能力を引き出し、自己が成長し力を付けてゆくプロセスであると思います。こうした視点から、私たちは特にこどもたちに焦点をあててアジアで事業を展開しています。

私たちの活動原則は、第一に、事業の実施にあたっては、活動を求める人の意思を尊重し、またそうした人々の潜在力を最大限活用して、継続性を大切にすること、第二に、対象国や対象地域の民族の文化的多様性を尊重し、一人ひとりの目覚めや気づきを大切にし、未だ充分な教育の機会が得られない人々を優先に公教育のみならず、ノンフォーマルな教育支援を視野に

入れること、第三に、これらの問題を解決するためには一方的で「上から」の援助ではなく、日本と南の国（開発途上国）間の研修、交流、地球市民教育事業、政策提言活動を重要な事業であると位置づけ、これらを行うこと、そして第四に、社会的公正を求め、最も困難な状況にある人々を最優先するということです。

私たちが特に力を入れている活動は、絵本（出版を含む）などを通して図書館活動であり、コミュニティに根ざした学校づくりや教員養成、そして子どもたちの文化交流活動などです。

私たちができることは、「貧者の一灯」のような、ほんのわずかなことなのかもしれませんが。しかし、最初の一步を踏み出し、一つずつを積み重ねていくこと、ステップ・バイ・ステップで前向きに取り組んでいくことが大切なのではないかと考えます。世界の人々と、「平和構築」に向かって、未来への希望と夢を、共に抱き続け、行動することだと思っています。

宗教に強制なし

マー・グレゴリオス・イブラヒム師

（キリスト教）



ユダヤ教、キリスト教、イスラームの三つのアブラハム宗教をはじめ、その他少数派の Mandaei(Sabia)や Yazidisなどの宗教が中東で生まれた。

神聖な経典の教えは、諸宗教間の対話は、生活のうえでも学術的にも必要であることを信じるように私たちに教えている。「対話」の意味や概念は、顕著に発展してきた。それは、その単語が辞書に載るようになったことや、諸宗教関係や現代宗教辞典にも掲載されていることからもうかがえる。

私たちキリスト教では、対話の概念における主導者としてイエス・キリストの生き方を思索し、それに従っている。彼は、ユダヤ人が優勢な地理的環境に生きた。彼は、旅を続け、異教徒で、敵国としての代表的なところであったサマリアへ向かった。イエスが向かったのは、権限と、そして男女間のいかなる接触も禁じる伝統を持つことで知られている土地であったが、そこで、彼は、サマリア人の女性と出会い、彼女に話しかけた。さらにその先に進み、ソウルとシドンに行き、カナーン人の女

性と対話をした。カナン人は、イエスの時代のユダヤ人たちが共有している伝統、宗教、また文化からみると異星人のような存在であった。

これらの例は、イエス・キリストが、新しい宗教としてキリスト教を起こすにあたって、オープンさを示し、明らかにするものである。弟子たちはイエスの復活後、主の教え、原則、精神に従った。そして、異なる民族、伝統、言語並びに文化をもつ多様な部族や人種、国家の一部を含む教会も、同じ原則や教義に従った。従って、キリスト教徒が諸宗教対話を実践することとは、実際に主の意志を体现することに他ならず、他者を受け入れ、相互尊重に真剣に取り組むことは、他者のヴィジョンを自らの一部となすことでもあると信じている。他者を受容し、尊重する原則に則り、他者を排除し、敵視することを避けなければならない。

一方、ムスリムは、対話がイスラームの原則であると信じている。クルアーンでは、「宗教に強制があつてはならない。多様性は聖なるものであり、もしアッラーが望まれたのであれば、全人類にひとつの国（ウンマ）を創られたであろう」と説いている。

イスラームの出現の際に、ムスリムは、クルアーンにある「啓典の民たちに、われわれは共通の言葉をもっていることを合意しよう」と伝えよ」の言葉に感銘を受け、征服する間に会った他の宗教の人たちとの対話に取り組んだ。

しかし、キリスト教とイスラームの間に対話に関する境界や

障壁は存在しない。今日、彼らの存在は全世界で顕著であり、彼らの効果的な参画は現実であり、ダイナミックで活発な世界的対話がみられる。

美しい市であり、日本の古都である京都は、一九七〇年の十月に国際宗教者平和会議が開催されて以来、東と西の対話を通じての宗教間協力の模範となった。

それ以降、今日の宗教指導者たちは、ほとんど毎年重要な会議に招かれ、人々の命の相互関連性を高めるために共有するものや、その枠組みを検討している。

中東では、毎日の「生活の対話」に焦点を置いている。キリスト教徒とムスリムは、属する宗教が違うのは事実であるが、多くの共通点があると感じている。例えば、双方とも神を信じ、寛容・許し・愛と善意といった教えを強調している。「生活の対話」への取り組みを通して、宗教や国のレベルでのお互いの喜びや悲しみを分かち合い、私たちそれぞれが、お互いの存在をより近く感じ、私たちを繋ぐ宗教的友愛を反映した愛の絆を強化することができる。

そして、「活動の対話」も起こった。この対話は、お互いにオープンで正直で透明性があることが条件で義務となつていく。教育的な団体であれ、社会的団体、人道的団体、慈善団体、レクリエーション団体など、どんな組織であっても、組織内における他者との壁をもたない。すべての組織は、信条、宗教、民族、帰属また人生の展望の違いに関わらず、他者へのサービースに努めている。宗教間の対話は、福祉や社会をより良いもの

とするために、最も重要なチャンネルであると言われている。

今日の集まりで、私たちは、人類をより良いものとするために、とくに世界平和建設のためには、宗教間協力が必要であることを強調しているし、確信している。

世界のなかで、耳目の中心の一つである中東のシリアから今回私は参加しました。前世紀の一九五〇年代より、地域の全ての人々は、絶え間ない心配のある生活を送っている。この心配はかつてもそして今も、平和が無い状況がいつ起きてもおかしくないという絶え間ない脅威にさらされている事実があるからである。もし平和でなくなると全ての生活のあらゆることが脅かされ、妨げられ、安全を妨害される。

私は、パレスチナ問題が沸騰し、それが闘争や摩擦、アラブとユダヤの紛争問題が主要因であるといわれる時代に生まれ育った世代である。私たちの地域的關係と歴史の中でこの悲劇的なページを終える前は、私たちは、周囲で引き続き勃発する戦争に巻き込まれて、翻弄されていた。イラン・イラク戦争、レバノンでの継続する事件、湾岸戦争、引き裂かれ危険な状況のイラクのケースなど。イラクでは、情け容赦ない無政府状況にさらされ、重圧的で耐えがたい対価を毎日支払っている。無法・無秩序からなる治安の欠如、そしてそれらが原因でこの人道的危機が生じた。

戦争や紛争の堆積する中で、最も危険な現象は、地域の宗教が、私たちが今日目撃しているほとんどの暴力、テロリズム、痛めつけ、殺戮の背後に宗教が使われているとしばしば非難さ

れていることである。これらの全ての要因が、人や共同体を分断し、家や国から追い立て、派閥主義や宗教の名の下に、価値や原則や倫理を改竄することの原因となっている。

実際、宗教は、地域の大混乱すべてに対して無実である。しかし異なる宗教を信奉する人々の間の敵意が増長され、またその敵意が固められている。私たちは、前代未聞の危機的な次元の新たなネガティブなページを毎日繰っている。そしてそれは、かつては連帯し平和であった人々の間に、深い反意や憎しみ、復讐心を促す結果を引き起こしている。

私たちは、社会のさまざまな層に属する人たちが、以下の無辜の被害者となっているのを目撃している。

一、計画的な殺戮・無差別に子供・女性・聖職者を搾取すること。

二、強制的な移住・すでに人口統計学的な影響や種々の宗教団体が侵食されていると感じている。

三、継続的な生命と財産に対する脅威・種々の宗教団体を荒廃させ、不安定にさせていることを目撃している。

右記の全てのことは、宗教の中身や教え、原則や精神に反している。平和と治安に害をもたらし、脅かしており、許し、寛容、共に生き、宗教的寛容の意味を改竄している。

「世界平和のための諸宗教の集い」と題した最初の比叡山サミットは、ユニークな試みである。今回、天台宗務庁のゲストとして同じテーマの会合に参加したのは二回目である。十年前の最初の会合の評価やインパクトを周知させる事は大変重要で

ある。メディアの点からすると、とてもポジティブなことであった。信仰深い全ての宗教並びに文化的背景に感銘を受け、平和のためにともに協力することを促進した。最初の会合のスピーチは、過去十年間、多くの会合や集い、会議や著作などで引用された。これは、仏教の教義や教えそして、仏教が世界平和を促進し進める上で極めて重要な役割があることの生きた証である。

さらに、今回世界の宗教代表者が再び一同に会した。今回の集いは、異なる宗教の代表者として、お互いの関係を再検証し、活気づけることに貢献するであろう。そして、世界に共生し、お互いのより良い理解を育て、宗教間の愛と平和の柱を強化し、実証することができるであろう。

キリスト教徒として、主イエス・キリストが「愛」を強調して、次のように教えてくださっている。「わたしがあなたがたを愛したように互いに愛し合いなさい。これがわたしの掟である」(ヨハネ15章—12節)。その結果、キリスト教は、すべてのご意志を基盤としている。昇天する直前、イエスは、「わたしは、平和をあなたがたに残し、わたしの平和を与える。わたしはこれを、世が与えるように与えるのではない」(ヨハネ14章—27節)。復活後、平和の概念は、弟子たちの人生や使命のなかの大きな位置を占めるようになった。イエスが、教会や共同体の生活において平和の根本的な重要性を弟子たちに何度も繰り返し説いたことは、このような不安を抱え、障壁の多い世界のなかで、最も必要とされることである。もしキリスト教が

平和を教えたり求めたりしなければ、人類へ奉仕することはできなかつたであろう。イエスは、「平和を実現する人は幸いです。その人たちは神の子と呼ばれる」(マタイ5章—9節)と教えてくださっている。パウロからエフェソの信徒への手紙の中で、「実に、キリストはわたしたちの平和であります」(エフェソの信徒への手紙2章—14節)と述べられている。

イエスは離別の祈りの中で、「わたしの平安があなた方に与えられますように」と祈られた。イエスは、信仰深い生活における平和の重要性を強調した。毎日の礼拝のなかで、「あなたに平安がありますように」と繰り返し、礼拝の最後には「平和に進め、主の平安があなた方すべてとともにありますように」と祈る。

従って、もしこの会合における私たちの祈りが、和解を通して平和を構築することへの祈りであるなら、平和をつくる人として神から祝福されるであろう。

平和を教えるすべての宗教の教えは、私たちの平和への努力や行動を実践する必要性も強調している。とくに、私たちは、世界の複数の地域で、基本的な平和が毎時間ごとに脅かされている困難な世界に生きている。人や宗教団体間の信頼は、平和が欠如する状況で生活する結果、侵食されてしまう。

遠くから幅広い参加者が集うこの諸宗教代表者の会合が、平和と愛を唱導し、すべての次元で多元主義が社会の中心的な原則となり、良いこと、人類のためになることに忍耐強く取り組むことを世界は期待している。人類は、良い行いと規範を行う

ことで、様々な背景を持ち、様々な国、文化、言語を超えて、一つに一致することができるといふ私たち宗教者の声が世界に聞き届けられることを望む。

私たちは、それぞれの国の政府に、機関や関係団体における多元主義を受け入れ、正義、愛、友愛が優る社会を構築するために尽力するように求める。

最後に、シリアのお祈りの一節を紹介する。「覚えておきなさい、主よ、ピウス王、女王、世界の指導者が、平和に生きることができますよう、信仰で彼らに武装をさせて下さいますように」。

平和への道、アチエ

ワヒド・リドワン氏（イスラーム）



平和のために

まず初めに、この発表がアチエにおける平和を確認する根拠強く消耗させる努力の中で、重要な出来事の概略でしかないことをお断りいたします。

二〇〇三年十二月九日月曜日、スイスのジュネーブにてインドネシア政府とGAM（自由アチエ運動）にアチエ州で二十六年間続いた血なまぐさい紛争を終わらせる平和和解の協定が行われました。この協定は熱狂的な称賛を受けてインドネシア軍隊からと同様に多くの市民、政府官民に受け入れられました。

国際社会はインドネシア政府とGAMの間に戦争中止の調印が行われたことを歓迎しました。アメリカ合衆国ブッシュ大統領はホワイトハウス記者室にて、インドネシア政府とGAMのリーダーに喜びの言葉を発表しました。アメリカは、アチエで何千もの無実の犠牲者を出し、ほぼ三十年にわたってインドネシアの高潔を汚したこの紛争を終わらせるための努力を支えています。また、ブッシュ大統領はインドネシアのメガワティ大統領と、暴力ではなく和解を優先するアチエの人々、そしてHDC（ヘンリー・デユナン・センター）の果たした役割を賞賛しました。アメリカは日本、オーストラリアと共にこの地域に平和を生み出すでしょう。更に、国連事務総長もこの協定を歓迎されました。

この協定を支持するために、アチエに十二名の国際平和監視員（後に追加の七名）が入りました。この監視員はスイスに本部を置くヘンリー・デユナン・センターから来ました。同時に、平和協定の一環として、インドネシア軍部はアチエ州の全ての軍事活動を中止しました。

アセアン（東南アジア諸国連合）のメンバーは、例えばフィリピンの防衛大臣は、和平合意の施行を調査するために二十五

名の軍の上官をアチエに派遣すると声明したように、アチエの状況が良くなるよう活発に関わっていました。この軍の責務は、アチエの状況を視察し、合意に違反していないか調査し、合同安全委員会（JSC）にその結果を報告することになっています。インドネシアのメガワティ大統領が、フィリピン政府にアチエの状況視察を要請したため、この派遣が実施されることになりました。

アチエ地域で、GAM軍の報道官であるテングク・ソフヤン・ダウツドは、GAMは戦線から二十八万九千名の戦闘員を撤退させると発表しました。この人事は、アチエ地域の十七のGAM支配区、その各地区に配置されている一万七千人をアチエから撤退させることを意味しています。彼らは隔離され、GAM軍司令官によって監視されることになっています。これは、GAMとインドネシア政府が調印した合意事項に添ったことであります。

六ヵ月後、新しい橋で六月三十日に悲惨な殺戮がおき、アデイ・カマルとノヴィアンティがアチエ・ベサールの村であるラム・テンゴの自宅の近くで死体となって発見されたときに、和平合意は破棄されてしまいました。彼らの死体は、銃痕でおわれ、目撃者によると、銃を持つ男たちが、夜カマルの家に押し入り、彼とその妻に立ち去るように命じました。そして、その後目撃者は銃声を聞いたが、実際に殺人が起きたかどうかは分かりませんでした。

地元メディアは、治安上の問題と紛争による問題、両方が関

連する事件であると伝えました。例えば、合同治安パトリールがケチャ北部にあるブラン・マンガット村で実施されたことがありました。四名の男性が、パトリール中の治安維持官にチェックのため足を止めるように命じられ、それを拒否した為に発砲され殺されましたが、その後、彼らの死の報復として部隊を送りました。

一方、二つの暴力事件がアチエ地域以外でも起きました。二つの事件とも、インドネシア軍の情報筋によると、分離主義を掲げる部族によって行われたと伝えられました。

永続的な平和への希望

津波災害は、アチエの人々が戦争に終止符を打ち、平和的な共存のための話し合いを再開することのきっかけとなりました。それゆえに、インドネシア共和国政府とアチエ解放運動との間で、二〇〇五年八月にフィンランドのヘルシンキで（後に理解の記録と呼ばれた）合意が調印されたが、その枠組みの中で、政治・法務・治安の三人の調整大臣たちにたいして、大統領は、以下のことを述べた大統領の指令書を提出しました。

一、合意を実施するために計画され政策化されているすべてのことを調整し、協調すること。

二、連帯する政党と共に、各政党の指導者はアチエの長老のレベルで解決できない、合意実施中に発生した問題を解決すること。

三、調査をし、指針を与え、合意実施を査定すること。経済調整大臣は、経済部門における合意実施に関する計画や政策について調整し協調する役割をもち、特に海外債務、住民税、燃料管理、交通、ナンガロー・アチエ・ダールサラームの知事や関連大臣が関与した取引についての調整をすること。

最後に、福祉担当調整大臣は、社会・人的分野での合意実施に関する計画や政策について調整し、協調する役割をもつこと。特に、社会安全や、アチエ解放運動に参加した人たちが社会に早く再編入できる枠組みについての賠償や、ナンガロー・アチエ・ダールサラーム知事時代に苦しんだ他の人たちへの賠償について調整すること。アチエが調和と平和のもとに新たに再構築されますように。

ありがとうございます。

世界平和の為に祈ろう

朱正山僧任（仏教）



比叡山宗教サミット二十周年を記念する「世界宗教者平和の祈りの集い」の開催を心からお祝い申し上げます。

この席をお借りし、これまで「日本宗教代表者会議」の名譽議長を引き受けてご苦労された渡邊恵進天台座主の労苦をねぎらい、後任の議長として日本天台宗第二五六代座主半田孝淳大僧正が就任なさいましたことをお祝い申し上げます。

二十年前の一九八七年に初めて開催された「比叡山宗教サミット」では、これまで宗教間の和解・協力と世界平和に向かう宗教家の役割について意味ある論議を行い、新たな談論を提示しました。

二〇〇一年九月十一日、アメリカ・ニューヨークで起こった同時多発テロ以降、世界各地で絶えず起きている「テロと反テロ戦争」が漸次拡大する一方であり、全人類を恐怖に陥れています。これらすべてが「武力による問題解決とそれに対する憎悪と報復」という悪循環が繰り返されているためです。

仏教を始めとした宗教が、ほとんど「愛と慈悲」を教えています。残念なことに、世界各地で起こる紛争と戦争において、

「宗教守護と聖戦」を名分に掲げているのが現実であり、多くの人々が「世界平和を害する原因と背景に宗教がある」という極端な主張が出ているのも事実です。

勿論このすべての責任は、平和をめざす宗教の教えを歪曲し、自らの政治的・理念的目的を達成するために悪用する誤った政治指導者にあると言えるでしょう。しかし私たち宗教家が、自己犠牲により、積極的に問題解決に乗り出さず、傍観して来たという側面もあったということを自認せざるを得ません。

世の中に問題が多く汚染が進むほど、平和と清らかさを追求して来た宗教が果たす役割が一層必要となってくるでしょう。泥沼から咲き出る美しい蓮の花は、自らの生命基盤である泥を浄化し、人々に希望を与えます。私たち宗教家がすべきことは、この蓮の花と同じだと思えます。世の中が暗く、憤りと憎悪にあふれ、暴力が乱舞し、戦争が絶えないので、一層宗教が必要になってくるのです。どんな名前の宗教でも、当然この世の中に希望を与える蓮の花にならなければならないでしょう。

中国の古典である《周易》には「木の葉は落ちて腐り、地を肥やす(葉落糞本)」というフレーズがあります。多分私たち宗教指導者も《周易》のこの名句を指針にしなければならぬのではないかと思います。「私たちがいかなる困難を経験し、命を失ったとしても、人類和合と世界平和の土台をしっかり築く礎になる」という誓いをし、実践して行かなければならないでしょう。

イエス・キリストは十字架にはりつけられ亡くなられ、孔子

は困窮に周遊したし、マホメット聖者はメッカから追い出されて砂漠を徘徊し、お釈迦様は王子の座を捨てて乞食修行者の道に出ていかれました。この方々が経験したこのような苦楚は、「自らを犠牲にして世の中を救う」という大きな誓いから出発したものでしょう。

私たちは一九八七年の「比叡山宗教サミット」第一回大会で、「自ら宗教の伝統と信仰を忠実に守りつつ、世界平和と人間の大義のために献身しよう」と誓いました。しかし、私たちのこのような誓いにもかかわらず、地域・思想・貧富・男女・世代の違いをめぐる起る人間同士の葛藤と紛争を乗り越え、これからは人間が生態環境を暴力的に破壊する自然との紛争が、より深刻な状況となってきました。今のように、これらすべての問題に対し、真摯な宗教的省察なく、即自的で物理的対策で一貫した場合、私たち人類自体の生存が脅かされかねない状況です。

「対立と憎悪」による問題解決方式を捨て、あらゆる問題の解決において、「愛、和解と許し」を最も重要な考慮事項にしなければなりません。そして、この課題は私たち宗教指導者が先頭に立って努力しなければならぬ義務であり責任です。

この席に参席なさった宗教指導者の皆様！

私たち皆で、神様、アラールの神、仏様、そして各自が仕えている神に切なる祈りを捧げましょう。

世の中の人々が皆、対立と憎悪から脱し、互いに愛と許し、慈悲を施し、心をひとつにして世界平和のために協力し合いま

しよう！

本年七月十六日、日本の新潟県において地震が発生し、多くの人々が被害を受けたとのニュースをお聞きしました。

地震によって亡くなられた方々に対し深い哀悼の念を表します。また、被災者の方々には一日でも早く復興されますようお祈りいたします。

また、現在アフガニスタンのタリバンに人質にとられ犠牲となった韓国人二名のご冥福を祈ると共に、今日、拘束中の二十一名の人々が、人類の平和の為、早く釈放されるよう心から祈念いたします。

愛は相互のもの

クリスティーナ・リー氏（諸宗教）



今日の世界にあって、テロと暴力は一向に減る様子がありません。文化的な違いだけでなく宗教の違いが、世界の平和を不安定にする要因になっているかのような印象を与えています。

私たちは、こうした悲惨な争いを目にしながらも、希望につながるしるしを見落としてはならないでしょう。多くの人々や

組織が、調和ある共存への土台を築こうと、数多くの活動を行っています。この目的を達成するため、諸宗教間における対話と協力は、ますます重要な道になっています。

平和とは、単に武器を用いないということではありません。暴力によって平和を求めることは、新たな暴力につながります。また平和とは、外部組織によってのみ実現するものではありません。

平和は、グローバルに、かつ遠くを見る展望をもって、探求すべきでしょう。教皇ベネディクト十六世は、アッシジでの「宗教者平和の祈り」二十周年記念にあたり、次のように語っておられます。「平和を築くために、文化・政治・経済秩序を用いることは無論重要ですが、何よりもまず心に平和を築くことから始めるべきでしょう。心こそ、感性の育つ場であり、平和への心を養うことができます。また反対に、平和を脅かし、押し潰すことも起こり得ます」。

平和を育てるには、改心が必要です。内面から憎しみや自己中心を乗り越えることができなければ、平和は存在しえません。この根本的チャレンジを前にして、宗教は決定的な役割を担っていると言えます。諸宗教は、深い精神性の中から、各々が持つ精神的強さを引き出し、連帯と平和に向け、人類を導いていくことのできるものでしょう。個人レベルに限らず、異なる民族や国、文化の人々の関わりを変える戦略を生み出すのは、数々の偉大な伝統宗教において他にあるでしょうか。

ここで、死や暴力よりも力あるものの存在を思い起こしまし

よう。その力は、目覚めを待っている潜在的なもの、あらゆる男性・女性の持つDNA（遺伝子）に刻まれている「愛」です。この愛は、キリスト教徒にとっては、神の内にある真の愛に参与することですが、他の宗教においても、慈悲、憐れみと呼ばれるものです。

イスラム教の格言にはこう記されています。「神は百回でもお赦しになる。しかし神が最大の慈しみを注がれるのは、ご自身が造られた最も小さな者を愛ゆえに赦した者である」と。

仏様（仏陀）は最初の弟子たちに、生きとし生けるすべてのものへの憐れみを説き、「僧侶たちよ、世への憐れみに動かされて、多くの者たち、男女の幸福のために働きなさい」（マハガ19）と語っています。

キリスト教徒は、すべての人を愛さなければなりません。どの人の中にもおられるキリストを愛するからです。いつの日か、キリストご自身が「あなたはそれを私にしてくれた」（マタイ25-40）と私たちに言われるでしょう。

この愛は、諸宗教の聖典に見られる特徴を備えており、「黄金律」と呼ばれます。ガンディーは次のように明言しました。「あなたと私は一つであり、同じものです。私があなたを傷つけるなら、私自身を傷つけることになります」。

またイスラム教の伝統には、こうあります。「あなた自身に望むことを、自分の兄弟姉妹のために望まない者は、決して真の信仰者とは言えない」（Forty Hadith of an-Nawawi 13）。ユダヤ教では「自分にとって嫌なことを仲間にしてはならない。こ

れが律法である。この他はすべて、注釈である」（Talmud, Shabbat 31 a.）。仏教においては「自分が傷つくと思うやり方で、他の人を傷つけてはならない」（Udana Varga 5.1）。そしてキリスト教では「自分がしてもらいたいと思うことは何でも、人にしなさい」（マタイ7-12）とあります。

ここで、愛の最も大切な部分についてお話したいと思います。二人またはそれ以上の人が、互いにこのように生きるなら、愛は相互のものになります。これは私たちの力になります。互いに離れていても、一つであるという確信を持てるからです。そして、私たちのすることは、一人ひとりの努力の結果というよりも、私たちをつなぐ絆の表現となります。この絆から生まれる光に照らされて、私たちは自分のすべきことがよく分かるようになり、それを実行するための新たな力を得ます。私たちの相互愛からは、平和を勝ち取るために必要な知恵と力が生まれてくるでしょう。

相互愛によって生まれる一致とは、複数の人の集まりではありません。連帯や協力、対話に終わるものでもありません。この一致が意味するのは、互いが愛の内に歩み寄り、私たちを超越する「御方」の存在を輝かせる、ということです。キリスト教の典礼では、「愛と慈しみのあるところ、神はそこに知られる」と歌います。福音は、二人またはそれ以上の人が真の愛のうちに一つになるなら、平和そのものでおられるキリストご自身が、人々の間に存在され、それゆえ彼ら一人ひとりの中にも存在される、と伝えています。（マタイ18-20参照）

前教皇ヨハネ・パウロⅡ世は、一九八六年インドのマドラスにおける諸宗教代表者との集いで言われました。私たちが対話の内に互いに心を開くなら、対話が思いやりと相互尊重の上に築かれるなら、私たちは神に向かって心を開くことになる。そして「神が私たちの間にいてくださるようになります」と。

二十年前、比叡山宗教サミット開催というインスピレーションを抱かれた山田恵諦座主猊下のことが思い起こされます。山田座主猊下は好んで、私たちに次のように言っておられました。「あなたがたはイタリアで、私は日本で、心一つにしているなら、神は私たちと共にいてくださり、私たちが神のお望みを果たすのを導いてくださるでしょう。私が遠い日本の地にいても、あなたがたと同じ心で生きていることを覚えていてください」と。この神の新たな存在は、寛容、理解、赦し、平和、喜びを私たちの内に育みます。そして、私たちの心に愛の炎を燃えたさせ、人生の旅路を照らし、和解の内に私たちを一つに結んでくれます。

フオコラーレ運動は世界百八十二ヶ国に広がっていますが、今お話した神の存在を保つことを、運動の精神と生活における頂点としています。この生き方を選ぶことにより、家庭の人たちは困難を乗り越える力を見出し、若者たちは人生の理想に出会い、特定の宗教を持たない人々は、正義や連帯、平和や人権といったすぐれた価値観を私たちと共有しています。

今日の世界において、私たちは憎悪と暴力の山を動かすという巨大な課題に直面しています。しかし、孤立した何百万人の

力を超えることも、人々が相互愛と相互理解、一致を人生のモチベーションとする時には、可能なこととして現れます。

フオコラーレ運動の歴史の中で、私たちは様々な文化と宗教の人々と実りある対話を経験してきました。各々が自らのアイデンティティーを維持しつつも、私たちは兄弟愛と平和の旅を共に歩むパートナーになったのです。立正佼成会や天台宗の仏教の方々、アメリカ・ムスリム・ソサイエティのイスラム教の方々、インド・ガンジー派のヒンズー教の方々などです。

こうした深い兄弟関係を基盤としたとき、あらゆるレベルでの宗教協力におけるイニシアティブは多くの実りをもたらし、それと共に、私たちの宗教コミュニティの中や様々な場所にこの生き方が広がっていくでしょう。愛の実行は、赦しと和解への道を開き、過去の緊張をやわらげ、私たちの記憶を清めてくれるでしょう。

中近東に住むイスラム教の友人の一人が私たちにこう語ったことがあります。「爆撃により多くの橋が破壊されました。でも、私たちが共に築いた『愛の橋』は、どんなミサイルも破壊できないでしょう」と。

フオコラーレ運動創立者であるキアラ・ルービックは、このように語っています。

「世界は『愛の侵略』を必要としています。これは私たち一人ひとりにかかっています。人間はこの貴い愛の宝庫です」と。

和解による

平和構築のための

諸宗教対話と協力

アゴステイノ・ジヨバンニョーリ氏

(諸宗教)



一九八七年に第一回を開かれ、二十周年を迎えられたこの会合に参加していることを、とても光栄に思います。山田恵諦座主猥下はローマ教皇ヨハネ・パウロⅡ世が一九八六年に開催されたアッシジの平和の集いに深い感銘を受けられ、天台宗でも同じように日本において平和のために宗教者による祈りの集いを始められました。一九八七年聖エジディオ共同体からの参加者であった私とアルベルト・クワットルツチ氏は、第一回の比叡山サミットに参加し、また二十年経った今この場に來させていただいていることをとても嬉しく思います。これは聖エジディオ共同体と天台宗の深い友好関係と強いつながりの印であり、私たちの真剣な平和への取り組みの上に確立されたものがあります。

ご存知の通り、一九八六年のアッシジの平和の集い以降、聖エジディオ共同体は毎年、ローマ、ワルシャワ、ブリュッセル、アーヘン、リヨンなどのヨーロッパの各地域で毎年諸宗教の祈りの集いを開催しています。毎年、天台宗を始めとする多くの

日本の宗教者がこの私たちの祈りの集いに参加してくださっています。半田孝淳座主猥下も何度も私たちと祈りを共有したことを覚えています。

二十一年前、アッシジにおいてヨハネ・パウロⅡ世はこのように強調されました。「歴史上かつてなかったと思われるが、真の宗教の考え方と平和の価値の偉大さは本質的つながりが明らかになってきている」。これは素晴らしい展望であり、奪うことのできない靈的な平和の重要性を喚起するものであります。それからほんの数年後、山田恵諦座主猥下はワルシャワにおいてとても重要なスピーチを行われ、あらゆる宗教の信者は二十世紀の悲惨な歴史から平和の必要性を学ぶべきであることを強調されました。

一九八六年の第一回会合の最後に、ヨハネ・パウロⅡ世もこのように言われまして、「我々は共に、我々のまなざしを平和への展望でいっぱいにした。それらは平和の新しい伝達手段のため、平和の新しい意思表示のため、平和へのエネルギーを開放した。その意思表示は、歴史的な、また近代イデオロギーにより発生した対立を引き継いできた致命的な連鎖を打ち砕くであろう。平和は学習の場である。全ての人に開かれており、専門家や学者、戦略家だけに開かれているものではない」。

私たちはこれをアッシジの精神だと言っています。全ての人が、男性も女性も、若い人も年配者も、アジア人もヨーロッパ人もがこの精神を生きていくことができます。ちょうど数ヶ月前、ベネディクト十六世がアッシジを訪れ、この「アッシジの

精神“を、今日世界が真に必要としている宗教と平和の精神として支持しました。

私たちは今、二十一世紀を生きており、今日、平和について話すことは容易ではありません。特に中東やアフリカの紛争を考えると、平和は架空の夢のように見えます。異なる集団が相手の集団から身を守るといふ、平和のない社会を考へても同様でしょう。テロリストたちの狙いは、平和を実現不可能な夢のように見せ、顔の见えない敵に対する不安感や恐れを増大させることにあります。平和は、悲しいことに、現実には直面する無力な人々にとつて、夢でしかないのです。憎しみや侮辱の伝道者や評論家は、警報として、これが真実であることを伝え、私たちにこのことを思い起こさせるのです。彼らは、争いは文明と宗教の本質から来ていると断言します。これが彼らの運命であり、また私たち全ての未来でもあります。しかしそのことに現実味を持たずに、その敵意に満ちた世界を前に無防備でいることが懸念としてあるのです。

しかし経験というものが示しているように、今日、我々が多くの場面で目にしているように、戦争が安全を創造するのではなく、むしろ反対に危険を創造しているのです。銃の数が肥大していく中、強い軍隊に配備され、あるいは戦争が始まってしまふ中では、市民の安全は良い状況に向いません。戦争からは、間違いなく人間の憎しみの連鎖が始まり、たとえ豊かな国においても戦争によって貧困が広がり、戦争によって多くの人が傷つけられ、言い方を換えれば、人々が平和に生きることができ

ないのです。これに對して、人々が敵対する者同士で再び對話から始め、共存への合意を模索すれば、安全はより簡単に得られるのです（経済発展と政治的安定を伴った形で）。

私たち聖エジディオ共同体の経験ではないですが、モザンビークで数年間に亘り對話がされただけでなく、北部と南部のキリスト教徒とムスリムの間で市民戦争が起こっているコートジボワールで、二〇〇七年三月、長い間続いた對話の上に合意に至り、現在コートジボワールには平和が戻っています。

一九四五年以来、日本人は世界にとても良い例を示してきました。皆様の国は六十年以上もの間、平和を支えてきたのです。不運なことに、今日の日本ではある者がこの平和への重要な取り決めになくそうとしています。しかし私たちは紛争や争いが人類の運命ではないことを強調しなければならぬのです。

世界には紛争を誘発してしまうような政治的・文化的・人間的な責任の源泉があり、戦争を許してしまうことは腐敗をもたらします。宗教もまた自身を戦争の論理で擁護し、憎しみを淨化し、兵器に加護を祈ります。人類の責任は大変なものです。実際、私たちはいつも、戦争か平和かを決断できるのです。日本はとても重要な国であり、世界中が日本に注目しています。もし日本がこの平和への取り決めに撤廃し、日本国憲法九条を変更するなら、東アジアに限らず世界の至るところで戦争が簡単に起こるようになるでしょう。

しかし、私たちは多くの日本宗教者が、戦争と憲法九条改正と戦争に反対するキャンペーンを始めたことを知っています。

皆様の取り組みはとても意味のある、靈性に満ちた、具体的な活動であります。皆様は平和の証人となるのです。この皆様の平和への日本の選択を維持する努力に心から感謝し、皆様の取り組みを支えていきたいと思えます。私たちが忘れがたいことは、どれだけ多くの日本人が第二次世界大戦の被災者になったか、どれだけの人々が広島や長崎の原爆の被害に遭ったかということです。私は何度でも繰り返しします。紛争は避けられない運命ではなく、ここ最近の異宗教間、異文化間、また遠隔の国家間での対話は平和のメッセージを生み出しているのです。まず初めに、関心事の中心に内在している男女にかかわっている靈性があるのです。男性にも女性にも関係し、彼らの関心事の中心にあるものです。

この二十周年は、今我々が生きているこの時代においても重要です。世界は冷戦時から大きく変化したものの、しかし我々が再び平和の祈りと博愛への希望を取り戻すために結集することとは有意義なことなのです。私たちは天台宗に心から感謝しています。なぜなら、この会議を運営し、このように沢山の人々を招き、平和のために結集させているからです。この二十年間、天台宗はアッシジの精神を東アジアにおいて引き受けてくれました。また今後もこの精神を末永く、世界のあらゆる国々で大切に頂きたいと思えます。

今年、十月二十一日から二十三日、イタリアのナポリという素晴らしい都市で開かれる聖エジディオ共同体の祈りの集いに、皆様を来賓・友人として招待したいと思えます。ローマ教

皇ベネディクト十六世もこの会議に参加される予定ですが、一九八六年の第一回がアッシジで開かれたときを除けば、現ローマ教皇が参加されることは初めてのことです。これは重要なしるしで、カトリック教会が平和のための諸宗教対話に深い参加を強調していることを示しています。私はこのしるしが、日本の、そして世界各国全ての宗教者の平和への取り組みの強化を促すものであると期待しております。

紛争和解から 平和構築の為に

安田暎胤師（仏教）



釈尊は「この世においては、怨みに報いるに怨みを以ってしたならば、ついに怨みの息むことがない。怨みを捨ててこそ息む。これは永遠の真理である」とか、「恐れが生じたから武器を持ったのではない、武器を持ったから恐れが生じたのである」と、あるいは「利益を得ようとする悪心から、策謀して国を動かし、軍陣に身を投じ戦争を起こして征服し合い、もって数知れない人々を殺してはならない」と教えています。キリスト教では「汝の敵を愛せよ」とか「罪人を赦せ」とか「剣を取るも

のは剣で滅びる」と諭しています。しかし歴史を眺めると、人間は飽きることなく戦いを続け、今日もお戦争のニュースが私たちの耳に飛び込んできます。これは人間の持つ生まれ本能的な性なのでしょう。

私の所属する寺は、千三百年以上の歴史がありますが、かつては寺を護る僧兵が多くいました。そのため武士や他の寺の僧兵を相手に争い、堂塔は破壊されました。そうした例は奈良の大寺では東大寺や興福寺も同様です。しかし法隆寺や唐招提寺には僧兵はいませんでした。そうした寺はほとんど外部からの攻撃は受けずに今日に残っています。従って単純には決められないものの、武力を持たなかったことが戦火から免れた一因ではないかと思っています。

一般的に人間は最も自分を愛し、自分の幸せを願っています。次に自分の配偶者や家族を愛し、その幸せを願います。そして自分の親類縁者、自分の友、自分の住む地域や国と広がってきますが、そこには必ず「自分の」という自己中心的の心があります。直面した問題が自分にとって都合の良い事か悪いことかを判断基準とし、自分が有利になれば満足して喜び、不利になれば不満を感じて憤ります。

そうした自己中心の心理はスポーツ競技を見れば明らかです。選手や応援者はこちらの勝利のみを祈り相手の勝利や幸せを祈りません。勝者の喜びの陰には敗者の悲しみ悔しさがあるにもかかわらず、相手への配慮をする余裕はありません。敗者は悔しく次の機会に相手を倒そうとする闘争心を燃やします。

勝敗を競うスポーツは相手のミス喜び拍手します。人のミスを喜ぶのは美しい心でしょうか。神や仏ならばどちらのミスも喜び拍手を送ることはないでしょう。いかに人間は自己中心であるかということが分かります。スポーツと紛争とは同一視出来ませんが、戦う心理状態は類似しています。そうした心の構造を本能的にもつ人間が、どうすれば紛争和解や平和構築が出来るのでしょうか。

確かに人間には自分中心の心の働きが根強くあり、それが諸悪の根源のように思えます。しかし人間にはもう一つの心の働きが与えられています。それが伝教大師のいわれる「己を忘れて他を利する」心です。家族以外の他人を愛する心を持つているのが人間の特徴です。あるいは理想を求める心、より望ましい人間でありたいとする心、平和を願う心です。今日の「平和の祈りの集い」は正しくその心の結晶です。利他の実践で信仰熱心な人の中には、自分の命を捧げて人を救う事例もあります。この「他を愛し思いやる美しい心」をどのように開発し育てていくかが平和構築の要点だと思います。そのためには少しでも多く利他活動の実践を積み重ねることです。利他活動を繰り返しているうちに人の喜びが自分の喜びとなり、徐々に自己への強い執着が薄らいでいくと思われれます。

日本は苦い戦争体験を教訓として、戦後六十二年間、他国に向けて戦争せず平和外交に徹してきました。国際的に多くの日本人のNGOなどによる支援活動は評価され、日本の平和国家としての信頼度は高くなったように思います。国内においても、

地震などの災害には直ちに多くのボランティアが駆けつけ救援活動をしています。こうした活動は利他の心がなければ出来ないことです。人間は自己愛を持ちながら、弱者を救済する愛の心を立派に備えています。この自己への愛と他への愛のバランスが問題なのです。百分の愛が捧げられなくても平等に分かち合うことから始めれば良いのではないか。そこからは差別による紛争はおきません。

紛争を起こすのも、平和を構築するのも人の心から生まれます。紛争の原因には貧困・差別・弾圧・報復・領土や資源の奪い合いなどがありますが、その底には自己中心的な欲望が強過ぎて、他への愛の配分の少ないところから起きるのではないかと考えます。

仏教では、現在は過去の結果であり、同時に未来の原因を作っているとみます。したがって現在の紛争も過去から引きずってきた結果です。紛争を未来に継続させないためには、現在の紛争を断ち切る努力をしなければなりません。

一九八九年のメルボルンで開かれたWCRPの第五回世界大会のテーマは「平和は信頼の形成から」でありました。私も紛争和解と平和構築には絶対に信頼醸成が不可欠だと思います。そのために、してはならないことと、積極的にすべきことがあります。

してはならないこと

一、武力・暴力・殺人

二、核武装

三、自己主張の押し付け
四、あらゆる差別・人権無視
五、不道徳な言動と行為
積極的にすべきこと

一、弱者への思いやりと無償の愛

二、核武装の排除

三、互いの違いの認識と理解

四、他を先にし自分を後にする。極端な場合は自己犠牲に

も繋がる。

五、心から相手の幸福を祈り願う

一九九四年にイタリアで行われたWCRPの第六回世界大会で、戦火の中で悲惨な生活をしていた、旧ユーゴスラビアの女性代表のリリアーナ・マコヴィッチ・ウラシッチ女史が、「あなたの敵を愛せよ」という詩を朗読されました。その中で彼女は、「私たちはこちら、彼らはあちら、友達はこちら、敵は向こう側というように、世界を分けるなら、あなたには信仰がない。自分の友達だけを愛している限り、あなたには信仰がない。そんなあなたでは世界は変わらない」と強く「敵をも祈り愛せよ」と訴えました。

あるいはスリランカ仏教会長老のアルボムツレ・スマナサーラ師の「慈悲の瞑想」では「私が幸せでありますように」という祈りから始め、さらに「私の愛する人々が幸せでありますように、生きとし生けるものが幸せでありますように、私の嫌い

な人々でも幸せでありますように、私を嫌っている人々も幸せでありますように」と祈っています。

これらの共通するところは、自分への執着心を戒め、博愛や慈悲の精神を持ち、自他の対立を超越するところです。平和構築はこうした宗教的な信仰によって実践されなければ訪れないと思います。世界の平和は理想です、その理想に向けて努力できるのが人間の美しい姿です。理想を失えば人間は墮落します。こうした平和を祈る心の灯火を続け、消してはなりません。祈りの心は見えませんが尊い不思議な力があることを信じます。宗教者の強い祈りが大きなエネルギーとなって世界を平和に導かねばなりません。

私はまだ信仰篤い宗教者の境地に至ってはいませんが、祈ることの尊さや大事さをこうした大会に参加することにより学びました。本日の発表文を考えているうちに、「平和の祈り」について散文詩が浮かんできました。宗教者としての反省を込めながら、拙い文ですが紹介して発表を終えます。

平和の祈り

私には敵を愛することも

私の嫌いな人の幸せを祈ることも

容易なことではない

しかしたとえ嫌いであっても

他人の幸せを強く祈り続けるうちに

自分の心も幸せ色に染まっていくような気がする
幸せを祈る心は見えないが

言葉や行動となって顕われる

それまで私は幸せの祈りを続けたい

他人の幸せを祈る心は自分を変える

自分が変われば他を見る世界も変わる

他を見る世界が変われば

自分の言葉や行動も変わる

平和を祈る心は誰もが持っている

平和を祈り続ける力は尊く偉大である

平和を祈る人の偉大な力の輪が世界中に広がれば

世界は必ず平和になる

それまで私は平和の祈りを続けたい

山田 皆さまのお陰により、シンポジウムを終えることができました。

三十年前、世界宗教者平和会議、世界連邦において、たくさんの宗教の方と出会い、このような協力を続けました。その時には、どうしてこんなにたくさんの違った宗教があるのだ

ろうかと思っていました。今は違います。信頼関係の大切さ、人と人、顔と顔、毎月会って話し合っという積み重ねで、考えが変わりました。こんなにかくさんの宗教があるということは何と素晴らしいことか。神様、仏様の大きな栄光になる。それぞれに進行に基づいて毎日を誠実にやっている。これは素晴らしいと思います。

エディジョ共同体のジョバンニヨリさんが、日本の平和憲法九条の大切さについておっしゃった。その通りです。世界に対してのモデルです。今危険な状態です。これは大事にしたいと思います。有り難うございました。

黒住 示唆に富んだお話を頂きました「諸宗教間の対話と協力——紛争和解から平和構築のために」について、平和構築について一歩踏み込んだ大切なお話の数々を頂きました。私も宗教者、信仰者として折りと具体的な行動につとめることの大切さをあらためて学ばせていただきました。皆さまどうも有り難うございました。

世界宗教者
平和の祈りの集い

F

O

U

M

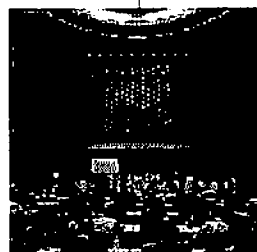
フォーラム2

テーマ 自然との和解と共生
8月4日(土) 9時30分～11時30分
国立京都国際会館

自然との和解と共生

宗教者は地球環境保全のために何ができるか

(文中敬称略)



◎進行役Ⅱ 稲 貴夫師

◎コーディネーターⅡ 藺田 稔師

(神道・秩父神社宮司)

◎パネリスト

釋一誠法師

(仏教・中国仏教協会会長)

サダナンダ師(代説Ⅱギャンディー・全印度僧伽協合理事)

(仏教・全印度僧伽協会管長)

ムハンマド・アブドルファティール・アブドルアジーズ氏

(イスラーム・アズハル大学副学長)

ホミ・ダラー師

(ゾロアスター教・世界ゾロアスター教徒文化財団理事長)

デニス・パンクス師

(民族宗教・A・M運動共同創始者)

ソリチユア・ナババン師

(キリスト教・世界教会協議会共同会長)

スグネンドラ・テータ・スワミジ師

(ヒンドゥー教・スリ・プティジ・マータ修道院大修道院長)

進行役・稲 貴夫 ただ今より「自然

との和解と共生」をテーマとして、

特別フォーラム二を始めてまいります。

本日のコーディネーターは

藺田稔秩父神社宮司様に御願ひ申

し上げます。よろしく御願ひ申し

上げます。

コーディネーター・藺田稔 これから

特別フォーラムを開かせていただ

きます。私自身は神道のメンバー

であります。神道とは別の言い方

では森の宗教です。鎮守の森が

神々の住まいするシンボルです。ま

た稲の宗教とも申しますけれど、日本

での稲作の文化に基づいた宗教文化でもあります。それだけに

山の自然と、恵まれた水に対する感覚と、気候にはとりわけ敏

感です。また日本仏教も、同じように自然に対する親密な考え

方をもっています。

昨日からの話の中で、世界に蔓延する暴力の問題、これをい



かに宗教者の立場から平和に導くかということが大きく取り上げられておりますが、現代人の物質文明に基づく暴力は、決して人間対人間の暴力ではない。自然に対する暴力、これが二十世紀から今世紀にかけて最も目立ってきた人間の業であります。その意味で環境を破壊するという現代の大きな問題、これは世界平和にとって人対人に勝るとも劣らない喫緊の問題であります。比叡山宗教サミット二十周年を迎えて特に環境に対する宗教者の働きを論ずることは極めて大きい意義があると存じます。本日は海外から七人の方をお迎えして、それぞれのお考え、活動をお話ししていただければありがたいと存じます。

最初に中国仏教会を代表して、釋老師から御願いを申し上げます。

地球環境を保護し、 和解と共生に尽力する

釋一誠法師（仏教）



尊敬する各国の宗教界の友人たち

今回、「世界宗教者の平和の祈りの集い」にお招きいただき、また、皆様の前で講演させていただけるのは大変うれしく、光栄に存じます。

高く聳え立っている比叡山、溢れて漂っている和平への願い、人類と自然と共に、和解しながら共生しています。各国の宗教界の友人たちが素直で真摯なる気持ちをもって、日本に集まり、「比叡山宗教サミット二十周年」を記念しますが、今にたつて昔を思い、まことに喜んで感無量でございます。

二十年前、「比叡山宗教サミット」で、中国仏教協会元会長の故趙樸初居士がお招きを受けて大会に出席され、大多数の中国仏教徒を代表して、情熱溢れた講演をされ、比叡山宗教サミットの創立に対して、お祝いの言葉を述べられ、会議の主催者に対しても友好な隣国の人々からのよい祝福を伝えられました。

今日、我々は再びここに集まり、「自然との和解と共生」というテーマを探索し、「宗教家が地球環境を保護するために何ができるのか」という問題を考え、我々は自分の背負っている責任の重大さを深く感じています。そして、我々は会議の主催者が社会や未来に対する責任感、使命感を持っていることから深く感銘を受けています。我々は会議の成功をお祈り申しあげ、会議のメイン・テーマに対して十分に賛同し、主催者の責任感と使命感に対して心より敬意を表したいと思ひます。

世界の仏教大家族の一員として、中国仏教もずっと「人間と自然との関係を如何に正しく築くべきか」を研究と討論の重要な課題としてきました。長年にわたり、中国各地の仏教団体や寺院は、何回も質の高いシンポジウムを行い、多くの価値のある構想が提出されました。今日、我々は同じような期待をもつ

て、今回の特別論壇がよりすばらしい成果があげられることを希望しています。

この機会を利用して、私は唐突ながら、今回の会議のテーマに関連する自分の考えを申しあげ、皆様の討論に何か資することとできれば、大変うれしく思う次第であります。

私の講演のタイトルは「地球環境を保護し、和解と共生に尽力する」というものです。

人類にはただ一つの地球しかありません。地球は偉大な人類文明を育み、また、地球は人類の共有するふるさとです。前世紀から、人類の科学技術の発展や経済規模の拡大につれて、人類が生存を頼る地球では大きな変化が発生してきました。関連資料によりますと、現在、地球の人口は毎年九千万のスピードで増加し、世界人口はまもなく六十億のラインを突破することになります。地球のほぼ三十%の土地は人類の活動によって退化し、毎年流失した土壌は約二百四十億トンになります。全世界においては毎年海洋に流れ込んだ石油は千万トン、重金属は何百万トンに達し、そのほか、数え切れないほどの生活ごみも増やしています。水の中のいろいろな病気につながる細菌や汚染物は毎年約二千五百万人の死亡をもたらしました。毎年地球の大気に排出された二酸化炭素は約二百三十万トンもあり、それと同時に空気の中に漂う顆粒状の物質、二酸化硫黄、一酸化炭素、硫化水素などの汚染物も大量に増加してきました。全世界の森林の面積は毎年約千七百ヘクタールのスピードで失わ

れ、平均的に毎日百四十種類の生物が消滅していくのです。

それらの事実人類に対してこのような警告を発しています。「人類は地球環境を破壊すると同時に、自分自身をも破壊させていますが、地球を救うというのは人類の未来を救うことにつながる」ということです。そのため、新世紀の最初の「地球日」に、関連組織は全世界に対して、次のような忠告を発しています。「二十一世紀は成長を必要としますが、しかし、それは無害の成長でなければならず、二十一世紀は発展を必要としますが、しかし、それは協調的に持続的に発展していかなければなりません」ということです。我々は子孫のため、未来のため、地球はただ一つしかないことを決して忘れてはなりません。「地球を保護し、我がふるさとを愛す」というのは全人類の共通の務めであります。我がふるさとを愛し、今から始めましょう。

人類にはただ一つの地球しかありませんが、しかし、地球はただ人類だけに所属する物ではありません。地球上の生命システムのバランスを維持し、各種生命形態の存在を保護するのは、地球の利益と尊厳にかかわり、また人類が遵守しなければならぬ自然法則でもあります。自然を保護し、地球を愛するのは、人類社会の共同責任と使命であり、仏教徒にとってもそれは避けられない責務であります。

仏教の博大な、深甚なる教理・教義を総合的に見れば、我々はその中から、自然を愛惜し、地球を保護するという方面においての素晴らしい発想を発見するのは難しいことではありません

ん。それらの思想観点はわれわれに対し、以下のように大いに発揚し、また遂行していくべき模範としての「四観」を示してくれました。

一「依正不二」を核心とする宇宙観

「十方三世」の広い時空間に基づいて、仏教は「依正不二」という宇宙観を提唱し、人類と自然とは、互いに対立しないものだけでなく、かえって互いに依存するものだとして明確に主張します。

「依報」とは生命依存の環境であり、「正報」とは生命主体そのものであります。生命主体と生存環境は、客観世界の現象の中、二つの違う対象として認識することができですが、しかし、その本質から言えば、両方は互いに分割できない一つの全体であります。もし主体と環境との関係に対立するものと見なして考えるならば、両方の本質と真髄を理解することはできません。まして、環境そのものも変わらないものではありません。同じ自然、同じ土地といえども、その中で生存する生命主体がそれぞれ違いますので、環境そのものの存在の意義も違ってくるはずであります。

この意味で言えば、生命主体とその生存する環境とは「一体不二」という関係であります。仏法は生命と環境との渾然たる一体の関係を絶えず探究し、ついに宇宙で運動している生命力の中で、生命の原動力——「縁起無我」という法則を発見してきました。

二「衆生平等」を原則とする仏性観

仏教においては植物をも含めるすべての生物は「衆生平等」だという理念の中に取り入れられ、仏性の平等は肯定されています。仏教は人間の崇高さ、偉大さを尊重し、人類がほかの生物にないすばらしい能力を具えていることを承認しますが、それと同時に、人類以外のすべての生物でも、人類と同じように「成仏作主」という「真如仏性」を具えていると主張します。

「縁起」理論を基にして、仏教においては、人間は生物界に対して関心のない圧迫者にならず、生物界の善良的保護者になり、すべての生物に対して仁慈を施し、それらを愛惜し、保護すべきだと考えられています。仏教の「衆生平等」という理念は、もし世界生態バランスを維持するという実践の中でも受け入れられましたら、必ず長く、深い影響力を持つに違いありません。

三「因果応報」を基礎とする善悪観

客観的法則に対する実践的体験と全面的了解に基づいて、仏教は、普遍的関連という方法で、宇宙の万事万物の間にある因果関係に対して緻密に、注意深く、正確に分析していました。「因果応報」の発生を自分自身に起因すると帰結させ、内面的思い（心念）とそれに基づく善悪行為に帰結させます。人間の主観的主体性、積極性を発揚すべきだと主張し、責任の避けなく「直下承当」すべき主人公の意識をもつことと提唱します。

仏教は、個人的内心の修練と浄化に傾けることに反対しませんが、しかし、より大きく「社会に立脚し、大衆に服務する」という奉仕精神をも提唱し、励ましています。というのは、ただ個人の利益だけに目を奪われますと、永久の幸せを獲得できないばかりでなく、かえって逆の結果をもたらすからであります。したがって、仏教は大乗菩薩の心行規範を樹立し、十善を実行することから慈悲を心持するに至るまで、「入世度生」をもって仏教徒の最高の理想と社会責任としてきました。

四「共生共栄」を重心とする慈悲観

人類は、古代人にしても現代人にしても、みんな大自然の子孫であります。大自然の主宰者ではありません。人類はもし環境に対する優勢を保持したいと思えば、自分自身の行為が自然法則に合致するようにしなければなりません。

人類が自然を征服する意図は、通常ただ自分自身が頼っている自然環境を破壊するしかありません。一旦環境が悪化しますと、人類文明もそれに伴って衰弱していくはずであります。あらゆる文明社会の存在する基礎には、持続的「生命支持システム」が働いているからであります。仏教のお経には次のような指摘があります。「一切法にはもし慈悲がなければ、みんな魔法となりますが、一切法にはもし慈悲があれば、みんな魔法となります」と。慈悲は仏法の根本であります。平等・慈悲さえあれば、人類の共生共栄の永久和平は可能になります。

「四摂法」をもって慈悲を施行し、慈悲を実践し、そして慈

悲の目で平等的にすべての衆生に見つめ、慈悲の言葉で、慈悲の顔で、慈悲の音声で有情を導いて、慈悲の精神を人間の内心の奥深いところまで入らせ、社会や国家の体質にも注入し、われわれは地道に人類和解の確実な基礎を築かなければなりません。

仏教思想における生態バランスを維持し、地球環境を保護するという意義は、ますます社会の有識者により提唱され、発揚されてきました。仏教は人類解脱の精神的境界を重視し、人間生活の欠陥を見つめることから着手し、現実の混沌を見透かし、内心の動きの筋道を探究して、最終的に世界の「真如妙理」を悟り、衆生を救い、社会を改善し、人生を円満にさせます。人類の内心の奥深いところまで「愛」の種を蒔ければ、すばらしい結果をもたらすことができます。

「我々は空をまじめに了解すればこそ、大地に根付けることができます。我々は地球をまじめに了解すればこそ、生命を地球に根付けることができます。我々は生命をまじめに了解すればこそ、生命に根付けることができます」。

同じ原理で言えば、我々は生命を了解すればこそ、愛する心を養成することができ、愛する心を持てばこそ、生命を愛することができ、あらゆる生命を傷付け、侵害することができなくなります。もし我々が自分自身を含めるすべての生命個体に対して、平等的に愛し恋していくことができれば、無縁大慈、同体大悲、世界はさらに良くなり、美しくなるはずです。

新しい世紀の曙光の中で、我々は愚かさ、迷いを打破し、私心、卑劣な品性を取り除き、平等、博愛を求めて、深遠なる知恵、高尚なる人格、文明的生活をもち、美しい生命のネットワークを創立し、また良く維持して、一人一人の生霊が愛の世界、明るく、美しい春の光の中で生存するよう、目指しましょう。

最後に、改めて今回の記念活動や特別論壇の円満なる成功を収めるようお祈り申しあげます。

ご静聴ありがとうございます。

環境と世界平和 —— 社会の役割

サダナンド師(仏教)

(代読：ギャンディー師)



名誉議長、来賓、ご来場の皆様。仏陀の名において。

環境保護や世界の平和維持など人類全体を悩ませている地球の問題について、私の意見を述べさせていただきます。この分野において過去二十年間貢献しているタイ、カンボジア、中国、スリランカ、韓国、米国など、環境の保護や世界の平和を愛するすべての人々に感謝致します。また、日本宗教代表者会議や

天台宗務庁の御尽力に対し感謝いたします。

私は全印度僧伽協会会長として、このたびの集会に御招待いただきましたことを、主催者に心から感謝致します。

この会議のテーマは「環境保護と世界平和」であります。私はこの課題を論議することで多くの人々に認識を深めてもらいたいと思います。空気、水、大地などの自然環境は、日常生活のあらゆる所で排気ガスや排煙などによって毎日汚染されていることは皆様の周知のところですが、汚染は地球上の緑ばかりでなく人類の生命、小鳥などの動物にも深刻な危機が及んでいます。いくつかの種は激減し絶滅さえしています。当然人間の生命も日々の環境汚染によって脅かされています。新生児さえ汚染された空気を吸わざるを得ないのが現状です。

日本宗教代表者会議と共に、私たちインドもまた環境の保護と世界平和への祈りに向けて、全面的な支援と協力を強化したいと願っています。この会議では聖なる比叡山で祈りが捧げられることになっています。

さて、自然環境とは、森や山河などを歩まれた仏陀の人生における重要な要素であったということを見のがすわけにはまいりません。仏教は自然環境を基本に存在したということを見無視するわけにはいきません。お釈迦様は豊かな自然に囲まれて誕生しました。人間の誕生とは季節と深い関わりがあり、その人の生涯に影響を与えられています。

お釈迦様は子供時代を父親の領土にあったジャムンの木の下で瞑想したものです。人々は彼の態度を見て大変驚きました。

彼は出家してから菩薩として六年間をウルベラ村のジャングルで苦行されました。山中のある木の下を流れる川の岸辺で世界

救済の使命を自覚したのでした。その日は仏陀の人生に関わり、インド文化ではお目出度い満月というバイシャクプルニマ日にあたります。そして、自然の中に町や村が広がっていました。今日では、その木を菩提樹と呼んでいます。または悟りの木と呼ばれています。覚者ブッダはその木に大変魅了されましたので一週間も見つめ続け没頭されました。

自然環境を愛するという点では、世界にこのような人は他にありません。

ある家系の最適な聖職受任式というものがあります。得度式と呼ばれますが、その人は四つの誓いを実践する義務があります。誓の一つは得度の木の下で人生を過ごすことです。マハバツガ（律蔵）とは私の住居名ですが、もし、私が高にも住まいを持つならば、その利益が追加されることになります。ですから、自然環境は仏陀の思想の根幹となります。仏陀は彼の弟子を訓練するために、森に入り、瞑想させ、背骨を直立させて胡座を組ませ呼吸を集中させました。

寺院や仏塔の中にある如来は、山や森に生きている木の芯によって制作されるということは、何か意味深いことと思えます。このような意義で彼以上の環境の保護者はありません。誕生した後最初の呼吸を行い、マール共同体の沙羅双樹の間で最後の息を引き取ったという仏陀に言及することは大変価値のあることであります。お釈迦様にとって環境がいかに大切であった

かは明白です。彼は樹木の下で瞑想し弟子たちに教えを説きました。

今日、拡大し続ける産業文明のために樹木は伐採され森が荒廃しています。この文明は環境破壊に大きな責任を有しております。人間の社会と環境との間に大きな落差が生じております。この拡大する環境的不均衡は社会の安穩と世界平和や繁栄を深刻に脅かしています。このように悩み苦しむ自然が健全な社会を作ることができるでしょうか。環境を守るための努力もされていますが、望ましい結果が出ておりません。今日、最も急ぐべき事は、紛争や争い、憎しみや潔白な人々を殺すことではなく、自然環境を守ることに我々の力をもっと発揮することです。ります。そうすれば、すべての人々に多くの繁栄と幸福が訪れることとなります。

私は、このような見解を主張し環境保護強化のため、皆様と手を取り合って折りたいと思います。それは私たちの社会的責任であり世界の平和と人類の福祉に対する義務であります。

全てが幸福でありますように！

生存環境保護のための 人間と宗教の役割

アブドルアジーズ氏（イスラーム）



イスラームでは、存在全体の真髄を認識しないで自らの本質を知ることはいえないとする。従ってイスラームでは、存在の認識は人の成り立ちの重要な一部なのである。この言葉は何も空疎なものではない。それはイスラームの教えの基本的な考え方に依拠している。ここでこの言葉の思想的な根本を示す、幾つかのイスラーム上の根拠に注意を向けさせていたきたい。

第一は、イスラームにおける人間と存在との関係は、存在は人がその中に生きている物理的な大洋のみではないということである。またそれは滋養、空気や水が溜まっている入れ物のみでもない。存在はそれらよりもっとはるかに深い基礎に拠っているのである。

イスラームにおける人間と存在との関係は、相互の「愛情」の関係である。このような分野に、「相互の愛情」が出てくるとは驚きかもしれない。人と山々、大洋、樹木、空気、水、星、

星座や銀河系などとの間に、どうして繊細な実存的な愛情関係が成り立ち得るのであるのか。人と存在の間のこの崇高な実存的な関係を基礎付ける話を私は述べたいと考えている。

ムスリムとその敵たちとの間の重要な戦闘の一つに、ウフド山の戦いといわれるものがある。その戦いで、ムスリムは多数の愛する同胞、友人を失った。事実、預言者（アッラーの祝福と平安を）の叔父でハムザという人もなくなった。預言者が大変好いており、その死によって預言者は深い悲しみに襲われた。そこで普通ならばこの山は、大変な悲しみと苦痛の思い出となるであろう。その山からは逃げたくなり、嫌悪するであろう。しかし預言者はこの逃避をしないで、この嫌悪感を消去した。そしてその深い悲しみの中で、「この山は我々を愛しており、我々もこの山を愛している」と言われた。

この永久の言葉によって、預言者はこの沈黙する山とムスリムの関係を転換し、他の自然の景観とは異なる互いの愛情と繊細な心の親密さの関係に変化させたのであった。

第二は、イスラームにおいて、人は（注・光から創られた）天使でもなければ星座に属する者でもない形で創造されたと考ええる。つまり人は「土壌」から創られ、「土壌」に返るものである。そして最後の日には、大地から出てくるものなのである。土壌に関してアッラーは言われた。「それからあなた方を創り、そこへあなた方を戻す。そしてまた再度そこからあなた方を出させる」。

従って人は、土壌を存在と実在の旅における友であると考え

るべきで、目的と将来に進む相棒であると見なすべきなのである。

第三は、イスラームではこの大地は食料、水、空気といった、人が必要とするものを入れる容器だけとは見なさないということである。それは実に豊かで稀有な「美的な実験」と考えるのである。人に美と発明の才覚を教えているのだ。そこで人間は、物質的な側面だけで事足れりとする動物ではなく、それは独特な被創造物なのである。それは食料を求める胃袋を持つとともに、同時に真、善、美を求める精神を包含し、創造主であり慈悲深いアッラーに魂は到達するのである。

聖クルアーンはこの存在の実存的な美的な側面に大いに比重を置くのである。アッラーは存在に関して言われた。「何であれ最善のものをアッラーは創られた」。崇高なアッラーはまた、天空に関していわれた。「見るものたちのために、それを飾った」。また植物に関していわれた。「喜びの園に植物を生えさせた」。また動物に関していわれた。「あなた方のために、進む時に美があり、叫ぶ時にも美があるのだ」。そしてムスリムには果実を味わう前に、そのあるがままの美を愛するように命じられた。「その果実が結び、そして成熟するのを観察しなさい」。

ここでイスラームの考え方の別の基礎に移りたい。

イスラームは人の深い本質にこの存在の包括的な認識を植え付けるとすれば、物理的な存在の中には「恒常的な存在の均衡」と呼びうるものを植え付けた。このイスラーム上の均衡の基礎

を形成する重要な事柄に、皆様の注意を向けたい。

第一、聖クルアーンはこの「恒常的な存在の均衡」を偶然の結果とはしていない。それはアッラーの英知ある意思によるものと考えるのである。聖クルアーンには「凡てに完璧なアッラーのなされたもの」という言葉がある。凡ての原子は他に存在するアッラーが創られた凡ての原子と一致し調和する場所にアッラーは置かれたのである。そしてそれらの原子は調和した組織の中で、その同胞の原子と拮抗しながらその場所を占めるのである。何百万の原子は何百万の水の一滴と拮抗しているのである。またさらには空気の何百万の呼気と拮抗しているのである。そしてまたそれは大地の果てから、星座、星々、銀河系の果てまで同様である。

崇高なアッラーは聖クルアーンに言われた。「凡てを創造し、凡てを計られた」、「アッラーの下では凡ては計られている」、「凡て計量されて植え付けられた」。

第二、この「恒常的な存在の均衡」はイスラームでは、人間の必要性と合致しており、その生存に必要なものとも一致していると考ええる。双方が美しいメロディーでもう一方の調子に合わせているのである。アッラーこそが凡てを人間のために創られた。地上にあるすべてのものである。従って人間は地球のパートナーであり、生存のパートナーなのである。また将来のパートナーでもある。ある民族が飢えて貧困や病気が襲ったならば、人類全体がその飢えと病気の過ちを背負うのである。人類全体がパートナーであり、人の水準向上に団結するのである。

利己主義と自分中心主義、利益優先主義を脱却して、人間性という名前にふさわしい水準に達しなければならないのである。

第三、以上の美しいキャンパスに描かれた二つの基礎―包括的な存在の認識と恒常的な存在の均衡―にもかかわらず、人間はそれらを侵犯することもある。それらに合わせてそれらに従うことをしつこく怠るのである。このキャンパスの美しさをしばしば汚し、そこに見られる畏怖、荘厳さ、美を崩してしまうのである。聖クルアーンはこの人間の侵犯を厳しく戒めている。「人の手が稼いだことのために、陸に海に荒廃がもう現れている。これは、彼らが行ったことの一部を味あわせ彼らを（悪から）戻らせるためである」。

慢心と軽率さが人を襲う。そして人間が自然に勝利したと考えるのである。その様な関係は、「挑戦」である。しかしそれは人間のあさましい間違である。それはあさましい人の過ちであり、人が自然に勝ったり圧倒したりするというのは、虚偽の感覚である。それはあさましい人の過ちであり、科学と研究の進展が自然全体に取って代わり、道徳的な規範に則らないでもこの進展が道を定め、存在の均衡は崩壊するというのも同様である。

もし個人が繊細な花や美しい樹木や清い水源をだめにするならば、それは自然を犯したことになる。また諸国がその環境を汚染し温度規制を遵守しないならばそれも同様である。

地球は人間の軽率さや敵愾心に降伏することはないということに気付くべきであった。崇高なアッラーは、地上のどんな腐

敗や荒廃もその報いを受けるということを定められた。そこで人間の将来は空疎な輪の周りをまわることになる。それは敵対と人間侵犯で始まり、ついで人に対する存在の「反応」が出てくる。そして最後の敗者は人間なのだ。そこでクルアーンの決定的な警告がある。

「正しくなつてからは、決して乱すな」。

ムスリムが水を犯してならず浪費を戒められた預言者の教えについて話すとすれば長くなってしまうだろう。また樹木を不必要に切ったり動物を攻撃し傷つけることを戒められている。

第四、他方でイスラームは、あらゆる存在との付き合い方についても基礎を敷いている。それは愛情と同情を持つてすべしということである。それは地球という我々の星をあらゆる腐敗と侵犯から守るということでもある。それはただ科学者や研究者だけの仕事ではなくて、人類軍全体の責任である。また人はその信条や祖国を愛するがゆえに、その同胞である人間を愛し、その環境を愛し、大地と天空を愛し、陸や海を愛し、そこに生息するものを愛する必要があるのである。

人として公正、真実、自由、人権擁護が大切ならば、同様に自然の諸権利尊重並びに人間の慢心と間違つた野望からそれらを守ることも重要な任務なのである。そして科学技術の進歩が、我々の悪と罪のために傷つき苦しむ美しい地球という星の犠牲の下で行われてはならないのである。

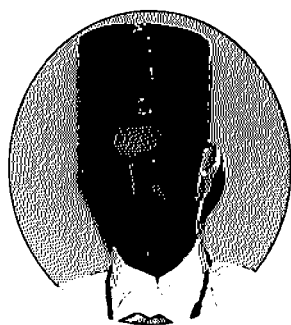
この素晴らしく美しい存在は、アッラーが我々を助けまた

我々を進歩させるために創られたものであり、我々にとっては、法律や文書以上の意味がある。実にそれは我々の愛情と同情、そしてイスラームが教える通り尊敬の念に値するものなのである。

皆様方に平安とアッラーの御慈悲、そして御恵みがありますように。

ゾロアスター教における 環境への展望

ホミ・ダラー師（ゾロアスター教）



今日、科学技術と自然科学の発展に起因して、人口が激増し、ごみの量や核実験の拡大は地球破壊の一因となっています。私たちのゆりかごであり続け、私たちを何千年もの間育んできた環境は、この五十年間の間に急激に汚染されてきました。私たちの、自然の支配者であるという態度が大手を振って自然を退化させてしまったのです。

自然は生きている

この私の発題では、三千五百年の歴史を持つゾロアスター教が提案する価値ある洞察について、簡単に述べたいと思います。ゾロアスター教徒にとっては、表面上は不活発な世界が活気に満ち溢れています。その世界はフラヴァシ（ゾロアスター教の守護天使）によって神聖化された「超越神の本質」なのです。全ての生き物は、植物と同様にフラヴァシを持っています。自然は本来備わっている価値だけでなく、神聖なものだと受け取られているのです。生物圏においては、全ての形の生命は生き、成長する権利があります。我々の自然への懸念は、植物や草木に限ったことではなく、全ての生き物に対してです。アフリン（特殊な祈り）の祈りの中の一つで、ゾロアスター教徒はこう暗唱します。

「私はアフラ・マズダー（神）が創られた全ての生きとし生けるもののために祈ります」

敬虔なゾロアスター教徒は自然の力に深い崇敬の念を持っています。ゾロアスター教徒と自然の非常に強い結びつきは、環境に対するゾロアスター教哲学の要点である短い祈りによって判断できます。

その祈りは以下の通りであります。

信仰は水である

信仰は木である

信仰は母なる地球である

信仰はアフラ・マズダー（神）である

信仰は預言者ザラシュトラであった

信仰、法（規則）もまたマズダーである

——礼拝者は私である（Yasna 12・7）

最初の祈りがゾロアスター教の子供たちに教えていることは、信仰の告白（Jasa-Me-Avange-Mazda）であり、これが全ての生きとし生けるものへの非暴力（*nidhasnaitshem*）である戒律を強調するのです。これらの価値は、ゾロアスター教の精神に深く根づいています。人間は自然の受託者であり、その信用を犯してはいけません。

それゆえに、本質的には環境に対する精神があり、この精神が相互依存、連結的な倫理的思考を強調するのです。この相互依存はゾロアスター教神学をより特徴づけています。Amesha Spentas もしくは「神聖な不滅のもの」はアフラ・マズダーの六つの特性を象徴しています。後年、これらの「神聖な不滅のもの」はそれぞれの生き物を取り仕切りました。またさらに、これらの生き物はゾロアスター教の儀礼を象徴しており、その深い意味を表しているのです。

また、もう一つのゾロアスター教の基本的な考え方として、調和を意味するハマゾー（*hamazor*）があります。ゾロアスター教の歴史によれば、人類はアフラ・マズダー（神）だけでなく、人間や自然とも調和して生きることが求められています。ある祈りを暗唱する間、ゾロアスター教徒はどんな形であって

も、空気や水を汚していること、植物や動物に害を与えていることの許しを請います。これらは単に聖典に言及されているというだけでなく、古代から実践もされていた。歴史の父であるヘロドトスは、紀元前四世紀に、いかなる形であってもペルシヤ人は水や土を汚染することをしなないと述べています。今日でも、ゾロアスター教は異なった自然の原理をも崇拝し、尊敬の念を抱いています。さらに、イランのゾロアスター教の間では伝統があり、子供の誕生時や結婚のお祝いにも苗木の植林をしています。

生態系——取り組むべき課題として

この問題に対するもう一つの重要な解決策は、取り組むべき課題として環境（生態系）を取り入れることです。ここにタタの家とこの家の地域への貢献の例を示したいと思います。

インド最大の複合企業の例ですが、百年前、ゾロアスター教徒の Jansjee タタという人がこのインド産業の財団を立ち上げました。彼は若い頃、早くに聖職者への道に進まされ、宗教伝統からその価値を受け入れました。そしてその後、彼は Jansheepur（彼にちなんで名付けられた）において製鉄所の計画を立て、環境問題に対して大変な注意を払っていました。今日、タタ工業帝国のすべての会社は、環境に配慮した開発の方針を持っています。

この方針に基づいた事業のいくつかは、大規模な植林があります。これは生徒と教師を対象にした開発教育プログラム（E

EP)で、いくつかの庭園を設置し、土や水の保全、節水のための植物の再循環、下水処理植物、汚染監視部門をプロモーションしています。

宗教者の声

異なる諸宗教の指導者が環境のために働きかけをしている事に注視することは大変心強い事です。二〇〇六年二月八日にアメリカで福音主義のキリスト教指導者は、ホワイトハウスが反対した排ガス削減のための法律制定を支援しました。この事が地球温暖化を阻止するために諸宗教保守派の支援を集めるキャンペーンにつながりました。

何百人もの支持者をもつ二人の環境擁護の伝道者がいます。その伝道者の名はリチャード・シジック師とジム・ボール師です。インドでも同様に、都市部の人々の間では祭典の期間中、川や海を汚染すべきではないという認識が高まっております。したがって、そのあらわれとして、偉大なヒンズー教の神々やガネッシュ卿が水に浸る時に、水が汚染されないように化学物質の使用をさけることになりました。

その上、様々な宗教の敬虔な信者達は信仰心の象徴として川や海に花束を投げ入れないよう促しました。私たちの宗教には環境保護のための有益な洞察力を与える源を持っています。もう一度、生態系のバランスをもたらすために、信徒を導いていくことが諸宗教指導者の義務です。これは次世代に貴重な遺産の相続を可能にします。

地球に生かされる

デニス・バンクス師(民族宗教)



この度、日本で行われる、比叡山宗教サミットの記念すべき二十周年の集いにおいて、発言できることを大変名誉に思っております。

私が幼少の折に最初に学んだことの一つは「母なる地球を敬うこと」でした。幼かったため、この言葉の深い意味を完全には理解していませんでした。しかし成長するにつれ、その意味はすなわち、「私たちのまわりのものすべてと常に調和して生きる」ということだと学び、理解していきました。

我々の信仰に基づいた精神的導きと共に成長するにつれ、私にとってこの言葉は、私の人生と生き方において最も重要な方向づけとなりました。現在、地球温暖化は世界の環境の深刻な気候の変化をもたらしており、これが今現代の、そして未来において最大の関心事でしょう。

我々のように、土地に根付いて生きる人々は、自分自身を母なる地球の管理人という役割を担っていると意識しています。しかし、この役割は、世界の商業と経済の産業発展によって妨

げられています。

この、我々が目にしている現状が、我々の問題そのものなのです。

海は、有毒な化学物質や放射能を帯びた産業廃棄物の処理場として扱われています。クジラや鮫、鮭やほかの海の生き物は我々を許してくれるでしょうか？

酸性雨は、薬となる根や薬草、その他我々の儀式でつかう植物が育つ森を破壊しています。赤スギは我々を許してくれるでしょうか？ 若木は世界を知らずに枯れるのでしょうか？ 新鮮な草は育たず、我々の儀式で使うロッジを浄めるためのセージは、その精神的な目的のために使われることはないのでしょうか？

これらの問いかけは我々に警告しています。そして、これらの答えは我々を不安にします。

我々が辿ってきた精神的な道のりは、正しい選択でした。それは千年ものいにしえの智慧に満ちたもののなのです。

我々は、川や海、植物や薬草が教えてくれている、生命の偉大な意味を理解しなければなりません。そしてまた、イーグルやバッファロー、熊や森の動物達の声に耳を傾けなければなりません。

我々はいにしえの儀式を通して、精神的な導きを求めています。儀式は、我々が、まわりを囲んでいるすべてのものと調和して生きるための知識と力を授けてくれるでしょう。たとえば、薬効成分のある植物が、我々を健やかに保ってくれる根や薬草

を捧げてくれることを知るように。

我々は、母なる地球の生み出す自然な食べ物に生かされています。今となつては、自然ではない状態のものは危ういと言うことが分かっています。また、自然な方法をおろそかにし、認識不足な日々を続けるということは、我々に害を及ぼすでしょう。

私は、地球への深い理解と共に歩んできました。また、ほかの土着民族の人々と知識を分かち合い、互いに地球の未来に関心をもっています。共に「母であるこの地球」を愛し、同じ夢を持っているからです。

一九八〇年代、私がカリフォルニアで教鞭をとっていた時、ネイティブの生徒が、「ネイティブの価値観が、現代の世界の教養や商業と矛盾する場合、どうすべきか」と質問しました。私は彼に、以下のように答えました。今日、ここにそれを伝えたいと思います。

「イーグルは、イーグルであることにずっと変わらない。何十年、何千年という時が経ようと、それでもなお、はるか昔に去った先祖に続く道を辿っていく。それは我々にも通じることだ。未来の世代へと、同じ歌、祈りと言い伝え、そして、この精神を捧げようとすることは、我々に力を与えるだろう。そして、我々は、決して祖先の教えを忘れてはならない。我々はこの土地の民であり、永遠に、この道に留まらなければならないのだ」。

地球環境を保全するための 信仰者の役割

ソリチュア・ナバン師
(キリスト教)



御来賓や宗教指導者の諸先生方。

まず、皆様方に心から御挨拶を申し上げます。また、「日本宗教代表者会議」の皆様方より、比叡山宗教サミット二十周年記念「世界宗教者平和の祈りの集い」に御招待をいただき、「自然との和解と共生—宗教者は地球環境保全のために何ができるか」と題するフォーラムにおきまして、私の意見を発表する機会を与えられたことを心より感謝申し上げます。

はじめに

環境の危機とは、心の面から見れば精神的危機とも言えます。この事は多くのキリスト教の指導者たちによって指摘されています。ですから、信仰者はこの地球環境保全のために重要な役割を持つものと信じております。

そこで、この問題を二つに分けてみたいと思います。

最初に、「環境の危機」は本質的に「精神的な危機」だということを考えてみましょう。これは一体何を意味するのでしょ

うか。

そして、二番目には、地球上の生命の未来を約束することは、異なる宗教の人々をより緊密にさせるばかりではなく、その事を要求しているということです。

環境危機——精神的危機

近年、環境への危機意識は非常に高まっています。以前は北半球の豊かな人々にとって単なる贅沢な課題に過ぎませんでした。実際に、多くの環境NGOによって、この問題が表面化されましたが、ほとんどこのような印象を是正することができませんでした。彼らは、多くの南半球の国々から資源を奪い取り貧困を増大させましたが、人々の日々の生活の困窮には全く感心がありませんでした。

今日、状況が一変したことは有り難いことだと思えます。いまや地球温暖化を取ってみましても、これが単なる環境問題ではないということは明白です。人々の生活水準を維持するための懸念は、不当な世界経済秩序と政治関係の不正を批評なくしては意味がありません。過大な消費やエネルギーを過剰使用する豊かな社会のライフスタイルは温室効果ガスの排出を増大させ深刻な問題を引き起こしました。しかし、世界総人口の半分以上からなる貧しい人々は、この温室効果ガスの問題に対して殆ど貢献することはありませんでした。彼らこそ、洪水、旱魃、暴風雨——地球温暖化や気候変動の結果と見なされている災害——の脅威にもっとも晒されているのです。

さらには大火災の場合ですが、近年、私の母国のインドネシアで一九九七年、カリマンタンとスマトラの両地域でこれが発生しました。隣国からも深刻な煙害への不満が高まり、「不可抗力（神の未業）」として炎から発生する毒性の「煙り」に関して、スハルト前大統領が公式に謝罪を行いました。

しかし、巨額の利益を探し求めている不法な伐採業者や巨木材木商、悪質な企業、そしてエルニーニョ現象によって地球の温暖化が増幅されています。この問題では、社会の経済と環境の要因が重なりあっているのです。

明白なことは、南と北の国々の間で、社会の中で偉大なる正義を確立することが、この問題に対する持続可能な解決の条件だということです。実際のところ基本的疑問とは、この小さな地球という惑星で私たちが互いに生活をどうやって分かちあうか、ということです。どのようにして資源や人間による生産物を分かちあうのか、私たちは自身に対して問う必要があります。実際に、それは個人、民族、国家などではなく、一つの人類家族として私たちに与えられた、すべての次元における豊かで貴重な贈り物としてであります。

極度の空腹や貧困に直面したとき、キリスト教の聖書に述べられているように、今世紀の偉大なキリスト教神学者の一人は次のように言いました。

「私自身のパンとは一つの物質的課題でありますが、他人のためのパンとは一つの霊的課題であります」。主の祈りとは、キリスト教徒が共有するもっとも基本的な祈りでありませんが、

「主よ、私に今日のパンを与えてください」ではなくて「主よ、私たちに今日のパンを与えてください」とあり、この祈りは偶然ではありません。私だけの生存を心配するのではなく、私たち全人類の生存を祈るようにと示されています。どのようにして私たちは自分たちの必要性を他人とのものと関係づけるのか、それはすべて私たちが互いに有する関係、生命の全体的な繋がり（網）の質に依拠しているのであります。

私自身の人々の生活を形作るインドネシアのバタクニーズ伝統では、物質的にも霊的にも、現在や未来、個人どうしの関係や全体を形成する創造主との関係など、小宇宙や大宇宙との調和を維持するように求められます。キリスト教徒として、神が私たちと存在する他のすべてを創造されたと信じています。神の御業は神の霊によって維持される一つの生命の網であります。私たちはこの網に所属しており、すべての生命はこれにより結ばれています。私たちはお互いをケアするという仕事の責任があるのです。

この事が、私が申し上げる「環境の危機は心における精神的危機」だということでもあります。経済的利益への飽くなき欲望と個人主義が、神への信仰と精神性に基づく全体性への帰属感を破壊しているのであります。

信仰者による共通の約束

同時に、これが、信仰者は生命と環境のために中心的役割持

つという主なる理由であります。私たちは信仰とその生活の違いにもかかわらず、他を一層理解すべきであります。なぜなら、私たちは共に人類に属しており生命の偉大な網の一部であるからです。もし、この網の目の関係に支障があり破壊されたら、私たちすべてが影響を受けるのです。自然は、私たちが育む違いや作り上げた線引きに関わらず、私たち共通の傷つきやすいところ、宇宙の中で分かちあう場所に暴力性を現わします。津波がインドネシアの岸を襲いました。大波はキリスト教徒、イスラーム、ヒンズー教徒、仏教徒、その他などを分別することはありませんでした。

幸運なことに、二十周年というこのサミットの歴史こそが、私たちの違いを乗り越え、相互に一致し共に活動し熟慮することができることを示しています。異なる信仰の人々は平和や正義、自然の保全などのために多くの先駆けとして働いています。ハタミ前イラン大統領は「文明の対話」を推進されましたが、サミエル・ハンチントンによる「文明の衝突」理論の影響に対抗するため、今日では国連の課題となっています。不運なことに、私たちのよき努力は民族と宗教間の緊張の高まりに直面しています。しかし、それは文化や文明の多様性ではなく、それ自身が衝突の原因となっています。衝突は国々、文化、多数派と少数派といった非対照的な力の関係の結果によって煽られています。新しい政治志向とは、最も強く豊かな国々の文化的価値観と政治的、経済的、軍事的コントロールによって提起されています。

世界教会協議会による行動

平和を普及し、正義を拡大し、自然のために闘うこととは、変化をしなくてはならないということです。私たちの声はさらに統一される必要があります。私たちの行動はすべての人々によって平和を分かちあう世界の目的に責任を持つ必要があります。二〇〇六年の世界教会協議会総会はブラジルのポルトアレグレで開催され、世界中の宗教代表者など六千人の人々が集まりました。そして、宗教間の対話と宗教間協力をもっと慎重に強化し拡大することを呼び掛けました。

WCC (World Council of Churches) は、

- ・ 私たちが直接関わる問題についての研究に従事する
- ・ 宗教間協力への新しいアプローチを決定した二〇〇五年の「決定的瞬間」のような画期的な会議を開催する
- ・ 暴力を克服するために所属教会の政策として十年間は、平和と和解のために共通の努力を傾けお互いに学び支援するよう呼び掛ける
- ・ 二〇〇八年にスウェーデンにおいて開催予定の気候変動に関する国際宗教間サミットに向けて、スウェーデンの教会と共に準備を行う
- ・ 気候の変動や水に関する権利その他について、教会や宗派を超えた友人たちの主張を促進する。
- ・ 宗派を超えた水のネットワークの友人たちを通して、多くの

新鮮な水への足場と場所を供給する

私たちは以上のすべてを実施しますが、最も大切なことは私たちの所属教会が、特に今日の世界で最も危機的な暴力の場所である中東やアフリカの角と呼ばれる地域において、宗派を超えた友人たちと一緒に活動することであります。

今日最大の緊急課題に向けて共に考え対処するためのすばらしい機会を与えてくれた主催者に感謝を申し上げ、結論とさせていただきます。また、皆様の御静聴に対しても感謝を申し上げます。

宗教者は地球環境保全のために何ができるか

スグネンドラ・テータ・スワミジ師
(ヒンドゥー教)



世界の全ての宗教と文化は、母なる自然と私たち人間を保護する必要性について共通の信仰を持っています。生き物の幸福とは、すべて河川、森林、山、自然の生息地など母なる大自然がどのような健康状態にあるのかという事に依拠しています。

自然との調和や持続可能な生活とは、母なる自然の中で、私

たち自身をどのように取り扱うかという事から始まります。言い換えれば、母なる自然の神聖さや健全性というものは、自然に対する私達のライフスタイルや哲学に拠っているのであります。

「ベーダ」のような古代の聖典に述べられた思想によれば、「私たちは皆、母なる自然の中では入居者・借家人でありお客様」として書かれています。私たちは母なる自然物を最小限に消費すべきであり、必要とされている事に対しては最大限の貢献をすべきであります。私たちが消費を最小限に止めれば汚染も最小限になります。過剰消費は自然からの搾取であり生態系を不安定へと導きます。消費を最小限に抑える事によって地球環境の神聖さ、崇高さを保つよう人類に働きかけ導くことが人類への奉仕であり自然との調和を成就する最上の手段の一つであります。

今日、人類への奉仕はまさに不十分です。動物、植物、人類などを見つめながら一歩ずつ前進すべきであります。動物たちも私たち人間の仲間であると見なすならば、彼らを殺す事はないでしょう。

古代の『ベディック聖典』には「シャーン・アツ・ドウィパデ・シャンチャトシュパデ」という言葉があります。その意味は、「四足歩行の動物も二足歩行の動物も保護するように」という意味であります。「ベーダ」からのメッセージは多くのヒンドゥー教菜食主義者の基礎となりました。

今日、母国の宗教や国籍に関係なく菜食主義者が増大する傾

向にあります。このような原則を受け入れることになった時、私たちは宗教の障壁を乗り越えなくてはなりません。究極的には、私たちにとって「善か悪か」という二つの選択があるだけなのであります。

平和を成就する為に、最終の目標は闇から光明に、暴力から非暴力に向かうことであります。「パリスラアヤ・サドホーナム・ビナシャヤカ・ダシククリタム」と「バガバッドギータ」に述べられているように、私たちの究極の目的は善なる生き物を守り、悪しき霊を滅ぼすことであります。

地球環境保全の為に、もう一つの重要な視点とは緑の環境を増大することであります。私たちが農村生活から都会のライフスタイルに移る時、日常生活において植物や樹木的重要性を忘れてしまします。私たちはお互いに少なくとも毎年一本の植物を植え、他の誰かに一本の植物を寄付するという習慣を持つべきであります。私たちが植樹した樹木を自分たちの子供のよう

に育て世話をすべきであります。そうすれば、やがて、その樹木が私たちを世話してくれたことになりました。樹木は植樹した人々を守ることにあります（「ビリクシヨ・ラクシャンティ・ラクシッタ」）。私たちの団体「スリ・プティジ・マータ」とは「植林の振興」という意味でもあります。

手短に言いますが、友人である皆様に向かって四つのメッセージを上げたいと思います。

一、この母なる大地では「最小限の消費」によって自然との調和を維持して下さい。

二、助けを必要としている人々に対しては「最大限の支援」を行うことを習慣としこれを行って下さい。

三、「非暴力主義の普及」によって動物を保護して下さい。

四、「緑の革命を進める」ことによって地球環境を保全して下さい。

私たちは、全能者に向かって私たちすべてに強さを与えてくださるように祈ります。この強さとは、この世界をより良き生活環境にする為に、日々の生活で4つの原則を受け入れるという約束であり力であります。

アノ・バドラ・キルタボ・ヤンツ・ビシュワタ

——崇高なる思想が世界中から生まれますように——

蘭田 それぞれの立場からご発言をいただき、意義のあるフォーラムができました。ありがとうございました。

お話にもありました宗教者自身の環境に対する生活態度、自然への扱い、考え方の転換、環境の危機が心の危機であるというところに宗教者が一番大きな責務を感じなくてはなりません。現代における心の荒廃、換言するならば、心の靈性が無視されていることに対して宗教者はスピリチュアルな意味で「いのち」というものを大事にしなくてはなりません。環境とは地

球上の生態系全体のことです。生命が豊かに生きる中で、人間が生かされるという状況が回復されなくてはなりません。

その場合に「いのち」を単なる生物ととらえるのではなくて、心の靈性を持つ靈的なものとしてとらえることが、宗教者として共通の出発点であろうと思います。そのことを信徒や一般の人びとに、身近な宗教者として訴えることができるのではないかと、本日各宗教の素晴らしいお智恵を頂き、更に相互の協力関係に引き上げて、ご参加の皆さまの共通のアクションとして考えて頂ければ、本日の会議が実りあるものとなるでしょう。

稲 本日のフォーラムを通して、それぞれの宗教が環境に対して、また自然に対して深い洞察と教えを持つていることを学びました。それが自然と調和した人びとを導いてきたことも学びました。そのことは日本の伝統宗教である神道や、仏教についても全く同じであります。

しかし、一方で科学文明の発展と、経済至上主義という現代の潮流が自然を破壊し、大きな問題となつてきています。こうした現実に対して、各宗教は、それぞれの教えから導かれる、人間の本当の生き方というものを学びあい、伝えてゆく必要があることを痛感しました。そこから未来を開いていくための大きな力を得ることができると確信をいたしました。本日は皆さまで、ありがとうございました。

世界平和祈り式典プログラム

8月4日(土) 15時～17時 比叡山延暦寺根本中堂前広場

- ・開会挨拶 運営委員長 宮本けいし師
- ・世界平和の鐘贈呈式
- ・世界平和の鐘除幕式
- ・世界平和の鐘鐘打式

世界宗教者
平和の祈りの集い

世界平和祈り式典

- ・世界平和の黙祷
- ・主催者代表挨拶
- ・アッシジメッセージ
- ・平和の祈り
- ・平和な地球の創造
- ・比叡山メッセージ二〇〇七披露
- ・閉会挨拶 常任委員 大塚喜直師

「平和の鐘」贈呈にあたつて

国連事務次長 ジョセフ・バーナー・リード

ご紹介を賜りました国連大使のリードでございます。

この度、二十周年比叡山宗教サミット「世界宗教者平和の祈りの集い」に参加させて頂き、本日聖なる比叡山上に参りましたことは私の喜びであります。価値観と伝統の違いを乗り越え平和と相互理解を求めて祈るという、あらゆる宗教の基本原則にもとづく行動をとってこられた世界の諸宗教の指導者の皆様に深く敬意を表します。

比叡山は、日本の宗教の聖地の一つとして千二百年にわたる歴史をお持ちです。

本日の「平和の祈り」は宗教行事ではありますが、この場を拝借して国連についての情報を分かち合うことをお許し頂きたいと存じます。宗教組織もまた国連のような人道組織も、究極の目標はただ一つ、平和な世界に生きることであり、共通しているからです。

平和維持活動は国連の重要活動として注目を集めますが、実際には国連の八十%の活動は国際的な開発の仕事なのです。国連が開発、人道支援、環境保護で発揮する能力をいかに改善するかは、われわれのすべてにとって重大な関心事です。国連が提供する基本的な人道支援は、何百万人という男女や子供達にとって、今日この瞬間も、また今後の世代にあつても、生死の分かれ目なのです。国連の開発計画の青写真、二〇〇五年に国連の六十周年を祝うためニューヨークに集まった百五十人以上の国家元首を含む世界の指導者により作られ、「ミレニアム開発目標(MDGs)」と呼ばれるガイドラインとなっています。

その他、世界の指導者達は人権を促進する新しい国連機関を作ることを決意し、戦火に引き裂かれた国々に永続する平和を構築しようとしてしました(人権委員会が二〇〇六年に設立されました)。また、あらゆ

るテロと闘い、必要に応じ、大量虐殺その他の憎むべき犯罪から人々を救うための是正措置を取ることが約束されました。さらに国連事務局の重要な改革の決定が行なわれ、国連システムの一貫性に関するハイレベル・パネルが設立されました。世界規模の保健と温暖化のような問題については、さらなる行動をとることができるよう扉が開かれています。

以上の決定は世界の現状を反映しています。加盟国はその結果国連事務局のメンバーに多くの責務を負わせることになりました。

長年にわたる国際的な公務員として、わたくしは次のことを強く申し上げたいと思います。

・国連は、あらゆる国家が集団として協力する唯一の機関であること。

・国連は、開発を前進させる唯一の世界的な組織であること。

・国連は、人権を保護するための唯一の普遍的な機構であること。

・国連は、国際法を強化するための唯一の共通の枠組であること。中東やダルフルの問題は救いがたく見えますが、これらの難問に対処するにあたり忘れてならないのは、国連が、当初どう考えても治療が困難な問題に集団として行動し成功した過去の事例があることです。

・国連は、一例として中央アメリカの平和に大きな貢献をし、十年以上にわたり平和が維持されている。

・国連は、カンボジア、ナミビア、モザンビーク、南アフリカで、その他の実績を上げている。

・今だ成功と判断するのは尚早だが、最近ネパールの状況は良い方向を示し、同様な状況がリベリア、コンゴ民主共和国、ブルンディ、シエラレオネにも当てはまる。

・ダルフルでは、今だ残虐行為が継続している事に議論の余地はないが、つい最近国連平和維持軍を地域に展開する合意がなされた。

以上の全ての成功の鍵は、行動を取ることにについての広範な国際的合意に基づく国連の集団行動です。いかに成功の確率が低くとも、このような集団行動を辛抱強く行なうことで、全世界の数百万人の人々がより安全に暮らせる可能性が生まれるのです。

国連の仕事は以下の領域で致命的に重要です。

- ・子供達を飢餓、病氣、戦争の惨禍から救うこと。
- ・難民に衣食とキャンプを提供すること。
- ・民族紛争地域や内戦地域で人道支援を行なうこと。
- ・自然災害が繰り返して発生する地域でこれを食い止めること。
- ・国際的な犯罪、麻薬、病氣の脅威と闘うこと。
- ・停戦維持、紛争勃発の防止、敵対する当事者間の平和合意、ならびに荒廃した国に平和を構築すること。

これらの国連活動は全世界のあらゆる地域で現在も継続しています。これらの活動を支えるのは当事国と海外からの数千人の国連事務局スタッフの献身的な労働です。

多くの宗教指導者がお集りのおめでたい席で、国連の最近の最重要かつ、宗教と直接かかわりのある、寛容についてのプロジェクトに触れさせて頂きます。

現在の世界の不安と不安定の主な理由の一つが、正義の不在の意識です。自分の尊厳が犯されたとの感情、国際的に合意された原則と価値が自分には適用されないという感情です。

この問題に対処するには政治外交レベルと文化社会レベルの二つのレベルを関連づけて対話を強化するしかありません。文化は、単に共存と和解の手段ではなく、寛容を通じての開発と進歩と繁栄のための道具であると認識することが重要です。

不寛容を取り除くのは部分的には法的保護の問題です。宗教の自由、宗教を理由とする差別からの自由は、長年にわたり国際法の重要概念であり、多くの国家が国内法に取り入れて来しました。

橋を架ける戦略は教育に依存しますが、単に仏教やイスラムやキリスト教について教えるのではなく、すべての宗教、伝統、文化について教えることが必要であり、そのことにより、多くの作り話、偏見、ゆがんだ考えを正しく認識し否定できるのです。

われわれは、若者達に機会を与え、憎悪と過激主義のかわりに信頼できる選択肢を提供しなければなりません。若者が世界秩序を改善する仕事に実際に参加する機会を与え、この世界を破壊しようとする欲求

から解放しなければなりません。

以上の全てにおいて関係性の改善が不可欠です。政府や宗教指導者は単に意識を向上させるのではなく、不寛容と過激主義を非難する先鋒に立たねばなりません。

幸い、文化間の対話は多くの外交政策で採用され、国連の誕生以来重視されてきました。二〇〇一年はこの問題に注力し、「国連文明間の対話年」と名付けられました。

ご参会の皆様。

歴史的にも、現代の社会でも、宗教は人が自己を識別する強力な源として機能します。この文脈で、諸宗教間の対話はグローバルな自己識別（アイデンティティ）と市民意識を開発する主要な鍵です。真の対話は、お互いを平等と見る当事者間でのみ成立します。

このような対話の空間を育てることが必要です。宗教と文化の指導者は、メンバーが「他者」に対しより高い尊敬を持つて関係を持つよう指導し動機付けるべきです。

宗教は繰り返し政治目的により操作されてきました。われわれは宗教の乱用を止め、国家と人民の間の平和と理解に重大な脅威となる過激なイデオロギーを拒否しなければなりません。紛争と緊張が生じるのは宗教自体のゆえではなく、信者が原因です。自らの宗教伝統の中心的な価値をより忠実に守るよう改善することが必要です。

世界人権宣言の採択は、諸宗教間対話と文明間対話が大きな困難を克服し、平和を構築することに貢献するという文脈で重要です。

われわれは自らに問うべきです…宗教の名において、いかに戦争が遂行され、不正が正当化され、「他者」が除外物にされたかを。宗教が乱用されるのは愚かな、残念なことです。このような状況は変革せねばなりません。なぜなら、すべての宗教は宗教の本質として愛と寛容のメッセージを共有しているからです。

今こそ、われわれは手を取り合って人間存在と人間性の共通の意味を究明するべき時です。それが平和の前提条件です。それがすべての国家と市民の責任です。非政府組織、市民社会、マスコミも同じ責任を負っています。

すべての文化に対しつり合いの取れる見方をし、固定観念、先入観を否定し、寛容の精神を促進するの

は重大な責務です。これが達成されて初めて、すべての人の間に平和を促進できるのです。

われわれは情報革命のさなかにあり、コンピュータにより得られる知識の豊かさは測り知れません。教育の履修内容において、われわれは、他者と向き合う前にわれわれ自身と向き合うための批判的思考と創造的思考を助長しなければなりません。われわれが先ず自らの内に見つけることができなければ、どうして他者の美を、類似性と相違性を発見できるでしょうか。内省と自己批判の手法は真の対話の土台なのです。

最近開催された「文明と平和の試練——障害と機会」と題した国連総会で、加盟国は以下の提言を行ないました。

・宗教コミュニティは、過激主義に対処するため、ローカルなレベルで橋を架けるよう勇気づけられるべきだ。

・国連その他主要な国際組織の協賛のもとで、宗教運動および学者と定期的に討論を行ない、歴史、文化、倫理、宗教の分野での深い知識と批判的な視野を提供できる参加者により、問題に直面している社会の意志決定の過程が、より良い情報を用いることを可能にする。

・指導者、教育者は自らの伝統の中から敬意と寛容を促進する資源を発見するべきだ。

・情報技術（IT）のツールは、特に若者の間で対話と理解を促進するため、より効果的な利用が求められる。

ご臨席の指導者の皆様、ご参集の皆様。

われわれの世界の不安定要因の主たるものは、貧困、病氣、政府間・非政府当事者間の武力紛争、文明・文化・宗教相互の不寛容と衝突です。これらの課題に対処するには、まずこれらが存在することを認めることが必要です。その上で世界の平和と安全を達成するために最も効果的な手段につき合意できます。

平和な世界という共通目的を達成するため、われわれ全てが、世界の市民のすべてが、多くのことをしなければなりません。本日われわれがここに参集している瞬間にも、数百万人が苦しんでおります。苦しむもの、不運なもの、なにかんずくもとも傷付きやすい子供達のために、ひと時の祈りを捧げようではあ

りませんか。

われわれの祈りは「平和の鐘」の音と共に捧げられます。同じ「平和の鐘」がニューヨークの国連本部の構内に置かれています。

毎年、国連総会が開催される前夜に、国連事務総長が平和を祈願してこの鐘を鳴らすのです。本日は「平和の鐘」の音と共に、すべての人が平和のために結束し、平和な世界に共存できますよう、皆様と一緒に祈りたく存じます。

ありがとうございます。

主催者代表挨拶

日本宗教代表者会議名誉議長・天台座主 半田 孝淳

一九八七年に初回が開催されました比叡山宗教サミット「世界宗教者平和の祈りの集い」も回を重ねて本年、二十周年を迎えました。世界各地からご参加いただきました宗教代表の皆様ようこそおいで下さいました。心より歓迎を申し上げます。また、日本の国内からここ比叡山にお集まりの各宗教教派の皆様、皆様のご熱意で今日がありますことに、この集いの主催であります「日本宗教代表者会議」の名誉議長としてまた比叡山山主として心より御礼申し上げます。

人類普遍の願望である「平和」と「安らぎ」は、前の世紀における再三の悲惨な経験にもかかわらず未だ達成されません。その原因は様々であります。多くは相互不信と富の偏在によるのではないのでしょうか。

これを解決するために必要な行動はまず「対話を通じての相互理解」であります。私たち宗教者は二十年前、このことを自身の問題として取り上げ、一九八六年には、当時のヨハネ・パウロⅡ世教皇陛下の呼びかけによりイタリア国のアッシジにおいて世界の主なる宗教代表者によって世界平和祈願の催しが開催されました。日本の宗教代表もその催しに参加しましたが、「異宗教間の対話による相互理解」の潮流は世界的な広がりをみせ、翌年の比叡山宗教サミットの開催となったのです。

以来二十年の歳月が経過しました。私たちは多くの時間を共に祈り、様々な問題について話し合ってきました。その中で互いの違いを認め合い、尊重しながら宗教協力を推進することの大切さを学びました。私たちの祈りに共鳴する人々も確実に増え、祈りの輪も大きくなっています。

私たちの祈りは真摯であります。しかしながら、その力及ばず世界は未だ多くの悲劇に満ちています。対立と憎悪、暴力と破壊の連鎖が止みません。さらに核兵器に代表される大量殺戮兵器の脅威もますます増大しこの問題を一層、深刻なものにしております。それだけでなく人類の飽くなき欲望は環境を破壊し温暖化による異常気象を発生させ、生態系そのものを破壊しようとしています。

この危機的状況に対して私たち宗教者はこの集いを通して、「対立と憎悪」に代わり「和解と許し」こそが過去の負の連鎖を絶つために必要な選択であり、この決断により必ず平和への道が開かれるであろうことと、そしてそこを出発点として、ともに人類の未来のために持てる力を出し合い、叡智を結集し「協力」することの大切さを訴えたいと思います。

平和への道がいかに険しくとも、私たちは平和を愛し求める人々とともに、祈りの力を信じ、皆が信仰する真実の象徴である存在のご加護により、一日も早く恒久平和が実現しますよう心より祈りたいと思います。今回寄贈いただいた「世界平和の鐘」のこの音が地球の隅々まで響き渡り、人々の心に慈悲と叡智をもたらしますよう祈りたいと思います。

皆様、本日はお暑い中、お集まりいただきありがとうございました。

二〇〇七年八月四日

アッシジメツセージ

コンベンツアル聖フランシスコ修道会 アダム・ブネル神父

神の平和が皆様方と共にありますように。

皆様に、アッシジのフランシスコの名のもとに平和の道を求めるすべての兄弟・姉妹からのご挨拶を申し上げます。お互いの面前で祈り、平和への心からの切望を互いの中に感じ取るために、一九八六年に宗教界の指導者を招くよう、偉大なヨハネ・パウロ教皇に靈感を与えたのは、フランシスコの精神でした。

私たちがすべての宗教における平和の建設への招きを一緒に執り行うことは、素晴らしく、重要なことです。平和のメッセージが世界中で聞かれるまで、すべての山の頂上から、すべての街角で幾度もそれを行う必要があります。私たちは、言葉ではなく、私たち自身の生き方によって、それを更に語る必要があります。それが時には不可能に見えても、フランシスコがかれの時代に暴力に立ち向かったように、私たちも現代の暴力に立ち向かわなければなりません。

フランシスコは、私たちの時代とは異なる時代に生きていました。もともと、私たちの地球は大変小さくなり、フランシスコの時代よりも危険になっていきます。しかしかれは、他者を悪とみなし、それらの人々のこの世界からの抹殺を正当化して、他者を憎むという、またジハードに対抗する十字軍との全面戦争の世界と直面していました。フランシスコはこれを是認することはできませんでした。かれは、たとえ「敵」の陣営という立場にある人々の中においてさえ真の平和の人々がいることを認めることを、かれ自身の陣営の中にさえいる戦争を行う人間と立ち向かうことを学びました。フランシスコはスルタンから学びました。私たちも互いに学びあわなければなりません。

しばし、フランシスコの平和の道を考察することをお勧めします。私と共にウンブリアの丘へ登って、フランシスコへ尊敬を払うために建てられた壮大な大聖堂に入ってください。教皇の命によって集められた偉大な芸術家たちが描いたフレスコを、私と共に見て歩いてください。しかし、そこで時を費やさないようにしましょう。少なくともまだ費やさないようにしましょう。

どうぞ、ほとんど飾り立てていない小さな部屋に、私と共に入ってください。そこには、フランシスコが着けていた、ぼろぼろになった、汚い、フランシスコ自身の心を伝えるかのように着けていた服があります。しばし、私たちの前にある、その平凡で、しかし聖なるものの存在について瞑想しましょう。

それは、フランシスコに従う他の多くの人々や私が着けている仕立の良い服のようなものではありません。フランシスコの服は、人間の間にかれを埋葬するために、かれが葡萄畑で苦勞して働いている他の人々のようであること、すべての人間のことであること、かれとは異なった信仰さえ持っている者のようであることを語るために、デザインされています。

それは、家で紡いだ、おそらく大部分女性が手で紡いだ布によって作られています。もし私たちが生活の僅かな一片を生活の単純な事柄の中にかにより良く織り込むかを知っていたとすれば、私たちの世界観はどれほど大きく異なっていることでしょうか。ガンディーはそれを理解していたことでありましょう。

フランシスコの体を覆っているのは粗い布地で、かれの地上の父親の繁盛していた店の柔らかい織物ではありません。それは、皮膚を保護するために、また体に合わせて造られているもののようですが、富や食欲を表すものではありません。それは多くの衣服の一つではなく、フランシスコが生涯着けていた素朴な衣服です。

それは、かれが教皇やスルタンまたは王たちと会った時に着けていたものです。それは服従のしるしでしたが、それ以上のものでもありません。それは、貧しい人がいる限り、不正義がある限り、平和が存在しない限り、この神の人が疎外された者一人ひとりを神の子供として抱きしめ、かれらが着けている衣服を誇りをもつて着けるというメッセージでした。

死が迫った時、フランシスコは、生涯においてすべての造られたものは慈愛深いまた憐み深い神に属するものであることをかれに発見させるよう導くことになる旅路を始めた時に贅沢な衣服を地上の父親に返

したように、この衣服さえ脱いだのでした。かれは、世に生まれた時と同じように、この衣服さえ返すために脱いだのでした。フランシスコは、私たちが所有しているものは与えられた賜物であると悟っていました。賜物と賜物を与えた方は称えられなければなりません。その方に賜物はお返ししなければなりません。

私たちが長く立ち止まったとしても、私たち自身の心の中を見抜き、またすべての造られたものの前で謙虚さのために必要とされているもの、すべては贈り物であるということを見出すことは不可能でありましょう。これが平和のルーツです。すべては賜物なのです。

主よ、私たちが生き、幸福で、守られていることを知らせてくれる姉妹である衣服のために、あなたに賛美がありますように。私たちもそれを私たち以上に必要としている者に与えることができますように。

もう一度神の平和が皆様の心の中にありますように祈ります。それが、そこに隠されているだけでなく、他の者に与えられる時に真に受けられることができる賜物として、すべての人と分かち合うことができることを願います。

世界宗教者
平和の祈りの集い

D

E

T

A

資
料

日本宗教代表者会議

経過報告

平成十九年

◎2月16日(金) 京都 ウェスティン都ホテル京都

・日本宗教代表者会議設立会議

(第1回常任・運営合同委員会)

・日本宗教代表者会議発足式

◎3月27日(火) 天台宗務庁

・第1回事務局会議

◎4月16日(月) 立正佼成会京都教会

・第2回事務局会議

・各部第1回会議

◎5月8日(月) 延暦寺

・第2回儀典部会

◎5月12日(土) 立正佼成会京都教会

・第2回会議部会

◎5月18日(金) 天台宗務庁

・第2回総務部会

◎5月28日(月) 立正佼成会京都教会

・第3回事務局会議

・第2回渉外・接遇部会

◎6月18日(月) 立正佼成会京都教会

・第3回渉外・接遇部会

◎6月21日(木) 新・都ホテル

・記者会見

・第3回総務部会

◎6月28日(木) 天台宗務庁

・第3回会議部会

・第3回儀典部会

◎7月5日(木) 新・都ホテル

・第2回常任・運営合同委員会

◎7月27日(金) 立正佼成会京都教会

・第4回事務局会議

比叡山宗教サミット20周年記念

世界宗教者平和の祈りの集い

◎8月3日(金) 開会式典・記念講演・シンポジウム

国立京都国際会館

◎8月4日(土) 特別フォーラム(2会場同時開催)

国立京都国際会館

世界平和祈り式典

比叡山延暦寺

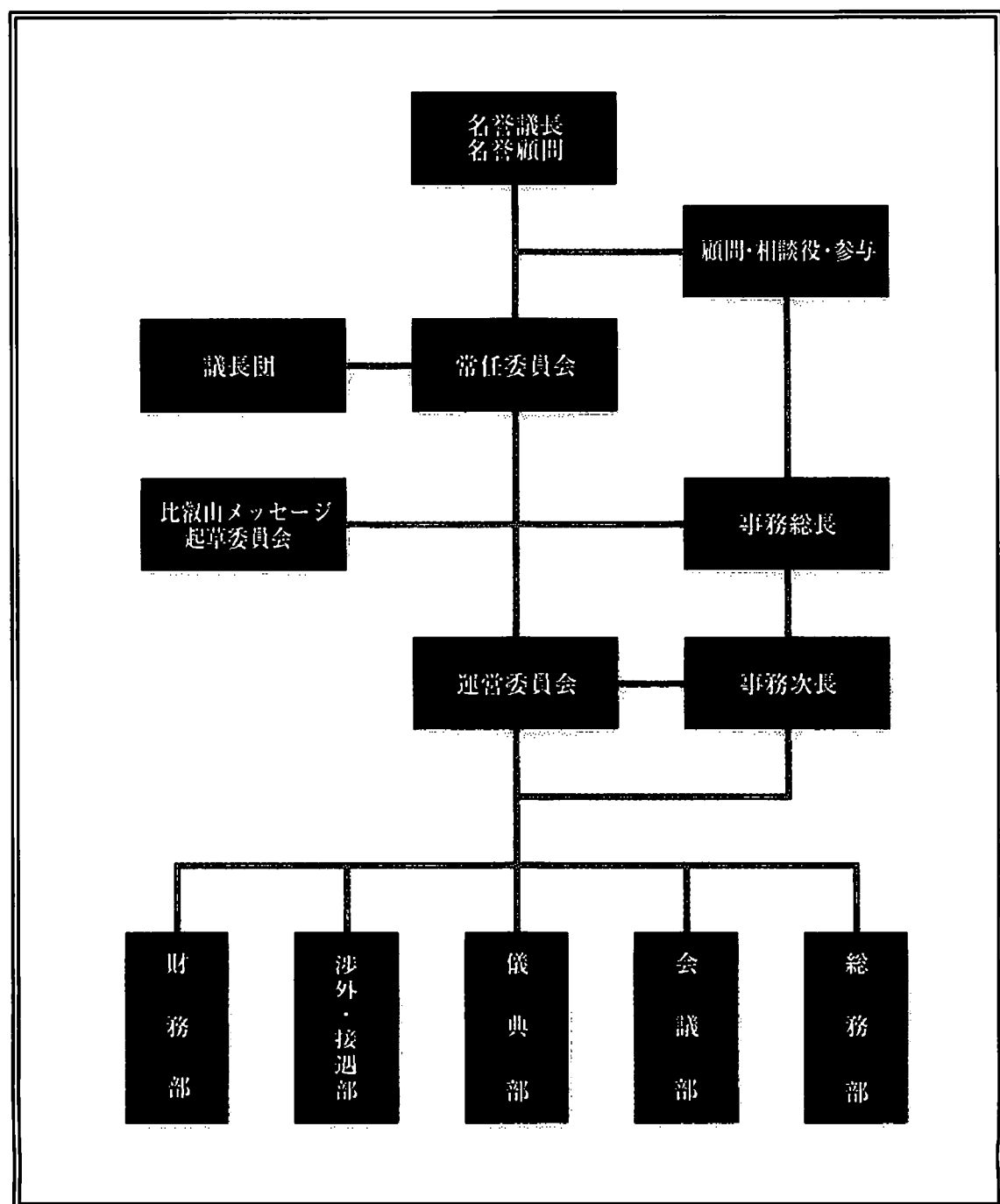
◎12月5日(水)

・「日本宗教代表者会議」事務局 解散

日本宗教代表者会議規約

-
- 一、本会議は日本宗教代表者会議（The Japan Conference of Religious Representatives）＝J.C.R.R.と称し事務局を比叡山延暦寺内に置く。
- 二、本会議は比叡山宗教サミット 20 周年記念世界宗教者平和の祈りの集いの主催団体として設置する。
- 三、本会議は日本宗教連盟及び日本宗教連盟協賛五団体の協力を得て前条の目的に賛同する代表的宗教者をもって構成する。
- 四、本会議の運営をはかるため次の役員を置く。
- | | | | |
|--------|-----|------|-----|
| 1 名誉議長 | 1 名 | 名誉顧問 | 5 名 |
| 顧問 | 若干名 | 相談役 | 若干名 |
| 参与 | 若干名 | 議長団 | 若干名 |
| 常任委員 | 若干名 | 事務総長 | 1 名 |
| 運営委員 | 若干名 | 事務次長 | 3 名 |
| 監事 | 3 名 | | |
- 2 イ、名誉議長・名誉顧問は本会議を代表する。
- ロ、顧問、相談役並びに参与は本会議の運営に助言を行う。
- ハ、議長団は比叡山宗教サミット 20 周年記念世界宗教者平和の祈りの集いにおける会議を運営すると共に常任委員会に出席し助言を行う。
- ニ、常任委員は常任委員会を組織し本会議の業務を議決する。
- ホ、事務総長は本会議の事務を統理する。
- ヘ、運営委員は運営委員会を組織し常任委員会に提案する事項の立案及び議決された事項の執行にあたる。
- ト、事務次長は事務総長を補佐し事務を推進する。
- チ、監事は本会議の業務並びに会計を監査する。
- 五、本会議は必要に応じて各種委員会並びに事務局に顧問・担当部を置くことができる。
- 六、本会議の経費は寄付金その他をもって充当する。
- 七、その他必要な事項は常任委員会の議決を経て定めることができる。
- 八、本会議は所期の目的を達成した後常任委員会の議決を経て解散する。
- 九、この規則は平成19年2月16日より施行する。
-

日本宗教代表者会議組織図



海外参加者一覧

(順不同)

特別来賓

ジョセフ・バーナー・リード氏
サムエル・クー氏

国連事務次長・国連事務総長特別顧問
韓国文化協力大使

アメリカ
韓国

仏教

バロップ・タイアリー氏
テップ・ボーン師
釋一誠法師
朱正山僧任
A・T・アリアラトネ師
サダナンダ師(代読・ギャンディーブ師)

世界仏教徒連盟事務総長
カンボジア仏教会会長 大僧正
中国仏教協会会長
韓国仏教宗団協議会副会長
サルボダヤ運動創立者・主事
全印度僧伽協会理事

タイ
カンボジア
中国
韓国
スリランカ
インド

キリスト教

フェリックス・マチャド師
アダム・ブンネル師
マー・グレゴリオス・イブラヒム師
ソリチュア・ナババン師
ハンス・ウコ師
イグナティウス・カイガマ師

教皇庁諸宗教対話評議会次長
聖フランシスコ会国際センター諸宗教対話局長
シリア正教府主教
世界教会協議会(WCC)共同会長
世界教会協議会(WCC)諸宗教関係対話事務局長
ジョス大司教区大司教

バチカン
イタリア
シリア
インドネシア
スウェーデン
ナイジェリア

イスラーム

ムハンマド・アブドルファティール・アブドルアジーズ氏
アブドゥラー・アルレヘダン氏
ディーン・シャムスディーン氏
ワヒド・リドワン氏

アズハル大学副学長
イスラーム問題・寄進・宣教・普導省イスラーム問題審議官
ムハンマディヤ会長
ムハンマディヤ国際渉外部

エジプト
サウジアラビア
インドネシア
インドネシア

ユダヤ教

ルネ・グーマン師

ヨーロッパ会議・ヨーロッパ評議会常任代表

フランス

ヒンドゥー教

スグネンドラ・テータ・スワミジ師

スリ・プティジ・マータ修道院大修道院長

インド

ゾロアスター教

ホミ・ダラー師

世界ゾロアスター教徒文化財団理事長

インド

民族宗教

デニス・J・バンクス師

ネイティブアメリカンリーダー・アメリカインディアン運動(AIM)共同創始者

アメリカ

諸宗教組織

レオニド・キシコフスキー師
アゴスティエーノ・ジョバンニョーリ氏
アルベルト・クワットルッチ氏
クリスティーナ・リー氏

世界宗教者平和会議国際委員会実務議長
聖エジディオ共同体アジア地域責任者
聖エジディオ共同体事務総長
フォコラーレ運動諸宗教対話センター代表

アメリカ
イタリア
イタリア
イタリア

日本宗教代表者会議役員名簿

(順不同)

名誉議長・名誉顧問

役職名	名前	所属役職名
名誉議長	半田 孝 淳	天台座主
名誉顧問	出口 紅	大本教主
名誉顧問	大道 晃 仙	全日本仏教会会長
名誉顧問	白 柳 誠 一	カトリック枢機卿
名誉顧問	久 邇 邦 昭	神社本庁統理
名誉顧問	深 田 充 啓	新日本宗教団体連合会名誉理事長

議長団

役職名	名前	所属役職名
議長団	杉 山 一太郎	教派神道連合会理事長
議長団	安 原 晃	全日本仏教会理事長
議長団	山 北 宣 久	日本キリスト教連合会委員長
議長団	矢田部 正 巳	神社本庁総長
議長団	庭 野 日 顕	新日本宗教団体連合会理事長

顧 問

役職名	名前	所属役職名
顧問	坂 田 安 儀	禪教教主
顧問	尾 立 聖 兆	神道大教管長
顧問	柴 田 尊 之	実行教管長
顧問	黒 住 宗 晴	黒住教教主
顧問	村 烏 邦 夫	御嶽教管長
顧問	巫 部 祐 彦	神理教管長
顧問	芳 村 正 徳	神習教教主
顧問	千 家 達 彦	出雲大社教管長
顧問	大 谷 錫 顯	真宗大谷派門首
顧問	坪 井 俊 映	浄土門主
顧問	酒 井 日 慈	日蓮宗管長
顧問	松 長 有 慶	高野山真言宗管長
顧問	東 海 大 光	臨済宗妙心寺派管長
顧問	阿 部 龍 文	真言宗智山派管長
顧問	烏 居 愼 馨	真言宗豊山派管長
顧問	安 田 暎 胤	法相宗薬師寺管主
顧問	清水谷 孝 尚	聖観音宗管長
顧問	出 口 順 得	和宗管長
顧問	稻 山 靈 芳	念法真教燈主
顧問	岡 野 正 純	孝道教団統理
顧問	宮 崎 奕 保	大本山永平寺貫首
顧問	成 田 有 恒	浄土宗大本山増上寺法主
顧問	内 野 日 総	日蓮宗久遠寺法主
顧問	菅 原 倡 海	天台宗妙法院門跡門主
顧問	小 堀 光 詮	天台宗三千院門跡門主
顧問	高 見 三 明	カトリック長崎大司教
顧問	白 井 永 二	神社本庁顧問

顧問	阿部 恒	神社本庁長老
顧問	高城 治延	神社本庁理事
顧問	九條 道弘	平安神宮宮司
顧問	千家 尊祐	出雲大社宮司
顧問	外山 勝志	明治神宮宮司
顧問	宮本 文靖	妙智齋教団会長
顧問	佐原 慶治	妙道会教団会長
顧問	岡野 聖法	解脱会法主
顧問	中山 善司	天理教真柱

相談役

役職名	名前	所属役職名
相談役	亀谷 莊司	日本キリスト教迎合会顧問
相談役	杉谷 義純	WCRP日本委員会前事務総長
相談役	飯南 覚範	世界連邦日本仏教徒協議会会長
相談役	上杉 千郷	世界連邦日本宗教委員会代表委員
相談役	樋口 美作	日本ムスリム協会名誉会長

常任委員

役職名	名前	所属役職名
常任委員	田中 恒潤	神社本庁副総長
常任委員	栗田 行雄	実行教総務
常任委員	鴨下 博	御嶽教顧問
常任委員	田中 愼登朗	黒住教教務総長
常任委員	島本 邦彦	大本本部長
常任委員	淵 英徳	曹洞宗宗務総長
常任委員	不二川 公勝	浄土真宗本願寺派総長
常任委員	熊谷 宗恵	真宗大谷派宗務総長
常任委員	稲岡 康純	浄土宗宗務総長
常任委員	小松 浄愼	日蓮宗宗務総長
常任委員	庄野 光昭	高野山真言宗宗務総長
常任委員	細川 景一	臨済宗妙心寺派宗務総長
常任委員	島 秀隆	真言宗智山派宗務総長
常任委員	浅井 侃雄	真言宗豊山派宗務総長
常任委員	五十嵐 意承	聖観音宗宗務総長
常任委員	森田 俊朗	和宗宗務総長
常任委員	桶屋 良祐	念法真教教務総長
常任委員	河原 恵光	天台宗延暦寺執行
常任委員	野村 純一	カトリック名古屋司教区司教
常任委員	大塚 直直	カトリック京都司教区司教
常任委員	山本 俊正	日本キリスト教協議会総幹事
常任委員	寺井 穂伯	大阪府神社庁庁長
常任委員	藤原 正克	兵庫県神社庁庁長
常任委員	伊勢 美登	奈良県神社庁庁長
常任委員	中野 幸彦	滋賀県神社庁庁長
常任委員	朝日 芳英	和歌山県神社庁庁長
常任委員	宮西 惟道	日枝神社宮司
常任委員	吉田 茂穂	鶴岡八幡宮宮司
常任委員	打田 文博	小園神社宮司

常任委員	西高辻 信 良	太宰府天満宮宮司
常任委員	中 島 精太郎	明治神宮権宮司
常任委員	力 久 隆 稔	善隣教教主
常任委員	吉 岡 優	祖神道教団祖神
常任委員	出 居 茂	修養団捧誠会総裁
常任委員	保 積 秀 胤	大和教団教主
常任委員	榊 原 法 公	法公会会長
常任委員	江 口 陽 一	大法輪台意光妙教会理事
常任委員	森 田 幸 伯	円応教理事長
常任委員	石 倉 寿 一	大慈會教団次代会長
常任委員	田 澤 清 喜	松緑神道大和山教主
常任委員	飯 降 政 彦	天理教教会本部表統領
常任委員	西 田 多 戈止	一燈圓当番
常任委員	三 宅 光 雄	金光教泉尾教会教会長

監 事

役 職 名	名 前	所 属 役 職 名
監事	池 田 行 信	全日本仏教会事務総長
監事	鉢 呂 神 龍	新日本宗教団体連合会理事 / 天恩教教主
監事	加 藤 隆 久	兵庫県神社庁庁長

運営委員

役 職 名	名 前	所 属 役 職 名
運営委員	宮 本 けいし	妙智會教団理事長
運営委員	鹿子木 旦 夫	人類愛善会副会長
運営委員	永 澤 稔	神道大教教務部長
運営委員	黒 住 宗 道	黒住教副教主
運営委員	黒 住 忠 親	黒住教本部公室長
運営委員	栗 田 幸 子	実行教総務補
運営委員	三 原 照 正	扶桑教参元
運営委員	葦 原 正 憲	曹洞宗総務部長
運営委員	後 藤 壽 邦	浄土真宗本願寺派総務
運営委員	富 樫 珠 徳	真宗大谷派総務部長
運営委員	村 上 眞 孝	浄土宗総務局長
運営委員	藤 岡 暎 邦	日蓮宗総務部長
運営委員	永 島 龍 弘	高野山真言宗総務部長
運営委員	松 井 宗 益	臨済宗妙心寺派総務部長
運営委員	谷 晃 昭	天台宗総務部長
運営委員	小 林 祖 承	天台宗延暦寺総務部長
運営委員	佐 藤 玲 秀	真言宗智山派総務部長
運営委員	中 川 祐 聖	真言宗豊山派総務部長
運営委員	宝 積 玄 承	京都国際禅堂師家
運営委員	木ノ下 寂 俊	天台宗妙法院門跡執事長
運営委員	大 島 亮 幸	天台宗三千院門跡執事長
運営委員	花 井 拓 夫	カトリック京都司教区司祭
運営委員	高 地 敬	日本聖公会京都教区主教
運営委員	稲 貫 夫	神社本庁渉外部長
運営委員	山 本 行 恭	椿大神社宮司
運営委員	南坊城 充 興	道明寺天満宮宮司

運営委員	室田一樹
運営委員	加藤芳哉
運営委員	工藤均
運営委員	伊藤守康
運営委員	川端健之
運営委員	中村憲一郎
運営委員	徳増公明
運営委員	斎藤謙次
運営委員	生田茂夫
運営委員	岩田長太郎
運営委員	畠山友利
運営委員	可児光永
運営委員	松田正行
運営委員	貫田普澄
運営委員	大下隆章
運営委員	野下千年

岩屋神社宮司
服部天神宮宮司
高山稲荷神社宮司
明治神宮教学研究センター事務長
立正佼成会外務部長
立正佼成会京都教会会長
日本ムスリム協会会長
新日本宗教団体連合会事務局長
新日本宗教団体連合会事務局次長
天理教教会本部総務部長
WCRP日本委員会事務次長
世界連邦日本宗教委員会副委員長
世界連邦日本宗教委員会事務局長
知恩院執事・執事長公室長
黒住教総務部長
カトリック中町教会主任司祭

参 与

役職名	名前
参与	柴田尚明
参与	坂本餞晃
参与	小林正道
参与	服部融宣
参与	守山雄順
参与	仲田順和
参与	藤井純敬
参与	酒井文雄
参与	大谷博通
参与	横山敏明
参与	加納博司
参与	近藤真道
参与	増田貞圓
参与	坂本餞泰
参与	松瀨弘道
参与	前田専學
参与	乙川暎元
参与	関崎幸孝
参与	入西勝彦
参与	伊東隆司
参与	岡部兼海
参与	松山英照
参与	上杉照延
参与	菅野秀浩
参与	立部祐道
参与	日下悌宏
参与	中島義晃
参与	松浦浩道
参与	武田圓龍
参与	高井正俊
参与	大谷義博

所属役職名
全日本仏教会監事(静岡県仏教会会長)
全日本仏教会監事(東京ブディストクラブ会長)
全日本仏教会常務理事(浄土宗宗議会議員)
全日本仏教会常務理事(高野山真言宗高野山東京別院主監)
全日本仏教会理事(聖観音宗浅草寺責任役員)
全日本仏教会理事(真言宗醍醐派宗務総長)
全日本仏教会理事(北海道仏教会連盟会長)
全日本仏教会理事(埼玉県仏教会会長)
全日本仏教会理事(東京都仏教連合会理事長)
全日本仏教会理事(神奈川県仏教会会長)
全日本仏教会理事(岐阜県仏教会常任顧問)
全日本仏教会理事(愛知県仏教会会長)
全日本仏教会理事(大阪府仏教会会長)
全日本仏教会理事(全日本仏教育年會直前理事長)
全日本仏教会理事(学識経験者)
全日本仏教会理事(学識経験者)
全日本仏教会評議員(曹洞宗教学部長)
全日本仏教会評議員(真宗大谷派東京宗務出張所長)
全日本仏教会評議員(浄土宗文化局長)
全日本仏教会評議員(日蓮宗伝道局長)
全日本仏教会評議員(高野山真言宗企画室長)
全日本仏教会評議員(臨濟宗妙心寺派財務部長)
全日本仏教会評議員(真言宗智山派教区代表会議長)
全日本仏教会評議員(真言宗豊山派教務部長)
全日本仏教会評議員(真言宗御室派宗務総長)
全日本仏教会評議員(西山浄土宗宗務総長)
全日本仏教会評議員(黄檗宗宗務総長)
全日本仏教会評議員(臨濟宗南禅寺派東京出張所長)
全日本仏教会評議員(天台眞盛宗宗務総長)
全日本仏教会評議員(臨濟宗建長寺派宗務総長)
全日本仏教会評議員(真宗仏光寺派宗務総長)

参与	鬼頭誠英	全日本仏教会評議員(浄土宗西山禅林寺派宗務総長)
参与	坂口博	全日本仏教会評議員(真言宗大覚寺派宗務総長)
参与	吉村 暉	全日本仏教会評議員(融通念佛宗宗務総長)
参与	岡本 誠	全日本仏教会評議員(本門佛立宗第5宗務支庁同支庁長)
参与	榎原 禅	全日本仏教会評議員(真言宗普通寺派宗務総長)
参与	今杉 康	全日本仏教会評議員(臨済宗円覚寺派宗務総長)
参与	竹内 正	全日本仏教会評議員(法華宗「真門流」宗務総長)
参与	田中 利	全日本仏教会評議員(金峯山修験本宗宗務総長)
参与	筒井 寛	全日本仏教会評議員(華嚴宗宗務総長)
参与	石堂 恵	全日本仏教会評議員(真言宗中山寺派宗務総長)
参与	中村 昌	全日本仏教会評議員(福島県仏教会会長)
参与	寺内 泰	全日本仏教会評議員(茨城県仏教会会長)
参与	塚田 宗	全日本仏教会評議員(栃木県仏教会副理事長)
参与	若槻 繁	全日本仏教会評議員(群馬県仏教連合会会長)
参与	春日 浩	全日本仏教会評議員(新潟県仏教会副会長)
参与	山口 祐	全日本仏教会評議員(長野県仏教会事務局長)
参与	田中 始	全日本仏教会評議員(滋賀県仏教会副会長)
参与	長澤 香	全日本仏教会評議員(京都仏教会事務局長)
参与	矢坂 誠	全日本仏教会評議員(兵庫県仏教会事務局長)
参与	太田 智	全日本仏教会評議員(和歌山県仏教会会長)
参与	橋本 明	全日本仏教会評議員(岡山県仏教会会長)
参与	三浦 章	全日本仏教会評議員(愛媛県仏教会事務局長)
参与	一月 正	全日本仏教会評議員(長崎仏教連合会会長)
参与	島田 喜久子	全日本仏教会評議員(全日本仏教婦人連盟理事長)
参与	逸見 道郎	全日本仏教会評議員(国際仏教興隆協会総務部長)
参与	高山 久照	全日本仏教会評議員(日本仏教保育協会事務局長)
参与	沼田 智秀	全日本仏教会評議員(仏教伝道協会会長)
参与	鈴木 永城	全日本仏教会評議員(仏教情報センター理事長)
参与	東條 仁哲	全日本仏教会参与(真言宗大鳴派管長)
参与	青木 謙	全日本仏教会参与(臨済宗東福寺派宗務総長)
参与	畔柳 正	全日本仏教会参与(浄土宗西山深草派宗務総長)
参与	吉川 恵	全日本仏教会参与(真言宗木辺派宗務総長)
参与	座間 光	全日本仏教会参与(天台寺門宗宗務総長)
参与	田邊 圓	全日本仏教会参与(法華宗陣門流教学部長)
参与	佐分 宗	全日本仏教会参与(臨済宗相国寺派教学部長)
参与	佐伯 龍	全日本仏教会参与(真言律宗西大寺執事長)
参与	湯浅 高	全日本仏教会参与(真言宗泉涌寺派宗務総長)
参与	村上 太	全日本仏教会参与(法相宗薬師寺執事長)
参与	岡田 康	全日本仏教会参与(真言三寶宗宗務総長)
参与	大井 亮	全日本仏教会参与(青森県仏教会会長)
参与	青柳 雅	全日本仏教会参与(山梨県仏教会会長)
参与	萩岡 裕	全日本仏教会参与(徳島県仏教会事務局長)
参与	高谷 文	全日本仏教会参与(香川県仏教会会長)
参与	海老塚 和	全日本仏教会参与(高知県仏教会理事)
参与	弘中 誠	全日本仏教会参与(宮崎県仏教連合会会長)
参与	善國 乘	全日本仏教会参与(沖縄県仏教会会長)
参与	中山 静	全日本仏教会参与(日本仏教銀印会理事長)
参与	竹内 日	日蓮宗妙見閣寺代表役員
参与	出口 京太郎	大本本部相談役
参与	小串 和	神社本庁常務理事

参与	草平	堀岩	昭昌	司利	神社本厅常務理事
参与	園田	健彦	稔	神社本厅理事	
参与	吉田	東男	彦男	神社本厅理事	
参与	鳩	藤公	聰	神社本厅理事	
参与	佐西	館康	勲	神社本厅理事	
参与	永井	倉文	雄	神社本厅理事	
参与	金川	上親	昌	神社本厅理事	
参与	宮間	孝夫		神社本厅監事	
参与	齋藤	重介		京都府神社庁副庁長	
参与	三中	木善	則	京都府神社庁副庁長	
参与	中嶋	茂博		京都府神社庁参事	
参与	田中	安比呂		賀茂別雷神社宮司	
参与	新木	直人		賀茂御祖神社宮司	
参与	佐古	一洌		松尾大社宮司	
参与	尾崎	保博		平野神社宮司	
参与	森井	爵和	雄大	八坂神社宮司	
参与	高井	井隆	男	圓船神社宮司	
参与	澤橘	重十九		吉田神社宮司	
参与	海部	光彦		北野天満宮宮司	
参与	文室	隆紀		龍神社宮司	
参与	松原	宏		巖王神社宮司	
参与	吉田	良武		建勲神社宮司	
参与	多田	隆男		鹽国神社宮司	
参与	渡邊	誠		梨木神社宮司	
参与	西村	尚		愛宕神社宮司	
参与	渡邊	絃一		白叢神宮宮司	
参与	田畑	政治		大阪府神社庁副庁長	
参与	芦立	幸正		大阪府神社庁副庁長	
参与	奈須	光興		大阪府神社庁参事	
参与	山本	博之		枚岡神社宮司	
参与	中本	幸彦		大島神社宮司	
参与	水無瀬	忠成		生國魂神社宮司	
参与	中塚	昌宏		水無瀬神宮宮司	
参与	真弓	常忠		阿部野神社宮司	
参与	柳澤	忠鷹		住吉大社宮司	
参与	小谷	真功		大阪鹽國神社宮司	
参与	津江	明宏		高津宮宮司	
参与	西井	幾璋		今宮戎神社宮司	
参与	日岡	幾朗		兵庫県神社庁副庁長	
参与	大本	部昭		兵庫県神社庁副庁長	
参与	伊名	孝至		兵庫県神社庁事務局長主事	
参与	長尾	孝二		伊井諾神宮宮司	
参与	安黒	秀幸		海神社宮司	
参与	栃尾	泰治郎		出石神社宮司	
参与	吉井	良昭		伊和神社宮司	
				湊川神社宮司	
				西宮神社宮司	

参与	岩	本	文	磨	射橋兵主神社宮司
参与	幸	田	和	久	廣嶺神社宮司
参与	泉	保	梅	慶	兵庫県姫路國神社宮司
参与	久	田	義	繼	兵庫県神戸國神社宮司
参与	飯	尾	賀	明	赤穂大石神社宮司
参与	福	本	寛	郎	多田神社宮司
参与	鈴	木	潤	治	奈良県神社庁副庁長
参与	高	津	親	矩	奈良県神社庁副庁長
参与	鈴	鹿	頼	胤	奈良県神社庁参事
参与	葉	室	正	昭	春日大社宮司
参与	森	田	善	光	石上神宮宮司
参与	上	樋	俊	久	龍田大社宮司
参与	樋	川	南	夫	廣瀬神社宮司
参与	平	田	賢	勝	談山神社宮司
参与	上	杉	留	教	丹生川上神社上社宮司
参与	森	嶋	正	蔵	丹生川上神社下社宮司
参与	河	谷	陸	孫	丹生川上神社宮司
参与	塩	田	康	宏	吉野神宮宮司
参与	宮	村	光	男	大和神社宮司
参与	吉	岳	母	弘	奈良県國神社宮司
参与	生	嶋	敏	嗣	石園座多久蟲玉神社宮司
参与	中	嶋	建	幸	滋賀県神社庁副庁長
参与	加	藤	泰	雄	滋賀県神社庁副庁長
参与	垣	内	宏	乃	滋賀県神社庁参事
参与	中	村	弘	朗	連部大社宮司
参与	山	本	賢	之	御上神社宮司
参与	三	家	邦	澄	阿賀神社宮司
参与	西	川	秀	司	滋賀県國神社宮司
参与	寺	本	嘉	明	長浜八幡宮宮司
参与	岩	橋	利	紀	和歌山県神社庁副庁長
参与	吉	良	義	幸	和歌山県神社庁副庁長
参与	上	野	重	茂	和歌山県神社庁参事
参与	奥	鬼	家	章	龜山神社宮司
参与	九	生	晃	顯	熊野速玉大社宮司
参与	長	澤	好	視	伊太祁曽神社宮司
参与	田	中	偉	隆	熊野本宮大社宮司
参与	田	川	佐	一	丹生都比賣神社宮司
参与	石	山	靖	晃	關鷄神社宮司
参与	本	田	一	仁	真生会会長
参与	岡	田	晃	和	新日本宗教団体連合会理事 / 神靈の家教主
参与	山野井	克	典	夫	新日本宗教団体連合会理事 / 靈波之光教会代表役員
参与	深	田	恵	博	新日本宗教団体連合会理事 / 玉光神社権宮司
参与	左	藤	滋	弥	新日本宗教団体連合会理事 / 宗教真光二代教え主代理
参与	木	島	一	子	立正佼成会理事長
				光	新日本宗教団体連合会理事 / 円応教惠主
				郎	新日本宗教団体連合会監事 / 澄律律院住職
					新日本宗教団体連合会監事 / 修養団捧誠会会長

162

内戦で大きな被害を受けたボスニア・ヘルツェゴビナの首都サラエボに住む7〜13歳の少女4人が2日、京都市を訪れ、広島県内の女子小中学生4人と交流した。3、4日に同市などで開かれる「世界宗教者平和の祈りの集い」に合わせ、この日は、2人1組で折り鶴に挑戦。サラエボの4人が参加している。COPに詳しいフォトジャーナリストの大家敦子さん(47)東京都三鷹市IIの紹介で来日し、広島の少女と共に「集い」にも参加する。

折り鶴に平和願う

ボスニア、広島の少女交流

京都

主催者の日本宗教代表者会人は懇談会しながら、広島(名譽議長)半田孝淳・島の4人を手本に無事完成(天台座主)が招待。8人はさせた。ドゥッチ・アド折り鶴を折りながら、戦争の不幸せをかみしめた。サラエボの4人は宗教や、民族が異なるが、農作業を通じた交流で民族の和解などを旨とする「コミュニティー・ガーデン・プロジェクト」(武井澄人、写真も)に、自分と同じような存在を感じた、広島県立立花國中3年の久保田遊子さん(14)は「折り鶴が言葉の代わりになった」と話した。



初対面から約1時間ですっかり打ち解け、笑顔で記念撮影するボスニアと広島の子どもたち。京都市左京区の国立京都国際会館で2日午後0時8分

東京 都庁 楽庁 屋上

平和の祈り 鶴に込め

左京で宗教者の集いプレ行事
広島とボスニアの子が交流

内戦に苦しんだボスニア・ヘルツェゴビナと原爆が投下された広島の子どもたちが二日、京都市左京区の国立京都国際会館で交流した。平和への祈りを込めて一緒に折り鶴を折った。

比叡山宗教サミット二十周年を記念して開かれ、ボスニア・ヘルツェゴビナからは七十三歳の少女四人が来日。戦争で家族や家を失い、共同墓地などで暮らしている。広島県からも小中学生四人が参加した。自己紹介やお土産の交



折り鶴を作るボスニア・ヘルツェゴビナと広島の子どもたち（京都市左京区・国立京都国際会館）

換の後、二人一組で折り鶴を作った。広島の子どもが折り方を説明し、一緒に折った。ボスニア・ヘルツェゴビナの子どもたちには折り紙の角をそろえるのが難しかったようでも「折り紙は楽しい」と何度も繰り返し折った。

集いには世界十六カ国から約二千人が参加する。「和解と協力」をテーマにシンポジウムなどがある。

京都新聞
8月3日(金) 朝刊

第3種郵便物認可

毎月

日

発行

折り廻つくりを楽しむボスニア・ヘルツェゴ
ナと広島の子々左京区の国立京都国際会館で



は6日に広島で開かれる
慰霊祭にささげられる。

ボスニアの子と 広島の子 握手

平和の集いへ「和解」象徴

激しい民族紛争があったボスニア・ヘルツェゴ
ビナと被爆地の広島の子とたちが2日、左京区
の国立京都国際会館で開かれた平和を考ふる交流
会に集った。3日から同会館で始まる「比叡山宗
教サミット20周年記念 世界宗教者平和の祈りの
集い」を主催する日本宗教代表者会議が、サミッ
トのテーマ「和解と協力」を象徴するイベントと
して企画した。

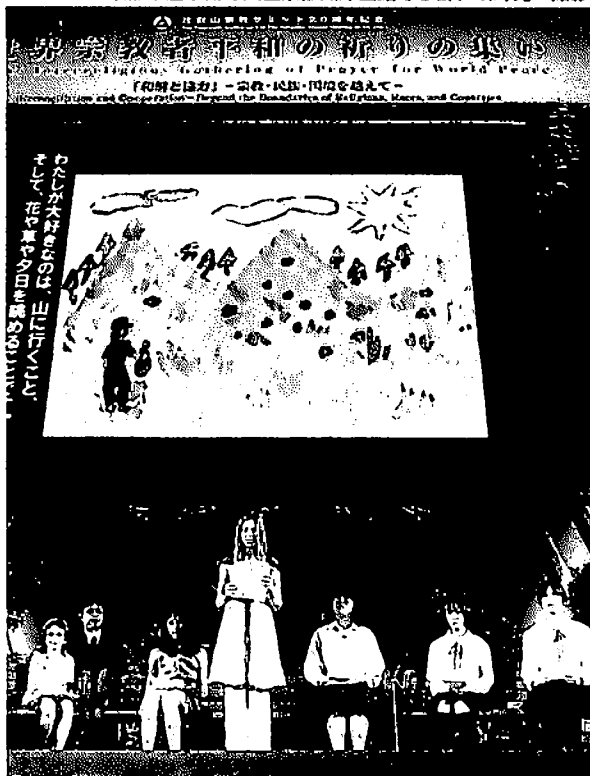
参加したのは7歳から
14歳の女子小中学生で、
双方4人ずつの計8人。
ボスニアの子とたちの
両親は民族も宗教も異な
るが、国内各地に散けら
れた「コミュニティーガ
ーデン」という施設でこ
もに働く友人同士。同ガ
ーデンではセルビア人、
クロアチア人、イスラム
系など様々な民族が一緒
に野菜を育てながら交流
を深めており、民族和解
の象徴となっている。

この日は、ちりめんの
伝統柄の小物入れと内職
で破壊された建物の写真
が入ったキーホルダーな
どをプレゼント交換。そ
の後、広島の子とたちが
教えながら一緒に鶴を折
った。8人は1日に比叡
山頂で催される「世界平
和祈りの式典」で平和の
鐘を打ち鳴らし、折り鶴

朝日新聞

8月3日(金)朝刊

自分たちの絵やメッセージを発表するボスニアと広島の子どもたち
—京都市左京区の国立京都国際会館で3日、90分—撮影



私たちが 平和を描く

「世界宗教者平和の祈りの集い」（日本宗教代表者会議主催）が3日、京都市左京区の国立京都国際会館で開幕した。

「『和解と協力』—宗教・民族・国境を越えて—」がテーマで、世界19カ国、約2000人の宗教者らが参加。アフガニスタンの韓国人拉致事件を踏まえ「紛争解決の手段として人のいのちを軽んずる行為は、さらなる混乱を招くだけ」などと

人権の早期解放を求める緊急声明を発表した。

開会式では、内戦で大きな被害を受けたボスニア・ヘルツェゴビナの首都サラエボの少女4人と広島の女子小中学生4人が、それぞれの考える平和な未来を描いた絵を発表。ドウッチ・アドナさんの絵は「未来には、違う宗教間の争いや対立がなくなっていきたい」と訴えた。

「集いは4日もあり、大津市の比叡山上で『平和の鐘』の除幕などを予定している。

【武井澄人】

毎日新聞
8月4日(金)朝刊

14日 土曜日

産経新聞
8月4日(金)朝刊

ト幕
ミサ
宗教
宗開

平和実現へ共に歩む 指導者ら決意新たに

国立京都国際会館(京都市左京区)で3日に開かれた「比叡山宗教サミット20周年記念 世界宗教指導者たちは、宗教の壁を、決意を新たにした。

開会式ではボスニアの子供たちと、広島の中学生在が描いた理想の地球をテーマにした絵がスクリーンに映し出された。紛争や自然破壊がなく、人々が楽しもうに生きる姿を描いた作品と、絵に込めた思いを笑顔で語る子供たちに、会場を埋めた宗教指導者たちが。

らは大きな拍手が送られた。

開会式では、ローマ法王・ベネディクト16世や、エジプトにあるイスラム教研究の最高学府・アズハル大学総長らから寄せられたメッセージも読み上げられた。

また、キリスト、イスラム、ユダヤなどの宗教の代表者が出席したシンポジウムが開かれ、紛争解決に向けた具体的な取り組みや実践例が紹介された。



世界各地から集まった宗教指導者たちに、地球の理想像を描いた絵に込めたメッセージを読み上げる広島とボスニアの子供たち＝京都市左京区

第3回読者投票結果

京

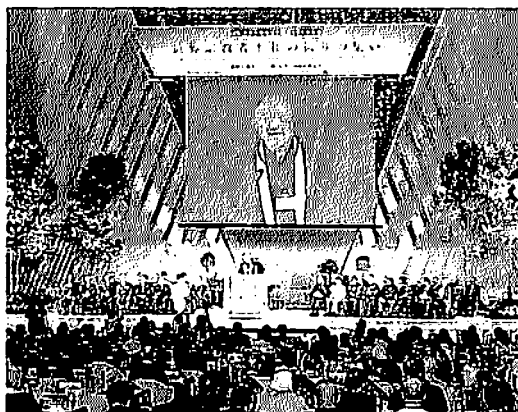
増刊

諸宗教が対話によって平和を目指す「世界宗教者平和の祈りの集い」が3日、京都市左京区の国立京都国際会館で始まった。アフガニスタン旧政権タリバンによる韓国入国ボランティア拉致・殺害事件に関し、早期解決を願う緊急声明を発表した。

タリバンの韓国人拉致・殺害

早期解決へ祈り

比叡山宗教サミット20周年



各国の宗教家ら2000人が出席した開会式典（京都市左京区・国立京都国際会館）

主催の日本宗教代表者会議（名井綱長・半田孝淳天台座主）が声明を準備し、この日、今年集いは世界の宗教指導者が平和を祈った比叡山宗教サミット（一九八七年）の開会二十周年を記念しており、十九カ国からキリスト教やイスラム教などの宗教家が招かれた。初日は開会式典に続いて基調講演とシンポジウムがあり、宗教間の対話が平和につながることを確認し合った。

左京の集いで声明

危機を生むだけで問題は解決できないとし「和解と許し」をもたず宗教の立場から、早期の人身解放を求めた。

来場した約三千人から拍手で賛同を得た。この緊急声明は英訳してアフガニスタンや

平和へ「和解と許し」を

京都新聞
8月4日(金)朝刊

あとがき

「アッシジの精神」を引き継いで、一九八七年に第一回比叡山宗教サミットが開催されてから二十年、このサミットを毎年欠かさず開催するには大変なご苦労もあったことと存じます。提唱者の山田恵諦天台座主は、「継続は力なり。比叡山で花火を上げて終わりではなく、良いものは続くんだから、続くための努力をしない」と、ご教示されたと同っております。このお言葉のとおり比叡山宗教サミットの対話と相互理解に基づく取り組みが回を重ねるごとに大きな成果をあげ、ますます重要な役割を果たしてられました。ここに改めて深く敬意を表します。

その証として今回ワールドピースベルアソシエーション本部より、二十年間祈りを続けてきた日本の宗教者に対して国連本部の鐘と姉妹となる「世界平和の鐘」が寄贈されたことは言うまでもありません。この鐘の響きが今後、人々の心を鎮め、平和を呼び起こすものとなるよう、切に願うものであります。

世界各地では、紛争、民族対立、環境破壊、貧困など人類の平和を脅かす問題が山積しており、私たち平和を願う宗教者は常にこうした問題に立ち向かっていかなければなりません。その意味においてこのたびの「和解と協力―宗教・民族・国境を越えて―」をテーマに開かれたサミットは、真に時宜を得た集いでありました。そし

て、この集いの成果を生かすためにも今回の「比叡山メッセージ」を真摯に受けとめ、一人ひとりが実行に移すよう努めたいものです。

宗教者の平和を願う国際的な会議は世界各地で開催されていますが、比叡山宗教サミットのように毎年八月四日午後三時三十分と決まった時間に宗教者が一堂に集い、二十年間平和の祈りを捧げているのは他に類を見ない大変意義深い行いであります。この「祈り」こそ宗教者にとって、決して忘れてはならない原点であります。敬虔な祈りを根幹とされている比叡山宗教サミットは、今後さらにその精神が受け継がれていくと信じてやみません。

最後になりますが、本年二月に主催団体である日本宗教代表者会議が結成され、実質五ヶ月という短い準備期間にもかかわらず、お役を担われた宗教指導者の先生方はもとより、事務局の皆さまの献身的なご努力によって二十周年に相応しい実り多き集いとなりましたこと、この場をお借りして心より感謝申し上げます。

日本宗教代表者会議運営委員長

妙智會教団理事長 宮本けいし

比叡山宗教サミット20周年記念

世界宗教者平和の祈りの集い

発行日

平成二十年三月三十一日

発行所／発行人

滋賀県大津市坂本四六二

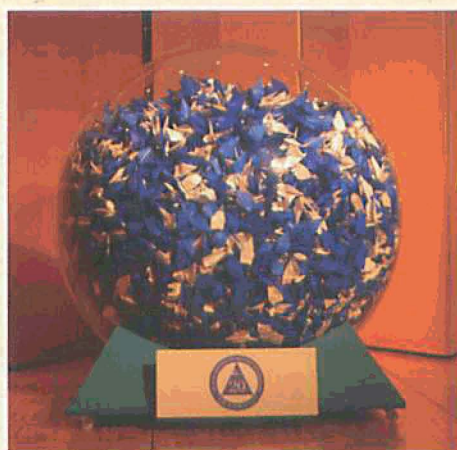
天台宗務庁内

日本宗教代表者会議

電話〇七七(五七九)〇〇三三

印刷所

ヨシダ印刷株式会社



日本宗教代表者会議

THE JAPAN CONFERENCE OF RELIGIOUS REPRESENTATIVES